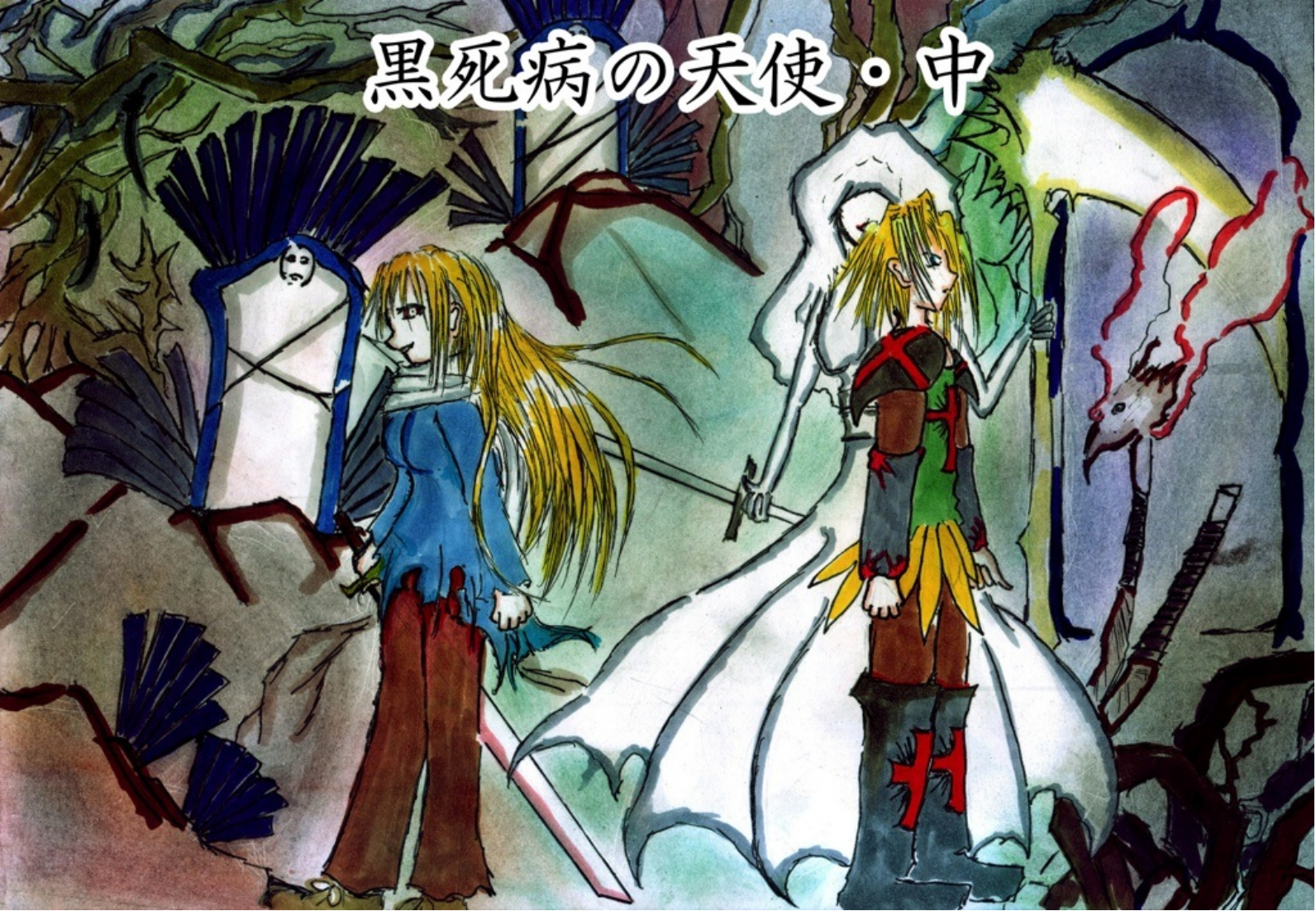


黒死病の天使・中



登場人物紹介

ルブル 世界破壊の組織「ダート」を創設する。 魔女 能力 カラプト
世界の片隅にて森に囲まれた魔女の城に住まう。
メアリーとは恋人関係。

メアリー 魔女の召使 能力 マルトリート
世界破壊の組織「ダート」を創設する事を主であるルブルに提案する。
魔女の館にてルブルの召使をしている女。

同性愛者。
ルブルとは恋人関係。

グリーン・ドレスの裏切りにより、首だけになる。

セルジュ 能力 映し鏡

ダリアという女に失恋し、夜の街にて後を付けていた処、
メアリーに興味を抱かれて、
ダリアと共にさらい、ダリアの肉体に自身の脳を入れられて、
恋する女の肉体を得た男。
組織「ダート」のメンバーになる。

首だけになったメアリーへ貢献する為に、
自ら、単身、アサイラムへと乗り込む。

アイーシャ 能力 ネクロ・クルセイダー

ルブルの作り出すゾンビの集団と、
幻影使いメアリーに敗れ、敗北し、
魔女の城にて、メアリーによって玩具にされる。

グリーン・ドレスの裏切りによって、ルブルの死体の城は焼かれ、
グリーン・ドレスとアイーシャは共に組む事になる。

ケルベロス 能力 アケローン

黒いコートを纏った筋肉質に精悍な顔の男。
能力犯罪者を収容する「アサイラム」の暫定的所長を務めている。

インソムニア 能力 ダンス・マカーブル
能力者ギルド「ドーン」の強力な能力者の少女。
ゴシック・パンクのファッションに身を包んでいる。

グリーン・ドレス 能力 マグナカルタ
炎使いの女。
先の戦闘でボロボロに傷付き、川沿いで倒れていた処をメアリー達に助けられて、
「ダート」のメンバーに加わる。
赤い髪に、竜の鱗のような甲冑を身に纏っている。

イズルダ 強大な力を持つ人型の生体兵器。 能力 イーティング・スター
大柄の男の姿をしている。

ヴェルゼ 能力 ディアブロ
アサイラムに封印されていた男。
アサイラムは基本的には囚人を「更生」させる為の機関だが、
どうやっても、更生不可能とされて、アサイラムの奥底に封じ込められていた狂人。

メビウス・リング 能力 ウロボロス
能力者ギルドである「ドーン」の創設者。
人間サイズの黒いドレスを纏った金色の巻き髪をした球体関節人形。
(他、登場作品、ゴシック・アトミー、ヴァンパイア・パロールなど。)

デス・ウィング 能力 ストーム・ブリンガー

闇の世界で骨董屋を開いている謎の女。人間で無い何か。
汚らしいニットの服に、くしの通っていない長い金髪をしている。
ドーンVSダートの戦いには、
静観を決め込んでいるみたいだ。

ホビドー 能力 アシッド・フィールド

ドーンのハンターである青年。

偵察を主に担当としている。

イゾルダが作り出した巨大生体兵器の始末へと足を運ぶ。

スロープ 獅子の頭をした大男。ホビドーの相棒。

得物は巨大な戦斧。

エア 宗教の家庭に生まれた男。その力によって、両親や街中の人間を虐殺する。 能力 ホ

ーリー・ドラゴン

ミソギ 武器商人。多国籍企業、軍産複合体を率いている、死の商人。

ニーズヘッグ 能力 アビス・ゲート

ルブルが召喚した、強大な力を持つ、黒きドラゴン。

第七章 大地の癌、イゾルダ

インソムニアは、しばらく様子を見るといって、何処かへと雲隠れした。

ケルベロスは、彼女の奔放ぶりに呆れながらも、アイーシャ達の取った行動に関して、丸二日ばかり費やして考え込んでしまった。

自分が、誰よりも不甲斐無かった。

きっと、彼女達は、何かしらの覚悟の下で動いたのだろう。

それだけは信じたい。

自分は、あの二人の足元にも及ばないような気がした。

だから、もっと強い下において、戦わなければならない。

これから戦う相手は。

説得なんて、通じるものなのだろうか、分からない。

ケルベロスは、拳を握り締める。

自分は、きっと今、挑戦者だ。そういう存在なのだと思った。

イゾルダを倒す。

彼の能力を止める。

それが、自分が為すべき事なのだろうから。

十

『黒い森の魔女』。

ドーン of 者達ならば、この店の存在を知っている。

“暗黒の地”から行ける場所だ。

そこは、人ならざる者達の生きる場所だった。

メビウスが、そこを訪れるのは余り行わなかった。

どうにも、この店の主人に対して、それ程、良い感情を持っていないからだ。

それは、デス・ウィングという女が出している店の名前だった。

メビウスは、店の中へと入る。

すると、ろくに客に興味を示さない、汚れた長い金髪をした、煤けたニットのセーターの女が、本に読み耽っていた。

そして、彼女はメビウスの姿を見つけると、恭しくお辞儀をする。

「おや、いらっしゃいませ。色々なものが揃っていますよ」

店の中には、不気味で奇怪なものが陳列されている。

奇形的な怪物の剥製、魔術儀式に使うオイル。邪悪なオーラを放つ短剣。

左回りに動き続けるアンティーク時計。銀色の拳銃と弾丸。人の形を模した毒草。

そういったものが、店の中には雑然と並んでいる。

「私の手足の代わりになるような部品は無いか？」

彼女は、淡々と、店の中にある品物を眺めながら訊ねた。

デス・ウィングは、それなりに高額な料金を述べる。

メビウスは、小切手を差し出す。

デス・ウィングは、店の奥から、二つの細長い箱を取ってくる。そして、箱を開けると、メビウスの肉体に接合出来そうな、球体関節人形の右腕と、右足が入っていた。

直ぐに、取り付けの作業は行われた。

十

この世界に生まれ落ちる事の悲しみを知る。

イゾルダは、自分が何の為に生まれたのか分からない。

様々な人体実験は、人々に何か多くの成果でも残せたのだろうか。

しかし、彼の友人達は、みな拷問され、処刑された。

いや、拷問.....処刑、それは人間に使われる言葉だ。

実験、廃棄、それが彼らに使われる言葉だった。

人の形をしているが、人なんかではない。

それがイゾルダ達だった。

何故、こんなにも、自分達の命は使い捨てられていくのだろうか？

彼は、彼を生んだ、この世界に復讐しなければならない。

分かり合う事なんて、決して在り得ないのだから。

だから、自分の領土を広めていくしかない。そうする事によってしか解決法は見出せないのだから。

自分の力で、世界を蹂躪し、支配権を得るしか無かった。

それこそが、自分を証明する事が出来ないのだから。

彼は、全ての生命を憎悪した。そうする事でしか、自分の自我を保てないのだろう、とも思った。

十

幼少期の頃を思い出す。

ケルベロスもまた、孤独だった。それだけは確かな事だ。

彼は友達というものがいなかった。

ある時、彼は父親に、何故、自分は嫌われるのかと訊ねた。

すると、父親はとても笑った。

そして、彼の頭を優しく撫でた。

ケルベロスは、学校に行っても、除け者にされていた。

街の悪党が、彼の下にやってきて、彼を仲間に引き入れようとする。彼はそれを頑なに拒んだ

。何もかもが、凄く下らない事のように思えた。

正しい事とは、何なのかと彼はいつも思っていた。

道徳だとか、正義だとか、そういうものを学んだのは、意外にも映画やコミックなどの影響が強かった。

彼の父親は、家系は、ドラッグや拳銃を売り捌き、金に困った女達に対して、売春の斡旋をしていた。そして稀に行われる抗争に巻き込まれて、彼の義兄などは死んだりしていった。

ケルベロスは、TVのニュースを見ながら、政治だとか他国の紛争だとかを見ながら、世の中は腐り切っているなあ、と思いながら、それ以上に、自分の家系はもっと腐っていて、自分自身も腐った人種なのだろうと思っていた。

正義、って何なのだろう？

幼少期の彼は、そんな事をずっと思い描いていた。漠然と、スクリーンの中に登場するような、正義のヒーローになれたらいいなあ、とも思っていた。

何か、強い正義のようなものを手に入れたい。

何処かで、彼はそれを強く望んでいた。

理想と現実の違い、メディアが作り出すアイドル的なヒーロー。

そんな者達が、果たして本当に現実に存在するのか、彼には分からない。けれども、きっと自分の考えなんて、もっと単純なものでしかないのだから。

子供時代の反動と、環境による反逆から、今の自分が在る。

自分は、正義だとか、善だとか、あるいは人の良い部分だとかいうものを信じている。

しかし、分かっている。

分かっている、こんな事は.....。

誰か、悪の元凶を倒せば、この世界が平和になるわけなんかじゃない。

人という生命種それ自体が、他人という異物それ自体が、悪そのものなのだから。

だから、どうにもならないのだろうとも思うのだ。

イゾルダは、ケルベロスが見る限り、明らかに人工的に創られた生命体だ。

だから、きっとこの世界を憎悪しているのだろう。

人類の代表のつもりで、イゾルダと戦うつもりなんて無い。

勿論、アサイラムの所長として彼に挑むつもりも無い。

純粋な個と個の対話と、戦いによって行いたい。

自分の全てをぶつけてしまいたい。もしかすると、それによって相手の何かを分かち合えるような気がするからだ。

このままでは、駄目なのだ。

何とかしなければならぬ。

メビウスは、自身の肉体を治しにいくと、“暗黒の地”へと向かった。

グリーン・ドレスと、アイーシャは、ダートを裏切る、とアサイラムへ告げに来た。

そういった動きが、彼の心に揺さぶりをかけたのだろう。

自分は、覚悟が足りないんだ、と今更ながらに、気付かされたのだったから。

きっと、緑の悪魔とアイーシャは、何らかの覚悟のようなものがあって、ダートを離れたのだろう。

自分は、アサイラムにおいて、自分の命を何処かで優先させているような気がする。

もし、自分が命を落としたのならば、秘書であるリレイズ辺りに頑張って貰えばいい。元から、自分には素質のようなものが無かったのかもしれない。所長としての。

だから、自分は戦おうと思う。本気での戦いだ。

ケルベロスは、黒いコートを羽織る。

戦う事によって、何かしらの正義が得られるのならば、そうすべきなのだろうから。とにかく、イゾルダを止めなければ、この世界は食い潰されていくのだから。

十

侵略の為の版図は、既に出来上がっているかのようだった。

イゾルダの作り出す生体兵器は、各地を暴れ回っている。

やはり、イゾルダ本人を倒して、根元を断つしか無かった。

どうしようもない程に、ドーンは疲れ切っていた。

レウケーとマディスは意気消沈していた。

これ以上無いくらいに、打ちひしがれているのだろう。

ケルベロスは、自分が動くしかないと思った。

守りたいものがある。

守らなければならないものがある。

もし、仮に、子供の頃の自分に出会っていたのなら、自分は子供の頃の理想通りの人間になっているのだろうか？ 正義のヒーローなんてものは、とてつもなく陳腐なものだ。人々の娯楽物でしかなくて、勝者に対して作り出された幻想でしかない。

正義なんてものは、幻想に過ぎない。

それだけは分かっている。

けれども、ケルベロスはこの不条理に満ちた世界と戦いたいと思っている。

彼は、ふと思う。

イゾルダ。

もし、彼と心が通じ合えたなら、どうしたのだろうか。

十

そこは、『ディダラ』と呼ばれている街だった。

もはや、街の原型など留めていなかった。

植物や海洋生物の細胞が、一面を覆っている。

もはや、人が住んでいた場所というイメージからはかけ離れてしまっていた。

全ては、イゾルダの生体兵器の苗床へと変えられてしまった場所だった。

此処が戦いの場だ。

そして、イゾルダにとっては、このような場所こそが、もっとも居心地の良い場所なのだ。

ケルベロスは、殺さなければならない、という理念と共に戦わなければならないと思っている。既に、イゾルダがばら撒いた生体兵器が根付く場所は、三十国以上を超えている。

レウケーとマディスも、彼を止める事が出来なかった。

ならば、自分が戦うしかないのだ。

そこは繁殖池にも見え、畑にも見え、あるいは虫の巣にも見えて、あるいはDNAの螺旋図のようにも見えた。

肉食動物、草食動物、爬虫類、両生類、鳥類、昆虫、魚類、軟体動物、それらの様々な生き物達が部分部分で融合して、大地や森、小さな山脈などを築き上げている。

イゾルダは、版図を作っていたのだろう。

この世界を支配する為の地図をだ。

一つのコロニーを形成している。

まるで、異星人とでも遭遇するような気持ちだ。

けれども、言葉は通じる筈だ、という確信はあった。

紫煙が、宙に浮かんでいく。

ケルベロスは、マルボロに火を点ける。

そして一通り、吸い終わると、吸殻はポケットに仕舞う。

これから、戦いが始まる。

ケルベロスは、マフィアの子供として過ごしてきた。父親はドラッグを子供に売り付けるような奴で、叔父は暗殺者とは名ばかりの殺人狂だった。

ケルベロスは、正しさの中をずっと生きられなかった、だから、ずっと生きたかった。

亡き、ハーデスが、もし彼の前に現れなかったならば、彼は一体、どんな人生を歩んでいったのだろうか。考えるだけでも、恐ろしい。

何処かから、声が聞こえてくる。

「ふふっ、ケルベロス。人間ってのは、何なのだろうな？」

そこには、ケルベロスと同じように、漆黒のコートを纏った精悍な顔の男が立っていた。

イゾルダだ。

イゾルダは、筋骨逞しい男の姿をしていた。

彼は拳を振り上げて、ケルベロスの頬を掠める。ケルベロスはにやつきながら、イゾルダの頬にアッパー・カットを返す。その後、イゾルダは廻し蹴りを行う。

ケルベロスは彼の足首を掴むと、そのまま彼を投げ飛ばした。

そして、イゾルダは体勢を立て直すと。

イゾルダの蹴りが、ケルベロスの顔面を穿つ。そして、ケルベロスは返しざま、相手の鳩尾に、深く拳をめり込ませる。

ケルベロスは、血泡を垂らしながら、楽しげに笑う。

「どうだ。人の身体ってのは、面白いもんだろう？」

「そうだな」

右目を隠した男は、静かに顔を上に上げる。

「そろそろだ」

彼の右腕は、大きな食虫植物や軟体動物の吸盤へと変わっていく。

そして、それを刃物のように、目の前の男に向けて振り翳していく。

ケルベロスは、肘から剣を出して、彼の腕を切り落とした。

「拳で来い。あるいは、全力で来い。それが俺の要望だ」

イゾルダは、それを聞いて哄笑していた。

イゾルダの肉体が、崩れていった。

ぼろぼろ、と。

音を立てながら。

カエルや蛇や、イソギンチャクとなって、彼は飛び散っていく。

しばらくすると。

大地が揺れ動いて。

菱形の建造物のようなものが現れる。

その中央は、イゾルダの顔が浮かび上がっていた。

彼は口を広げて、次々と、毒針を持つ羽虫を放っていく。

ケルベロスは、それらを片っ端から、叩き落していく。

ありとあらゆる生物が、彼に問うているかのようにだった。人間は、それ程までに存続価値のある生命体なのか？ と。ケルベロスは拳で答えるしか無かった。彼にはそれだけしか、答えられるだけの回答が無かったからだ。

戦いによって、得られるものは何なのだろうか。

彼は今もなお、それを知らずにいる。

力を手にするという事は、他の力を踏み躪っていく事なんじゃないのだろうか。そういった疑念を拭い去る事が出来そうにない。

闘争はきっと、生物が進化の過程において、培われていったものなのだろう。生命という坩堝の中で、大地や海原という混沌の中で、新たに進化と淘汰が行われ続けていく。

きっと、イゾルダは自分自身が何かになりたいのかもしれない。

人ではない何かに、人に焦られるが、それでも人を嫌悪せざるを得ないのが、彼なのだろう。

まるで、人という生物種以外の生命が、ケルベロスを人の代表として、糾弾しているかのようだった。

蜂やヒルが彼を襲っていく。

ケルベロスは、それらを薙ぎ払う。

彼には、責任があると思った。

人間という種として、生まれた責任がだ。

環境破壊によって駆逐されていく生き物達。

人体実験によって弄ばれ、家畜としてコントロールされる生物達。

人は、生命の頂点なんかでは決してない。

イゾルダには、純然たる怒りばかりが感じられた。

しかし、彼の口調は、あくまで穏やかでもあった。

何処かから、声が響き渡るように聞こえてくる。

「そう言えば、セルジュと一緒に見た映画の中にはアクション物というものがあって、それには正義の味方なんて奴が出てきたな。街を壊す悪を倒していく主人公だ。お前は、きっと、そんな連中に憧れているのか？ 善、正義、守るべきモノ、そういったものが沢山あるのだろう？ 人類の希望を代表してお前は戦っているのか？」

「下らん挑発だな……………」

「純粋に興味があって、訊ねているだけだ。俺には人の思考というものが、本質的には、分からないのだからな」

紫色の酸性の雨が、ケルベロスの全身を焼いていた。

彼はそれらの攻撃もまた、受け止めるつもりでいた。

この雨は、何かしらの生き物の消化液からでも作られたものなのだろうか。

分からないが、尋常でない苦痛がケルベロスに襲い掛かる。

「俺は生々しいまでの偽善、あるいは偽愛かな？ そういうものを受けて、育った。何日か前までに、俺を我が子のように接していた女医は。ある日、俺をただのモルモットとして、処分しようとしたんだ。なあ、ケルベロス、俺の人という種に対する呪詛を、お前は受け止められるのか？」

真摯で、真剣に、彼と対峙しなければならない。

彼を倒さなければならないのだ。

ケルベロスは、全身の『アケローン』を解放させようと思った。

彼の肘や膝から、鋭利なナイフが生えていく。

自我をほんの少しだけ、無くして、獣へと近づけていこう。

力の全てを解放してしまうのだ。

ふと、ケルベロスは、異様な万能感と、解放感に襲われたような気分になる。

全身全霊で、修羅になる。

それだけが、イゾルダに対する敬意だった。

もしかすると、ケルベロスは、彼に“愛”などというものを教えたかったのかもしれない。教えられないようなものなのだが、教えたかった。あるいは、情、というものを知って欲しかったのかもしれない。

全ては、何をどう、言葉にしてよいのか分からなかった。

イゾルダは、体内で、様々な毒素を精製しているみたいだった。

それらが、ケルベロスの全身に絡み付いていく。

様々な生き物の毒物から生成したものなのだろう。しかし、それは彼には効果が無かった。それに対しては、あらかじめ、アサイラムの防御専門の能力者によって、毒素が体内から、排出さ

れるように封じられていた。

イゾルダは、必ず、毒を使ってくるだろう。それは致命的だったから。

だから、どうしても、その対策だけは行わなければならなかった。

けれども、ケルベロスはやはり、彼に対して、全力で挑もうと考えていた。

見ると。

いつの間にか。

霧と共に、新たな生物が現れる。

巨大な二足歩行する爬虫類が、大地を踏み締めていた。

まるで、そいつは、肉食獣型の恐竜のような姿をしていた。

その怪物の尾が、ケルベロスの肉体を薙ぎ払おうとしていた。

彼は、その爬虫類の攻撃を、避け続ける。

そして、おもむろに、全身から、刃を出して、その怪物の足首を切り刻んでいく。

怪物は倒れる。

そして、霧が晴れた先には。

イゾルダは、再び、人の形をしながら、ケルベロスの前へと立ちはだかっていた。

イゾルダの容姿が、痩せた体躯から、太った体躯、以前よりも、遥かに筋骨逞しい男へと変わり、黒人から、白人へ、そして黄色い肌の人種へと変わっていく。

ありとあらゆる生命の模範。

そう、人もまた、家畜であり、食物連鎖の一部でしかない。

あるいは人という種も、この世界の犠牲でしかないのだと。

イゾルダは、分かっていたのだ。

イゾルダは、拳を振るっていた。

それは、酷く重かった。

ケルベロスの右腕が砕け、肋骨がへし折れていく。

ケルベロスは、修羅のように、悪鬼のように。

いつしか、自らの自我を消し飛ばしていた。

彼の拳は、イゾルダの頭蓋に深々と突き刺さっていた。

「ケルベロス、お前は地獄の門番よりも。天の国で祈りを奉げている方が相応しい。俺はそう思う。ケルベロス……………ありがとう」

ケルベロスの振った拳が、イゾルダの頭蓋を叩き壊していた。

イゾルダもまた、インソムニアと同じように、脳という器官が致命的な弱点みただった。彼の生命は終焉へと向かっていく。

最後の彷徨であるかのように、イゾルダは死に際に、三つの犬の頭部を作り出していた。まるで、それは神話の冥府の門を守る犬の怪物そのものだった。

それらは、次々と、ケルベロスの脇腹に、そして両脚へと喰らい付いていく。

ケルベロスは、脇腹の犬の怪物を何とか引っぺがすが。

残った二つの犬の頭が、彼の両脚の骨を、ぐちゃぐちゃにへし折って、靭帯を裂いていった。

しかし、しばらくして、彼の両脚を噛み千切ろうとする頃には、どうやら、動きを止めてしまっていた。

イゾルダは大地に倒れて、沈黙していた。

それと同時に、ケルベロスの両脚を喰っていた犬も、顎を離して絶命する。

辺り一帯にある生体兵器達が、彼の死に呼応するかのようになり、静けさを帯びていく。

ディダラ全体が、静謐へと包まれていく。

人工生命体である、イゾルダは命を終えた。

それは、まるで瞬く、花火のようだった。

命とは、そんなものでしかないのだろう。

いつの間にか。

ケルベロスは、一人、涙を流していた。

熱い温もりを欲した男は、こうして息絶えたのだった。

気付くと、天を見上げると、青空が広がっていた。

第八章 映し鏡のセルジュ

セルジュは自分の映し鏡の能力は、一体、何をしているのだろうかと思う。

他人の精神を映して、それを破壊しているのだろうか。しかし、セルジュの能力の場合は、映った相手が、割れた鏡通りに砕け散ってしまう。

もし、他人の魂というものを鏡の中に映し出すものだとするのならば……。

魂なんてものは、在るのだろうか？

では、ダリアの魂は、一体、何処へ行ってしまったのだろうか。

分からない、何もかもが、分からない。

いつまでも、いつまでも暗い密室の中へと埋没しているような気がする。

何処まで行っても、彼女を理解する事なんて叶わないのだろう。

そう思うと、どうしようもない程の倦怠が押し寄せてくる。

自分の全てが、無価値で、無為で、無力でしかないのではないのかと思えてしまう。

自分が見ている、鏡の奥には、誰がいるのだろうか？

一体、何が自分を覗き見ているのだろうか？

深淵を覗く者は、深淵にもまた、覗かれている。

そう、とてつもない程に、寒気ばかりが迸ってくる。

何もかもに、苛まれていきそうで、酷く怖い。どうしようもない程に怖い。

きっと、自分は、停滞しか望んでいなかった。ダートは自分の居場所なのだから。だから、物事が動いていく事なんて、まるで望んでいなかった。

メアリーの姿が、この両眼から消えていきそうだ。

どうしようもない程に、彼女が霧のようになって崩れ、消えていく。

それが、とてつもなく酷く怖い。

ダートは楽園だった。

いつまでも、いつまでも怠惰で停滞な空間の中にいたかった。

ドーンを襲撃するまでの、三ヶ月間、彼はきっと今までの人生の中で、一番、幸福だったのかもしれない。そして、その幸福をずっとずっと望んでいる。

停滞こそが、彼には意味があった。

塞がれた部屋の中こそが、至福の時間だった。

そうなのだ。

何よりも、怖いのは、幸福を壊される事なのだから。

未来こそが、一番、果てしなく怖いものなのだから。

そんなものは、まるで必要無かった。

永久に止まってしまった時間の中で、生きたかった。

きっと、それだけが幸福なのだろうから。

もう、起き上がりたくない。

未来なんて、腐っていくに決まっている。

セルジュは起き上がる。

自分はどのくらいの時間、寝ていたのだろうか。まるで分からない。

ただ、頭を強く打ったような気もする。

ぼんやりと、ルブルのカラプトが操る死体達によって、焼け爛れていく館から、逃れる事が出来たのだけは憶えている。

そうだ、……………グリーン・ドレスとアイーシャが裏切った。その事も思い出す。

どうやら、静かな森の中で眠っていたみたいだった。

地面は草地だ。岩一つ無い。

周りを見ると、ルブルが浮かない顔で座り込んでいた。

「おいっ、どうしたんだよ？」

「メアリーが中々、復活しない……………」

ルブルは、手に持っていたものを、セルジュに見せる。

それは、首だけのメアリーだった。

ぴくりとも動かない。

「おいっ、待てよ……………」

「慌てないで、既にメアリーには。私のゾンビ化の処置を施してある。けれども、彼女の精神は、暗く深い闇の中から、まだ帰ってこないみたい」

セルジュは、わなわなと震えていた。

彼女がいなければ、自分の心は崩壊してしまうのではないか？

此れまで、何かしら持っていた罪悪感に押し潰されずにいたのは、メアリーの存在が強かったからだ。

「クルーエルが無事だったから、良かったけれども。緑の悪魔とアイーシャ、あの人達、本当によくもやってくれたわよねえ……………」

そう言いながら、彼女は大切そうに男の子の人形を握り締めていた。

そう言えば、この人形は、彼の弟だ。

その正体が、一体、何なのかは分からないのだが……………。

「それから、もう一つ……………」

ルブルは、浮かない顔をしていた。

「何だよ？」

「イゾルダが死んだみたい……………」

セルジュは両膝を付く。

そして、怒りなのか、悲しみなのか、あらゆるものがごちゃまぜになった感情が押し寄せてくる。

大切な友達だった。それは確かだ。

「生き返らせないのかよ？」

「死体があったとしても、それはもうイゾルダじゃない。私のゾンビ化処置は、死んでいった精神まで呼び戻すものじゃない。それに、予め、メアリーにはゾンビ化を進行させていたけれども。イゾルダは違う。セルジュ、死んだ人間は、本質的には生き返らない。私はあくまで、物質として、機械の部品のように、死体を道具や素材として扱っているだけ……」

ルブルは、淡々と、自分の能力の限界を述べる。

「誰だよ、殺した奴は」

「……連絡用の端末から聞く限り、ケルベロスだって聞いている」

そう言って、彼女は、肩に乗っている鳥程の大きさのオウムのような喋り方をする人間の頭部に翼が生えた怪物を、撫でる。どうも、そのような怪物を、彼女はあちらこちらに放って、様子を伺っているみたいだった。

セルジュは、あの筋肉質の男の顔が、ちらついて離れない。

「今、私は残った死体を集めて、塹壕を掘って、一時的に小さな家を作ろうと思っている。大体は、緑の悪魔に壊されちゃったんだけど。私達が入る家と、家具くらいの死体なら、残っている筈。取り合えず、しばらく体勢を整えましょう……」

セルジュは、怒りにわなわたと打ち震えているみたいだった。

「ケルベロス、殺しに行つてやるよ」

「ちょっと……」

ルブルは慌てる。

セルジュの眼と声は本気だった。

彼を止める事は出来ないだろう。

ルブルは、すぐにそれが分かった。

セルジュは、夜の森を歩き出し、ルブル達の下を離れて行こうとする。

「何処に行くのよ？ セルジュ」

「だから、ケルベロス殺しに行く。アサイラムだ。俺はイゾルダから、いつかの彼の作り出した生体兵器の場所を教えられているんだよ。あの野郎、ふざけやがって、やっぱり、俺はあいつは大嫌いだ。殺してやる、この俺が殺してやる……っ！」

本気の眼をしていた。

ルブルは、彼の力の強さも知っているが、同時に、彼の肉体の脆さも知っていた。

普通の人間の女性と同じ程度の身体能力しか、無いのだ。

「分かったわよ。止めないから、私も戦力を貸してあげる。無理に倒そうとせず、そうね……アサイラムを混乱させるくらいに止めておいて。貴方じゃ勝てないでしょうから」

セルジュは地面に唾を吐いて悪態を付いた。

ルブルには、どうしても彼を止められそうに無かった。

セルジュは、イゾルダが生体兵器を隠している場所へと向かうと告げて、出て行った。無謀としか、彼女には思えなかった。

ルブルは、彼まで死なない事を祈るばかりだ。

それから。

それから、大体、四、五時間くらいが経過した頃だろうか。

遠くから、何かが飛んでくる音が聞こえてくる。

ルブルは身構える。

しかし、すぐに、その波長を思い出す。

邪悪な波長を持つ者だった。

ルブルは、彼に期待していた。

もう少し、早く来てくれればよかった、とも思った。

それは、彼女が大釜を通して、知り合った者の気配だ。

そいつは、二人の前に現れた。

背中に生えた翅を閉じる。

腐食したような緑の髪に、拘束衣のようなガーゼシャツを纏った男だった。

「貴方の名前はなあに？」

「僕？ 僕はヴェルゼ。前に名前を告げたよね？」

「そう、ヴェルゼね。宜しく、私がルブル」

ヴェルゼが、ひゅひゅっ、と裏返ったような笑い方をする。

そして、こりこりっ、と、おそらくは森の辺りで取ってきたであろう、虫の幼虫のようなものを美味しそうに、口に入れて食べていた。

「裏切り者達の方は、僕が殺してあげるよ。とっっても、楽しそうだし」

ルブルは彼の顔をまじまじと眺める。

「分かったわ、行ってらっしゃい。居場所なら、凡そ、検討が付いている。メアリーが、アイシャの体内に残していったものもあるしね」

ルブルは、くっくっ、と笑う。

この男には、充分なまでの強さがある事を、ルブルは直観的に理解していた。

ヴェルゼは、うやうやしく頭を下げると、メアリーが残した通信機を、ルブルから受け取り、何処か遠くへと飛び去っていく。

もし、ヴェルゼが、裏切り者二人を倒せずとも、大打撃を与えられたのならば僥倖ものだった。

後は、ひたすらに、セルジュの無事を祈るばかりだった。

十

イゾルダは形見のように、とても役に立つ生体兵器を幾つも残してくれた。

だから、彼の意志を次ぐ為にも、それらを有効活用しようと思った。

セルジュは、カメレオンのように、周辺の景色に同化する生体兵器を使って、此処まで来たのだった。

アサイラムだ。

来るまで、それ程、手間は関わらなかった。

何だかんだで、此処の警備は手薄だ。

並の能力者ならば、此処に来るのは、至極困難なのだろうが、生憎、ルブルも、そしてイゾルダに至っては、彼の作り出す兵器だけで、こんな場所、安々と訪れる事が可能なのだ。

そして、ルブルの真似をして、特殊な者達だけが聞き取れる音波を、生体兵器に放たせながら、セルジュは、アサイラムを徘徊していた。

アサイラムは島国だ。建物以外にも、外に出れる囚人達や護衛のハンター達が、リゾートのように使ってもいる。

ある建造物の窓を割って、セルジュは中へと進入して、囚人達の記録を眺めていた。

そして、少しだけ苛々したような顔になっていく。

此処に突入して、約四十分、そして、この部屋の中に進入して、約十五分が経過していた。彼は窓を閉め、F-1546と呼ばれる生体兵器の中から、細長い黒い鞆を取り出し、窓際に立て掛ける。

しばらくして、二人の男が部屋の中へと入ってきた。

「お前らは、何だ？ 一応、俺が“呼んだ”んだが」

ヴェルゼは、グリーン・ドレスとアイーシャの討伐に向かっている。

イゾルダが死に、アイーシャとグリーン・ドレスが裏切り、メアリーに重症を負わせてしまっていた。

明らかに、ダート側の戦力は不足していた。

此処に“掘り出し物”が無いかセルジュは、探しにやってきたのだった。

「俺の名前はフログマン」

そう、二人の内の一人である、小太りの男が答えた。

「俺の名はピュロマーネ」

そう言って、針金のように細い赤いシャツの男がくるくるっ、と全身をくねらせる。

そして、彼らが自己紹介した後に、更に三名の男達が部屋へと入ってきた。

セルジュは面倒臭そうな顔になる。

「で、お前ら、何が出来るんだよっ？」

フログマンは、口から泡を吐き続けた。それが地面に落ちて、地面が溶け崩れていく。更に、彼は口の中から、長い舌を取り出して回す。更に、彼は背中から、蝙蝠のような翼を生やしていた。

「俺の方は、何でも燃やせるぜ」

ピュロマーネと名乗った男は、辺りに炎を弾を撒いていく。そして、彼自身に、炎の蛇が撒き付いていく。

「何だ、つまらねえなあ。イゾルダやグリーン・ドレスは、もっとずっと凄かった。お前らは足元にも及ばない、ゴミなんだよ。何なら、全員、纏めて俺を殺しに来いよ」

それを聞いた能力者二人は、怒り出して、セルジュへと襲い掛かろうとする。

それぞれ、溶解液を投げるべく、炎で人体発火を起こすべく、能力を振るう。

動かなかった他の能力者三名は、一瞬にして、信じられない光景を目の当たりにしていた。セルジュが、背後の窓ガラスを、肘に纏った鉄甲で叩き割る。すると、ガラスに映った二人の能力者がバラバラに碎け散っていく。フログマンと、ピュロマーネの死体を見て、セルジュはつまらなそうに他の三名を眺めていた。

能力者三名は、茫然自失としながら、散らばって、細切れに碎け散った死体を眺めているのだった。

「おい、どうするよ？ お前らはどうする？ 俺は今から、ケルベロスの処に行くんだが、付いてくるか？ 生体兵器F-1546の音波を読み取ったって事は、てめえらは、汜濫分子の才能がある奴らなんだろう？ こんなものなのかよ？ 馬鹿にしゃがって」

そう言って、セルジュは、他の三名を押し退けて、部屋を出ようとする。

既に、この部屋内にて、アサイラムの見取り図は入手していた。

ふと、セルジュは部屋の扉を開ける途中、三名の中にいる男をまじまじと見つめる。

セルジュは、手にした犯罪者のファイルのコピーを眺めていた。

この男の名は、カーカス。殺害数は六名。

「お前、カーカスだろ？」

「そ、そうですが……」

そう言って、その男は答えた。仏頂面で、顎鬚が濃い男だった。

「お前、俺と似ている」

セルジュは、カーカスの顔を、まじまじと見つめていた。

「浮気した女を張り付けにして、少しずつ切り刻んでいったんだっけ？ 何日も、死なないように。お前、爪を操る能力者なんだっけ？ お前の爪の斬撃を食らうと、血が止まって、苦痛だけが続いていくんだよなあ？ そして、お前は振った女の浮気相手の男と、過去にその女が付き合っていた男四名を似たようなやり方で殺害した、と。まあ、普通の犯罪者なら、矯正不可能なんだろうが。アサイラムじゃあ、よくいるよなあ、そして、お前は模範囚とやらなんだっけ、すげえな」

「ははっ、こんなお嬢さんの下に付くなんて、大歓迎だよ」

「そうかよ、ちなみに、俺は男だよ。一応な。身体は女なんだが。まあ、お前と同じように、嫉妬深くて、好きな女の身体をぶん取ったんだよ」

そう言って、セルジュは今度こそ部屋を出ていく。

カーカスに続いて、残りの二人も、どうやらセルジュに付き従いたいみたいだった。

セルジュは、鼻を鳴らして小馬鹿にししながら、部屋を出る。

十

セルジュは、通路を歩き続ける。

しばらく歩いた処だろうか。

右と左のT字路へと突き当たる。

確か、地図によれば、医務室は右の方だ。右に行けば、ケルベロスがいる筈だ。

いなければ、探して殺すまでだ。

彼は三名の部下を引き連れて、そのまま右の方へ向かおうとする。

しかし。

左の通路から、三名の男が現れた。

三名のうち、真ん中の男は知っている、確か、リレイズという男だ。

リレイズという男は、凜然とした顔で、セルジュ達を吟味していた。

彼は、確か、ケルベロスの、いや、歴代アサイラムの所長の秘書をやっている男だ。

リレイズは、無言で四名を見下げるような視線を送っていた。

「はっ、そこをどいて貰おうか」

セルジュから見て、リレイズの右側に立っている男は、巨大な槍を構えていた。

槍は、旋風のように振り回されていく。

左の方の男は、針が無数に生えた鉄球を手にしている。

処刑人、始末人、という言葉が、セルジュの頭の中で駆け巡るが。

彼は、一笑する。

「おい、てめえら、此処はやって貰うぜ。俺は先に行く」

リレイズが、懐から、二挺の拳銃を取り出すのと、セルジュが持っていた真っ黒なバッグを開けるのは、同時だった。だが、やはり拳銃の攻撃の方が早かった。

拳銃の弾丸が、一人の男の頭蓋や首、胸元へと正確に撃ち込まれていく。

セルジュは咄嗟に、味方の一人である痩せこけた男を盾にしていた。

その男は、自身の能力を出すまでもなく、ただ単に、セルジュの使い捨ての道具となってリレイズに処刑されていく。

漆黒のバッグの中から、巨大な右腕が現れる。

それは、死人の皮膚をした右腕だった。

ルブルが、彼を気遣って、持たせてくれたものだった。

その腕が、リレイズの撃ち込んだ銃弾を防いでいく。

セルジュは、背後にいる男を見る。

小柄な男だ。彼は名前を訊ねた、フラッパーと言うらしい。どうやら、彼の能力で、この場を切り抜けてみる、との事だった。セルジュは人差し指を立てる。

すると、辺り一面に、セルジュと、フラッパー、カーカスの分身が現れる。

リレイズと、彼の側近は戸惑っているみたいだった。

セルジュは走り続ける。

こんな連中に、構っている暇など無かった。

相手にするだけ、無駄だと思った。

あっ、という間に、五名を通り抜けて、右の通路を走り抜けていく。

観葉植物に囲まれた、真っ白な扉があった。

扉を開くと、確かに、目当ての男がそこにはいた。

十

医務室で、ケルベロスは寝台の上に伏せっていた。

彼は、ぼんやりと窓の外を眺めていた。

イゾルダから受けた傷が治らないらしい。情報通りだ。

セルジュは、つつかと彼の前に出て、せせら笑う。

「俺はセルジュ、って言う。てめえを、殺しに来た者だ。よくもイゾルダをやってくれたよなあ？ 俺は奴と親しかったんだ」

ケルベロスは無言だった。

右腕と胸元、それから両足首に包帯やギブスを付けている。

相当なダメージを受けたのだろう。

やはり、イゾルダとの戦いは、熾烈を極めたみたいだった。

彼は、何か物思いに耽っているみたいだった。

何を考えているのかは、彼にとっては、どうでも良い事だった。

「殺してやるよ、ケルベロス。イゾルダの仇だ。なあ、イゾルダは最期はどうだったんだ？ てめえを恨みながら死んでいったのか？」

ケルベロスは寝台の上でふうっ、と溜め息を吐く。

「奴ならば、安らかに死んでいったよ……」

その言葉を聞いて、セルジュは怒りで頭の皮膚が張り裂けそうな気分になる。

セルジュは、医務室の壁に掛けられている鏡を手にする。

そして、それをケルベロスの前に差し出す。

「てめえは、俺によって殺されるんだよ。観念して、命乞いでもするんだな？」

そう言いながら、彼は勝ち誇ったような顔をしていた。

ケルベロスは自身の寝台の、パイプの部分に触れる。

すると、それは変形して、刃物のような形となって、セルジュの腹を抉っていた。

セルジュは思わず、鏡を取り落とす。

鏡は割れずに、綺麗に地面に転がっていった。

「ああ、畜生……」

セルジュは、再び、鏡に触れようとする。

これで、敵を映して割れば、映った鏡通りに、相手の身体をバラバラに、あるいは、粉々にする事が出来るのだ。

しかし……………

ケルベロスが変形させたベッドの脚のパイプは、今度は、ぐるりっ、と回転して彼の喉元を切り裂いていく。

そして、更に、追撃のように、再び、彼の腹をパイプが引き裂いていく。

そして、点滴台が回転しながら、彼の頭に激突する。セルジュは今度こそ、昏倒寸前になる。

セルジュは口から、大量の血を流し続けていた。

何かを話したいが、言葉にならない。喉からも、血が溢れ続けている。

明らかに、致命傷だった。

セルジュの肉体は、人間女性大でしかない。

だからこのままだと、普通に助からない。いや、おそらくは、治療しても駄目だろう……。

「もう喋るな。……苦しみが長引くだけだ」

セルジュは、両膝を付いていた。

どうしようもない程の、死の悪寒が全身を駆け巡っていた。

十

……俺は本当は、ただの屑でしかないんじゃないのか？

こんな処で、死んでしまうのだろうか。

どろりとした情念が、何度も、何度も、心の中で反復していく。彼はケルベロスという存在が妬ましかった。強壮な肉体を有していて、いつも凜然と構えていた。彼はセルジュの持っていない、何もかもを持っていたような気がする。

どうしようもないくらいに、自分の醜さによって殺されそうだった。

妬む事でしか、自らを肯定出来そうにない。

しかし、妬みのエネルギーとは、果たしてそれ程、悪なるものなのだろうか。

ケルベロスが、憎たらしい。

そんな想いが、頭の中を過ぎ去っていく。

これまでの自分は死んでいたのだろうか。

惨めで矮小なままで、死んでいくのだろうか。

寒い。

とにかく、全身が寒かった。

死の暗闇の中へと落下していつているのだろう。

このまま、自分は惨めに死んでいくだけなのだろうか。

彼は、何も成し遂げていないような気がした。

自分は、何者でも無いのだと思った。

だから。

生きたい、という感情が切実なまでに込み上げてきた。

このまま、何故、自分が死んでいくのか、納得がいかなかった。

ケルベロスが、どうしようもない程に妬ましかった。

どうにもならないくらいに、憎らしかった。

ふと、自分の中の何かが解放されていくみたいだった。

地面を見る、すると、鏡が転がっている。鏡を持ち上げる力は無かった。

しかし……。

窓ガラスには、ケルベロスの姿が映っていた。

窓ガラスは、鏡だった。

彼は、口から血を吐き出しながら、何かに対して祈っていた。

妬ましい。

その感情ばかりが、込み上げてくる。力強いケルベロスが妬ましい、どうしようもないくらいに、妬ましい、憎らしい、何で、自分はこんなに卑小なのだ？ 理不尽でしかないじゃないか？ そう思うと、怒りと嫉妬が、どうしようもないくらいに渦を巻いて、胸を駆け巡ってくる。

何で、自分は脆いのか。

こんなにも、脆過ぎて仕方が無いのか？

ふざけやがって、ふざけやがって、ふざけやがって……………。

最初に、ケルベロスを見た時から、いけ好かなかった。そして、きっとそれはもうどうしようもない程に、運命のようなものなのだろう。

もっと、力が欲しい。

メアリーの役に立てるだけの力がだ。

何かが、彼の奥底から這い上がってくるみたいだった。

きっと、それは彼を彼足らしめる何かなのだろう……………。

十

セルジュはおもむろに立ち上がる。

ケルベロスは、意外そうな顔をしていた。

「なあ、もう休め……………」

よろよろ、と彼は、敵の言葉を無視して立ち上がる。

血が一面に撒き散っていく。

セルジュの腕が、ケルベロスの負傷していない左腕に触れる。

すると、ケルベロスの左腕が、ぼきぼきに捻じ曲がり、へし折れていく。

ケルベロスは、激痛で絶句していた。

セルジュの両腕の肘から、刃が生え出していた。

「ケルベロス、てめえの能力は何ていう名前だ？」

ケルベロスは、セルジュの状態を見て、驚愕していた。

「本当は、奪う力が良かったんだが。どうやら、複写する力みてえだな。お前の姿は、窓に映っていた。俺も窓に映っていた。俺の力には、まだその力の先があったんだよ……」

ケルベロスは、まじまじと彼を眺めていた。

どうやら、腹と首の辺りの骨格を作り変えて、致命傷の孔を塞いでいるみたいだった。

ケルベロスも、そういう事は行う。つまり。

「お前の力の名前は何かだよ？」

「『アケローン』だ」

ケルベロスは、痛みに堪えながら、言葉を発する。

「そうかよ、じゃあ、俺はてめえの、アケローンを手に入れたってわけだ。俺も自分の力の名前を、アケローンって事にするぜ」

そう言いながら、セルジュは壁に持たれる。

これ以上は、踏み込めなかった。

眩暈と嘔吐感で、いっぱいだった。

ケルベロスを倒すだけの力が無いような気がする。

明らかに、ケルベロスは、寝台の辺りにトラップを張っている。

お互いに、満身創痍なのだが、セルジュの方がダメージが大きかった。何よりも、肉体的苦痛にそれ程、耐えられそうになかった。

彼は、一度、体勢を立て直す事に決める。

彼は扉を開けて、医務室を出て行く。ケルベロスは、彼を見逃してくれるみたいだった。

扉を開けると、カーカス達が、リレイズによって捕らえられていた。

セルジュは、呆けたような顔になる。

「お前ら、簡単に負けたのかよ」

フラッパーは、困ったような顔になる。

「今回は不問にするって……。出来心だろう、ってだから」

しどろもどろの言い訳だ。

血塗れで、今にも死相が出ているセルジュに対して、リレイズを含めて、向こうは、アサイラムの護衛が三名と、能力者が二人だ。

セルジュは怒り狂っていた。

ケルベロスのアケローンを今すぐにでも、使おうと思った。

リレイズは二挺拳銃を構える。

「じゃあな、私はお前を始末するよ。お前は矯正不可能だろうからな」

セルジュは飛んでいた。

リレイズの隣にいる、槍を持っている男の肩に跨る。男は、槍を振るおうとするが、セルジュを払い除けられなかった。セルジュは男の左側頭部に触れる。

すると、槍使いの男の頭部から、無数に刃物が生え出して、その男は絶命していた。

レード、と、その男の名前らしきものを叫ぶ、針の生えた鉄球を使う細身の男が、セルジュへ向かって突撃してくる。セルジュは、背中から、一回転すると、彼の鉄球に触れる。すると、鉄球が変形していき、その男へと針を飛ばし、男を串刺しにしていく。

カーカスと、フラッパー。そして、リレイズは戦慄していた。

セルジュは、カーカスの前に躍り出る。

「てめえ、カーカス。てめえは、良い人間の振りをしているんだよなあ、ふざけやがってなあ」

セルジュはふと、落ちていた黒い鞆を見つける。

その近くに、切り落とされた大きな右腕があった。

どうやら、リレイズ達は、この鞆がなおも、もそもそと動いている事を警戒して、触れずにいたみたいだった。

セルジュは、黒い鞆のジッパーを開いていく。

すると、中には、右腕の無い胎児のような生き物が詰まっていた。

セルジュは、再び、カーカスの方を向く。

「お前は、俺の眼に適うと思っていたが。このザマだよなあ？ つまり、お前は俺を裏切ったってわけだ、ふざけやがって、ふざけやがって」

セルジュの腹や喉から、血が滴り落ちていく。

リレイズは戦慄していた。銃を取り落としそうになっていた。

「てめえも、アイーシャみたいにしてやるよ。俺がメアリーみたいな事をしてやるんだ」
ずしゃりっ、と。

カーカスの、右手の指が切り落とされていく。

ずじゅり、ごじゅりっ、と、カーカスの右腕が、少しずつ、輪切りにされていく。

そして仕舞いのように、セルジュは、一気に、彼の左腕と、両脚を切断する。

そして、転がっている奇形の赤子を、彼へと投げ付ける。

赤子は変形していき、カーカスの四肢の切断部分へと寄生する。

すると、寄生部分が、狼の頭のようになっていった。

それは、カーカスの意思とは、関係無しに暴れ狂っていく。

狼の頭は、怯えるフラッパーの頭部を食い千切っていた。どうやら、分身で逃れる間もなく、フラッパーは絶命してしまったみたいだった。

リレイズは、何度も、拳銃をリロードしながら、その怪物を撃ち殺そうとしていた。

セルジュは、人間離れした反射神経で、この場を離れていく。

そして、元に此処へと進入した場所へと戻る。

イゾルダのカメレオン型の生体兵器の中には、破壊された人体を治療する器具が揃っている筈だ。

何とか、治療を終えるまで生き延びよう。

セルジュは、そう決心したのだった。

十

内臓の損傷。喉の損傷。

それから、いつの間にか、全身に出来てしまった擦り傷など。

血も沢山、流れた。

生体兵器の寝床の中で、彼は植物のようなものから、治療を受けていた。

複数の枝のようなものが、彼の肉体にオペを施している。

彼は、これから自分はどんどん人では無くなっていくのかなあ、とか思った。

メアリーのように、肉体をゾンビ化させているわけではない。

しかし、今の自分は、アンデッドみたいなものなのだろうか、と思った。

魔女の森に辿り着くまでには、半日以上必要だろう。

それまでに、メアリーの様子が改善していると良いなあと思った。

十

森の中に戻ると、どうやら、ルブルが孔を掘って地下の家を作り上げたみたいだった。

中に入ると、ルブルが微笑んでいた。

見ると、メアリーが上半身まで復元していた。

どうやら、死の暗闇の中から戻ってきたらしい。

ルブルは、酷く安堵しているみたいだった。

メアリーは、セルジュに笑い掛ける。

「あら、おかえり。私、どのくらいの間、死んでいたのかしら？」

魔女の城のメイドは、にこりと笑みを浮かべる。

セルジュは、自慢するように、全身から刃物を生やしていく。

メアリーは、驚いていた。

「ケルベロスの能力を奪ってきてやったぜ、俺はもう、無力じゃねえんだ。身体能力だって、以前よりも、ずっと上昇している。俺はきっと役に立つぜ」

そう、彼は自慢げに言う。

「愛している、メアリー」

「私も愛しているわ、セルジュ」

そう言いながら、二人は抱き締めあう。

ルブルは、二人のそのやり取りを見ながら微笑み、自らも旅支度をする、と二人に告げる。セルジュは、お前がいない間は、俺がメアリーを守る、と言う。彼女は頼もしいわね、と返す。

ルブルが家の外へと出る。

「じゃあ、私は一人である場所へと向かうわ。二人共、私の森を守っていてくれないかしら？」

ルブルは、真っ黒な長髪をはためかせながら、新たに作り出した、白骨ドラゴンに乗り込もうとしている処だった。

十

ルブルは暗黒の地という場所を歩いていた。

この場所は何なのか分からない。

もしかすると、魔界と呼ばれる場所なのかもしれない。

とにかく、彼女はそこを歩いていた。

空には、月一つ無い。深淵だ。

しかし、草陰の所々から、蛍のような光が煌いた為に、道を歩くのには、まるで困らなかった。

遠くには、骸骨で積み上げられた大きな山があった。

生い茂る森には、死体達が踊るように歩いている。

沼地に近付くと、そこにはぼろ舟が浮かんでおり、一人の布切れを纏った女が座っていた。しばらくすると、沼地から腕達が生え出して、女へと掴みかかる。

すると、女の首が外れて、腕達の主達を舟の上まで引き摺り出して、首だけで喰らい尽くしていく。

ルブルには、この空間が、とてつもなく心地良かった。

どうしようもない程に、自分の故郷であるかのように思えた。

愛しい。

そして、温かい。

もしかすると、ルブルは、こんな場所で生まれたのかもしれない。

だから、此処がとても居心地が良いのだろう。

彼女は、峠を歩き続けた後に、生い茂る樹木の下に、その場所を見つける。

『暗い森の魔女』という看板が付けられた店だった。

ルブルは、その中へと入る。

ぎいっ、と不気味な音が響く。

店の中は、収集した人体などが飾られていた。

人を殺した刀剣などが、飾られていた。

「お久しぶりね、デス・ウィング。数十年ぶりかしら？」

「おや、貴方は……………」

「私はルブル、魔女。確か、かつてとても冷たい地で会ったわね」

「そうですね。お久しぶりです。

「何を読んでいるのかしら？」

「ええ、リュシアン・ルバテの『ふたつの旗』という本が手に入りまして。それを読んでいるのです。何でも、ルバテの著作は、フランスのファシスト作家であり、ナチスの幹部が帯を書いた事があるらしいですよ。このふたつの旗、という本は、ルバテが投獄された時に獄中で書いた恋愛小説みたいですね。とてつもない耽美文の中に、時折、卑猥な表現がスパイスのように入り込んでいるのが素晴らしい」

「ねえ、デス・ウィング。貴方が一番、お好きな御本って何かしら？」

「そうですね。……やはり、シェイクスピアの四大悲劇ですかね。勿論、シェイクスピア全般は好きですよ。私はみな的人生と人生の繋がり、劇のように思えて仕方が無い。だから、私はとてつもない悲劇が見たいのです。それくらいしか、私の人生の楽しみはありませんからね」

「あらそう。処で、私はダートという組織を結成して、世界の侵略を始めている。ねえ、デス・ウィング、私に戦力を貸してくれないかしら？ 正直、かなり拙い自体になっているのよ」

「ふっ、私は耳が良いですから。貴方達の行動はある程度、知っていますよ。そうそう、少し前に、黒尽くめの球体関節人形が、私の処にやってきました。彼女の力を引き出す為の肉体の部品をお売りしましたよ。私はあくまで、中立でいるつもりです。ルブル、貴方にも、贈り物をし

ようとは思っています。勿論、相応の報酬は頂きますが」

ルブルは笑った。

慇懃無礼な口調は、以前会った時には無かったものだが、本質的な邪悪さは何も変わってはいない。むしろ、いっそ、彼女をダートのメンバーに加えたいくらいだった。

だが、デス・ウィングはまず動かないだろう。

それだけは、ルブルは分かっている。

「そういえば、『武器商人』が、貴方達の戦いに参戦したがっていました。彼はランキングには無いですが、ドーンを壊したがっている。金儲けがしたいとおっしゃっていましたからね」

そう言いながら、彼女は謎のカードを広げていった。

十

コッペリアは、ヘアバンドを外して、汗を拭う。

継ぎ接ぎだらけのような服は、汗でびしょりだった。

もう何日も、工房の外へと出ていない。

先ほど、彼の主人が入って行って置いていったものがある。

メビウスが、デス・ウィングから購入したものは、欠損した手足だけでは無かった。

それは、黄色い宝玉だった。

どうやら、この宝石を使って、所謂、“残留思念”の残滓のようなものを読み取れるらしい。

コッペリアは、メビウスから、破壊された肉体の部品の一部を渡されていた。どうやら、敵に破壊された時に回収したものらしい。砕け散った手足の部品が、包み紙の中に入れてれていた。これは、かつてコッペリアが創り上げた肉体だった。しかし、メビウスが言う処によると、彼女のウロボロスの能力が沁み込んでいると言っていた。

だから、断片的にでも、読み取れるのではないのか、と彼女は彼に告げたのだった。

まず、コッペリアは宝玉に触れる。そして、その次に、メビウスの手足の部品へと触れた。すると、宝玉が光り輝き出して、コッペリアの意識は別世界へと飛ばされていく。

まるで、上昇と落下を同時に、繰り返しているような感覚に陥っていた。

彼の中に、記憶の奔流のようなものが入り込んでくる。

コッペリアは自分では、自分は能力者では無いと思っている。しかし、自分の作り出すものは、ある種の能力者めいたものがあるのは確かだ。

切実なまでに、彼は主人が買ったものに触れて、その意思を読もうとする。

最初は、断片だったが、徐々に濁流のように頭の中へと広がっていく。

メビウスの部品から読み取れるもの。

それは、世界を支配したい、とでも言いたげな感情だった。

メビウスは自らを創造した者に関する記憶が無いと言う。興味も殆ど無く、ただ、彼女は自分はおそらくは、崇高な何かの目的の為に生み落とされて、自動的に動いているのだろうと述べている。

彼女は、秩序を重んじようとする。

だから、秩序を破壊しようとする者達をコントロールしようと考えているのだ。

だが、彼女の肉体の創造者。

黄色い宝玉から放たれているもの。

おそらく、この宝玉は、元々はメビウスの部品の一部で作られている可能性がある。

どうしようもない思念が、濁流となって、渦となって、彼へと入り込んできた。

そう。

それは、もはや察そう、この世界全体に対する悪意であり、敵意であり、果てしない欲望以外の何物でも無かった。

しかも、コッペリアが読み取った彼女の創造者の意志はむしろ、この世界全体をメビウスがもっとも嫌う、混沌の渦へと引きずり込んでいこうと願うもののように思えた。

その思念は、告げていた。

コッペリアに対して、直接、宣言しているかのようだった。

人間は必要なく、人形や機械が。コンピューターやアンドロイドだけが住まう世界を作ってしまいたい。そんな意志の断片さえ読み取れてしまう。

コッペリアは、メビウスの肉体の一つ一つから、そんな事が読み取れた。

善と悪という概念の中で比較するならば、明らかにそれは、悪なる意志を持つ者だった。

まるで、プログラムのように、メビウスは、ウロボロスは創られているのだった。

彼女を創ったのは、何者なのか分からない。

コッペリアは、その正体を知らなければならない。

メビウスは、何故、執拗なまでに秩序とは何かを知ろうとするのか。彼女にとっては、ドーンもアサイラムも、ある種の自分自身の根源を求める為の旅のようなものでしかないんじゃないのかと思えてしまう。

秩序の対極にあるものは、彼女は混沌としている。

その混沌なるものを、彼女を創造した者は、強く願っているみたいだった。

そう。

そもそも、メビウスのウロボロスは、世界を掌握し、破壊する力なのだ。

彼女は、一度、ある能力者の手によって以前の肉体を破壊されて、コッペリアが彼女の肉体を復元した。以前よりも、大幅にメビウスは弱体化してしまったが、それでもメビウス自身は満足していた。

ウロボロスという力を最大限まで、あるいは限界を超えてまで引き出さなければならない。それが、コッペリアに与えられた、メビウスからの指令だ。

そして、彼女を作った人形作家を超えなければならない。

いつか、自分は、届くのだろうか。

その力を、超える力に……………。

彼は期待で胸が潰れそうだった。

過大で過剰な評価に、どうしようもない程の安心と自己嫌悪を覚えてしまう。

「貴方の心の奥底に私の想いを語り掛けたい」

メアリーは冷たく笑う。

そして、その冷たさは、ある種の狂気を帯びた優しさでもあるのだ。

暗黒の中から、メアリーは瞳孔が開いたような眼で、微笑を浮かべながらセルジュを眺めている。

「ダリアって子、とってもタイプだったんだけど。精神は私好みじゃなかった、何日か前から、私もあの子を追いかけていた。私が買い物に行くルートでよく会う子だったから。だから、ダリアは私も欲しかった。でも、セルジュ、これは褒め言葉なんだけど、貴方の精神の方は私は好きだった。だから、身体はあの子で、心は貴方なら、とっても私好みの女の子が出来上がるんじゃないかって思って……………」

メアリーは、セルジュの心の奥底に、直接、語り掛けてくるかのように言う。

結局の処、メアリーは自分自身のエゴイズムを満たす為に、セルジュのエゴイズムを満たしたのだ。

メアリーは、全力でセルジュの負の部分を進め、肥大化させていった。

セルジュは、自分の闇が深まっていくのが、とても心地が良かった。

セルジュは、今、自分は誰なのだろうか、と思う。

もはや、そんな事など瑣末な事でしかないのかもしれないのだが。

「アイーシャ、とっても可愛かったんだけどね。お痛がとても過ぎた。あの子も私のタイプだった。愛しいくらいに、私に怨嗟を向け続けた」

アイーシャと、グリーン・ドレスは、彼女達を裏切った。

その事実があるだけだ。

「今、ヴェルゼという新たにダートに入った男が、あの二人を追跡している。城を焼かれた際も、ルブルが持っていたアイーシャの体内に入れた発信機を感知する通信機は、生き残っていたから。きっと、ヴェルゼが始末してくれる筈。ルブルが言うには、その男は、それくらいに恐ろしい力を持っているというのだから」

セルジュは、何だか苦笑する。

ルブルも、メアリーも、何処か必死さが込み上げていた。

何が何でも、緑の悪魔とアイーシャを倒さなければならない。

その為になら、信頼が置けるかどうか分からない、ヴェルゼとかいう男に縋っているように見える。

緑の悪魔も、アイーシャも、俺一人で殺してやるよ、とセルジュは言おうと思ったが、流石に、それは見っとも無い口上だけになってしまうので、止める事にした。

第九章 赤い空と、果てしなく黒い色彩の中で

何故だか、とても暗くて寂しい夢だった。

螺旋を描くように、深い夢は続いていく。

ウォーター・ハウスは、確かに優しくかった。

もっともっと、彼の事を、仕草などを思い出したいとも思っている。

グリーン・ドレス。

それは、彼が彼女に対して名付けた名前だった気がする。

“瘴気を纏う者”。

そう、名乗るように言われたように覚えている。

彼女は、柔らかな夢を見続けていたいと思った。

ウォーター・ハウスは、確かに、この地上全てを手中に収めたかったのだ。それだけは、確かだ。彼は切実なまでに、この地上を手に入れたいと願っていた。その理由は、大きな檻のようなものが見えていて、それを破壊してしまいたい、という情念からだと言った。

緑の悪魔は、彼の横顔を思い出す。

どうしようもないくらいに、強く、そして恐ろしい。

暴君という名前は伊達では無いのだろう。

色々な事を教えて貰った。

戦い方だとか、強くなる事だとか。

きっと、この世界の中で、自分は悪以外の何物でも無い。それでも、自分自身を肯定し続けようと。その為の意志を教えられたのだろう。

十

「ねえ、グリーン・ドレス」

「何よ」

二人は、ゴースト・タウンとなった街にいた。

その街は、彼女達が破壊した街で、比較的、元々の形状を保っている場所だった。

しばらくは、此処に潜伏しようと考えていた。

「私は、メアリーの呪縛から解き放たれたのかしら？ やはり、分からない」

グリーン・ドレスは、マニキュアを両手と両足の爪に塗った後、ソファーに横になりながら、乾かしていた。

それにしても、此処は蒸し暑かった。

熱帯夜が続いていた。

冷風を、全身に当てていく。

ルブルの城は、ひんやりと冷たかったから、その温度差が気になって仕方無いのだろう。逆に言うと、気温などに敏感に反応している自分は、人間に戻れているような気もしてならない。

アイーシャは、ふうっ、と、溜め息を付く。

底知れない程に、毎日がとてつもなく怖い。

この部屋も、この空間も、気付けば、まだルブルの城の中で、自分は外に出られないまま夢を見ているんじゃないかと、そしていつか夢から醒めてしまうんじゃないかと思ってしまう。

何か、物音がする。

アイーシャは不安に思っていた。

ルブルとメアリーを、必ず倒さなくてはならない。

運命を捻じ曲げてしまいたい。

かつての自分には戻れない。

けれども、メアリーに怯えて過ごす自分も、もういない、と思いたい。

だからこれは、成長の為の戦いなのだ。

自分が自由を勝ち取る為の戦いなのだ。

未だ、全身を重い鎖のようなもので縛られているような気がしてならない。だからこそ、此処から、解放されなければならないのだ。何処に向かえば、本当の自由が見つかるのかまだ、分からずにいる。だからこそ、きっと見つけなければならないのだろう。

今は、何処を歩いているのだろうか？

今は、何を戦っているのだろうか？

かつて、騎士だった頃の自分は、何と戦っていたのだろうか？

まるで、それが思い出せない。けれども、きっと信念だとか、何だとか。そういったものを手にして、戦っていたのだろうという事だけは確かに、覚えている。

十

一階と二階へと続く階段の辺りだ。

そこが、ぴしりい、ぴしりい、と凍り始めていた。

グリーン・ドレスは、右手を掲げて、炎の弾丸をその場所へと撃ち込む。

煙の中から、虫の翅のようなものを生やした男が、翅を羽ばたかせながら空を飛んでいた。薄汚れた緑の髪をして、淀んだオレンジの瞳をした、拘束衣のようなガーゼシャツに身を包んだ男だった。

「お前の名前は何か？」

アイーシャは訊ねる。

その狼藉者は、不敵に笑っていた。

「僕う？ 僕はヴェルゼ。力の名前は『ディアブロ』。宜しく、ルブル達から君達を始末するように言われているんだ。しっかり、殺してやれってさああああああああっ」

彼は、何処かから取り出した棒付きの大きな丸いキャンディをぼりぼりと噛み砕いていた。棒ごと噛み砕いて、腹の中へと入れていく。

アイーシャは、左腕を変形させて、大きな刃へと変える。

「どうして、私達が此処にいる事が分かった？」

「さあ？　ねえ、君、メアリーという人から、何かされていない？　たとえば、身体の中に何かあるんじゃないの？」

そう言いながら、ヴェルゼは、レーダーのようなものを取り出す。

アイーシャは、怒りに打ち震えていた。

「殺してやるっ、バラバラの細切れにしてやるっ！」

アイーシャは、左腕を勢いよく振った。

すると、左腕が分解されいき、通された中のワイヤーが鞭のように飛んでいき、ヴェルゼの胸元の辺りを切り裂いていく。

ヴェルゼの持っていたレーダーは、彼女の攻撃によって破壊される。

ヴェルゼは、胸元から流れる血を舐めながら楽しそうに笑っていた。

「歌が聴こえるよ。とっても素敵な歌声なんだ。うふふっ、あはっ、あはあはっ、歌が聴こえるんだよ。僕に歌えって言っている」

そいつは大口を開けて、だらだらと涎を垂らしながら、此方を舐め回すように見ていた。

「あなた、覗き魔が、何処から入ってきたんだよ。南京虫か何かなのか？」

そいつは、虫の翅のようなものを生やして飛んでいた。

見る見るうちに。

中二階一面が、凍り付いていく。

グリーン・ドレスは、アイーシャを部屋の奥へ戻るように指で合図する。

「私一人で倒すわ。その方が戦いやすいし。ねえ、アイーシャ。あなたは大好きなアニメの続きでも見ているといいの。ふっ、……あらあらあ？　そんなに激しく迫ってきちゃって、本当に下劣なクサレゴキブリ野郎がっ！」

緑の悪魔は、有無を言わず、ヴェルゼの背中を蹴り飛ばす。

彼女の右脚は、半ば凍り付いていた。しかし、彼女はそれを気にする事なく全身から、熱を発し続けて、凍った箇所を戻していく。

ヴェルゼは、十数メートル先の道路へと勢いよく墜落していく。

口から大量の煙を吐きながら。

グリーン・ドレスは、路地へと着陸していく。

そして、首を横に、こきりこきりと鳴らす。

そして、中指を立てながら、両肘と両膝から、刃のような形の炎を噴出させていく。

襲撃者は立ち上がる。

ヴェルゼは、両眼をくるくると回していた。

そして、懐から飴玉を取り出して、ぺろぺろと舐め始める。

緑の悪魔はそれを見て、不快そうな顔をする。

彼女は、全身を捻らせて、ヴェルゼの顔面へと勢いよく蹴りを叩き付けた。足元が凍るのもおかまいなしに、ヴェルゼは数百メートル先まで吹き飛んで、無人のビルへと激突する。

緑の悪魔は、心の中で舌打ちしていた。

大して、ダメージを与えられていない……。

それ程までに、敵は強靱な肉体を有しているみたいだった。

彼女は、どうやって攻撃を撃ち込もうと考えている矢先だった。

ころころっ、と、近くで、幾つかの飴玉が転がっていた。

グリーン・ドレスは、腹に激痛を覚えていた。

背後から、彼女を撃ち抜いたものを、ヴェルゼは手で掴み取って、口の中へと放り込む。

彼女の腹を貫通させたものは、ただの飴玉だった。

何らかの攻撃によって、ヴェルゼは飴玉を弾丸のように飛ばしたのだった。

「あなたは、何をやっているっ？ 凍らせるだけが、能力の全貌じゃないんでしょう？」

「あはっ、あはははっ、何だろうねええ？」

ぼりぼりっ、と、彼は飴玉を食べ続ける。

いつの間にか、彼はもう持ってきた飴玉を食べ終えたのか、地面の転がった石ころを口に入れて始めていた。

グリーン・ドレスは、不気味に思いながら、一気に勝負を決める事にする。

彼女は、少し距離を置く。

近くには、無人のガソリン・スタンドがあった。

そこに駐車してあった、一台の車を持ち上げる。

そして、勢いよく、車をヴェルゼに向けて放り投げた。

彼女は、給油機を破壊して、全身にガソリンを浴び続ける。

その後、口から、緑色をしたガスを大量に辺り一帯へと吐き出し続けた。

そして、ぱしっ、と軽く指先で火を付けた。

辺り一面が炎に包まれていくと共に、彼女の全身が燃え上がり、彼女の力がパワー・アップしていく。

「一気に、炭へと変えてやるわよ。そうすれば、その失敗した顔面、もう見ずにすむから」

ヴェルゼは、自分を押し潰していた車を押し返す。

彼は、車の部品などを口に入れて食べ始めていた。

緑の悪魔は、その光景を見て、嫌そうな顔になる。

グリーン・ドレスは、炎の剣を作っていく。

彼女が、イグニート・ソードと呼んでいる攻撃だ。

炎の剣を手にして、彼女は、蠅の怪物を切り伏せようとする。

ヴェルゼは、周辺を凍らせ始める。

グリーン・ドレスは、炎の剣を彼に振り下ろすフリをして。

車のエンジンへと撃ち込んでいく。

それが、トリガーとなった。

「『エクспロージョン・バースト』ッ！」

彼女が、先ほど撒いていた自己生成したガスが一帯を覆って、それらを起点にして、周辺にある火薬燃料などが同時多発的に爆裂していく。

この辺り一帯が、吹き飛んでいく。

それは、さながら、小さなミサイルが都心に爆発したかのようだった。

地面に大穴が開き、周辺の建物が瓦礫へと変わっていた。

グリーン・ドレスは首を鳴らしながら、敵の姿を探す。

ふと、視界が反転する。

また、何をされたのか分からなかった。

まるで、身体に紐を付けられて、弾き飛ばされるように。

グリーン・ドレスの肉体は、ビルへと勢いよく叩き付けられていた。

能力の全貌が、まだ分からない。

なので、相手から聞き出すしか無かった。

彼女はしばしの間、思考して、立ち上がる。

ウォーター・ハウスは言っていた。正体不明の能力を使う敵の能力を知りたいならば、相手の性格を、相手の思想を、相手の望みを、相手の過去のトラウマなど、あらゆる情報を探っていくと。

「あなた、何が楽しくて生きているの？」

それは挑発にも聞こえたが、何か本質へと問い掛けるかのような言い方だった。

「僕はお空を飛びたい。高く、高く飛びたいんだ。ずっと、高くね」

緑の悪魔は考える。

空の向こう、空の上、そこには何があるのか。

「ずっと、狭い檻の中に入っていたから。自由になりたかったよ。鳥よりも、高く遠く飛びたかったんだよ。ふふっ、うふふふふ、あははっははっ」

ヴェルゼは、懐から、携帯型のスクリーン付きの通信機を取り出す。

そして、彼はそのスイッチを入れる。どうやら、ビデオ機能が付いているみたいだった。彼は流れている映像を、緑の悪魔が見えるように、まじまじと見せる。

それは、暴君の破壊の映像だった。

何処かから拾ってきた動画なのだろう。もしかすると、アサイラムに保管されていたデータなのかもしれない。

「ふざけるな、私のあの人を汚すな」

「そう？ 僕の信じている人でもあるんだよ。暴君は君だけのモノじゃあない。彼は僕にずっと、語り続けてきてくれた。とっても素敵な事も教えてくれた」

ヴェルゼは、べろべろっと、通信機を舐め始めていた。

「あなたは知っているの？ あの人の笑った時の仕草だとか。ヨーグルト・サラダを作っている時や、焼き上げてくれたココナッツ・パイの味だとか。あなたは何も知らないでしょう？ 訳知り顔で語るな。ふざけるなっ！」

ヴェルゼは、困ったような顔をした。

「暴君は、僕の救世主であればそれだけでいい。そうだね、君は邪魔だね。暴君は僕にとっての純粹悪で正義の味方であればそれでいい。だから、君のようなのは、そのつまりね、異物なん

だよ」

グリーン・ドレスは、怒りで顔を赤らめていく。

体内の漆黒の骨格が、明滅していく。

「気持ち悪いんだよ、ホモ野郎。あなたの立っているソレ切り落として、自分の後ろの穴にでも突っ込んでいろよっ！」

グリーン・ドレスは親指を下に向けて、嫌悪の感情を向ける。

口上以上に、心の底から敵に対して、醜悪なイメージを想起してしまう。

次に受けている攻撃を理解して、彼女は敵の能力を、だんだん理解し始めていた。

息苦しくなっている。

呼吸する事がとてつもなく困難だ。

喉や肺にダメージは通っていない筈だ。それなのに、何なのだろうか、この息苦しきは……。

「宇宙空間を操っている……？」

閃いた。

それも、きっと、彼にとっての“空想の宇宙空間”だ。

凍らせる、という現象は、宇宙空間は絶対零度だとSF小説などに書かれていたりする。実際は、それはフィクションではないかと言われている。また、こいつはきっと重力、引力なども操作している。

おそらく、科学的な知識はまともに無い。

だが、イメージの力だけで、彼の夢想する宇宙空間というフィールドを創造しているのだろう。

呼吸が異常なまでに出来ずにいる。

グリーン・ドレスが、炎は征服の象徴だと認識しているように。

こいつは、宇宙に対する空想こそが、自由の象徴なのだと認識しているのだ。

自然現象を操作しているわけではなく、こいつは、イメージを具現化するタイプの能力者だ。

そのタイプの場合、イメージの強さが強ければ強い程に、より凶悪で悪質な能力へと変化を遂げていく。

なら、此方も、相手の攻撃を予測しなければならない。

次にやってくるであろう攻撃も、段々と読めてきた。

「ブラック・ホールの生成か、太陽の召喚か？」

太陽の攻撃ならば、吸収出来る。相手は、当然、知っている。

なら、当然……。

ヴェルゼの背後に、空間の裂け目のようなものが出来ていた。

それは、丸い球体のようなものだった。

緑の悪魔が、それへと引き摺られそうになる。

ヴェルゼが作り出したブラック・ホールが、彼女の肉体を重力の磁場によって、引き潰そうと迫っていた。

グリーン・ドレスは、この磁場の空間から離れようと飛び跳ねる。

迂闊だった。

それは、空から降ってきた。

あるいは、異空間の何処かから、降り注いできたものなのかもしれない。

それは、岩の塊だった。

燃え盛っている。

隕石だった。

それが飛来して、彼女の後頭部や背中へと次々と、激突していく。

グリーン・ドレスは、地面へと叩き付けられる。

肩や肋骨の辺りに強い痛みが走る。

防御し損ねた。

確実に、頭蓋や背骨、肋骨などにダメージが入ってしまっただろう。

彼女の強化された肉体は、体内を巡る骨が支えている。

だから、骨へと通ってしまったダメージは、かなり大きい。

ヴェルゼは、ぼりぼりっ、とクッキーやスナック菓子でも食べるかのように、車の部品を食べ続けていた。そして、途中で、嘔吐して吐瀉物を周囲に撒き散らしては、ゲラゲラを彼女を見ながら、笑っていた。

「……………畜生、私はてめえのような、ゲロ野郎に負けるつもりは無い」

全身が、暗黒の磁場へと引き摺られていく。

宙にあらゆる物体が舞い上がっていく。

やるしか無かった。

この攻撃を使えって、しくじれば、後が無い可能性もある。

けれども、使うしか無かった。

「『ドラゴン・タイラント』」

グリーン・ドレスの周辺に、炎が集まっていく。

火の粉は、次第に、小さな渦巻きへと変わっていく。

十

××国。××××年。

そこは、ヴェルゼの生まれ故郷の町だった。

街の名前は、どうしても思い出せない。しかし、此処はもう廃墟と化した場所になってしまっているのだ。だから、名前を覚えていたとしても、彼にとっては意味の無い記号のようなものだった。

そこは、余り外側の人間が訪れない場所だった。

砂丘によって覆われた街だった。

この国は、数百万名もの人間達が住んでいた。

ヴェルゼは、此処で、異端児として生まれた。

種族の名前は、確か、トゥラー族。この地にて、聖なる者達を、意味する名前だった気がする。そこは、外界から遮断されて独自の文明を築いている場所だった。

けれども、ヴェルゼは、そんな文明とは無縁の存在で、まともに言語さえも覚えられなかった。生きている事そのものが理不尽で、自分はきっと椅子だとか、食器だとか、そんな類の道具で、道具なのに意識がある、という意味の分からない存在なのだろう、と思っていた。

いつも、星々ばかりを見て過ごしていた。その時間だけが、彼にとっての幸福が許されている時間だった。いつか、自分の殻を壊してくれる存在が現れるんじゃないのかという夢想ばかりを続けていた。けれども、いつしか、そんな希望も打ち砕かれていった。

ある日、暴君はその街に訪れた。

彼にして見れば、気まぐれのようなものだったのだろう。確か、彼が捕らえられてハンターになる前の、ランキングに名前が載っていた頃の出来事だと思う。

ヴェルゼは、窓から、その光景を眺めていたような気がする。確か、針を握って、絨毯を織っていた時だったと思う。爪が割れて、指先が動かなくなっていて、今日のノルマをどう終わらせようかと、悩んでいた時の事だったような気がする。

暴君の前に、数名の街の兵隊達が現れた。

彼らは、動物や昆虫などと、人間の混血のような生き物だった。

俗に言う、ライカン・スローブという種族だったのだろう。

カマキリのような両腕をした男が、まず暴君に襲い掛かる。暴君は有無を言わずに、そいつの腕を掬いでいた。続いて、甲殻に覆われた者が、彼に突撃していく。

虎の頭と爪を持った男が、彼の皮膚を引き裂こうとする。

蜘蛛の頭を持った男が、糸を吐き出していた。

みな、異常なまでの敏捷性と、硬化した肉体を持っていた。

ヴェルゼとは、まるで違っていた。

みな、強靱な力を手にしていた。ヴェルゼは、この民族の忌み子だった。そんな者達の中で、ヴェルゼはただ、家畜として生かされていた。ヴェルゼにまともに言葉を教える者はいなかった。

暴君はトゥラー族の者達を、次々と皆殺しにしていった。

初めて、あの強大な者達を屠り続ける者が現れたのだ。ヴェルゼの頭の中は、真っ白になっていた。

一方的な殺戮が終わった頃だ。

暴君は、途中、飽きた、とだけ告げた。

そして、布に覆われた腹を開いていった。

まるでさながらそれは、漆黒の風だった。暴風雨が神の裁きのように辺りを蹂躪しているかのようだった。この国の住民達、トゥラー族全員を撒き込んでしまった。

ヴェルゼは、その光景を、一つの神話のように思えた。神や悪魔が、人々を裁き続けている。暴君は、強大な天界や地獄の魔王そのものに見えた。

街の者達は、殆ど死に絶えてしまった。

暴君が、殺人ウイルスを、二日半に渡って散布し続けたみたいだった。

しかも、どうやら、遊びながら、多少の加減もしていたらしい。本当ならば、こんな場所、もっと早く滅ぼしてしまっていた事なのだろう。

ヴェルゼは、震えながら、自分を飼っている者達が次々と病に倒れて死んでいった時、いつしかやってきたならず者を心から敬っていた。

そして、気付けば、彼の下へと飛び出していた。

彼は、ヴェルゼを見て、いぶかしんだ顔をしていた。

「お前は、何で、生きているんだ？」

「ぼ、ぼ、僕は、混血種なんです。僕の母親は、父親に無理やり強姦されて、僕は生まれた。だから、僕は……」

「成程、俺の『エリクサー』のウイルスは、此処の純血種のみには感染するように設定しておいたからな。お前は引っ掛からなかったのだろうな」

ヴェルゼにとって、自らの生は、理不尽なものでしかなかった。

何故、自分が生まれてきたのかの意味さえも分からなかった。

ヴェルゼの母親は、父親に犯されて、ヴェルゼを産んだのだった。

彼は異端児扱いをされていた、やっかい者だった。そして、この種族の奴隷として育てられた。まともな食事はずっと与えられなかった。残飯ばかりを与えられて育てられた。時には、生活害虫や雑草、錆びて使い物にならなくなった機械の部品、布の切れ端などを食事として出された。

街の者達からの、彼に対する虐めは酷いものだった。

ただひたすらに、ヴェルゼは、奴隷として、家畜として扱われ続けていた。ヴェルゼには言葉は与えられなかったが、感情はあった。ただ、その感情も、表に出してはいけないものだという事も嫌という程に知らされていた。

暴君は、彼にとっての救い主だった。

殺している姿は、神々しいまでに美しい。

そして、どうしようもないくらいに彼は強かった。

あれ程までに、外の者達から恐れられている戦闘民族であるトゥラー族を、ほぼ無傷で殺傷していく姿は、もはや天空から舞い降りてきた神話の神そのものに似ていた。

光が刺し込んできたのだ。

暴君は、彼にとっての救済だった。

ずっと、彼の下に付いていきたいと願った。

切実なまでに、彼に固執した。

ヴェルゼは、蠅人間だった。

大した力など有していないのだと、嘲られていた。

だから、彼はずっと自分は日陰の下で生きていくのだろうと思っていた。何一つとして、縋る希望なんて無かったのだから。

暴君だけが、彼を救ってくれた。

この閉ざされた箱庭から出してくれたのだった。

ヴェルゼは、暴君を崇拜する。この世界全ての生命に存在意義など無く、全てが土や好物だけになればいいと考えていた。

十

「正義のヒーローってあるだろ、なあ、お前、冒険活劇小説とか、アニメとか映画とかは見るか？」

そう言いながら、彼はごろりと、ソファで寝転がりながら、テレビのリモコンを弄っていた。がちゃがちゃと、DVDを弄っている。

そして、テレビに飽きたのか、ぱらぱらとソファの近くに積んであった本を手にして読んでいた。

グリーン・ドレスは、怪訝な顔をする。

「漠然とは分かるけれども、私には分からないね。何の為に奴らって戦うのかしら？ 他人が大切だとか、仲間が大事だとか、そういう事を言っているんでしょう？ 自分達の住んでいる場所を守りたいだとか」

「俺の友人に、そういったものに憧れている妄想家がいるんだが。彼は、本当にそういうものを目指しているらしい。なあ、ドレス。一步、間違えたら、俺もそういう狂人になっていたかもしれんぞ？ 正義の名を借りて、絶対なる悪と戦うんだ。そいつは、物凄く面白いんだろうなあ」

グリーン・ドレスは、げらげらと笑った。

自分達とは、何処までも程遠い。

他人の不幸に感情移入する事が出来ない。

他人の痛みに共感を覚える事なんて、出来やしない。

二人は、純然たる悪になろうと誓った。

純粹悪になろうと。

結局の処、二人共、ただの大量殺人犯でしかない。

けれども、何処かで幸せを求めているような気がする。

グリーン・ドレスは、自身の快樂や欲望に忠実なままに生きているのとは違って、ウォーター・ハウスは様々な哲学書や学術書などを読んで、自分自身が何かの“概念”のような存在に為りたがっているように思った。

俺は絶対悪になる、それが彼の口癖だった。純粹悪になるとも言っていた。

彼女は、ふと、彼は何処か繊細で何かに対して、怒っているんじゃないのかとも思った。それは、この世界そのものの欺瞞に対する怒りなんじゃないのかとも。

彼が、本質的には、何と戦っているのか分からない。

彼は、どうやら、彼がよく口にする正義や愛や希望という言葉が好きな友人は、とても好ましい相手だと思っているみたいだった。理解されないなりに、彼の言葉を聞いてくれる大切な相手のようにも思えた。

「あのさあ、ウォーター・ハウス。何、読んでいるの？」

「ん、トルストイの全集」

グリーン・ドレスは、首を捻る。

何だか、頭が痛くなりそうな名前だ。

「何、それ。面白いの？」

「ああ、小説は面白い。非常に風景描写や文章技巧が精巧だ。色彩感覚も良いと思うな、映像が見えてくるみたいだ。しかし、この虚無主義者の小説家は、高齢になって、随筆だか、教養本だかの人生論を書くと、極めて下らない事ばかりを語り出した。お前が、ゲロとかおぞましいとか、薄気味悪いとか罵倒している観念とかだな。まあ、なんだ。人生の虚無感に堪えられなくなって、宗教を信じるようになったらしい」

「はあっ、何、言っているか分からない」

そう言いながら、彼女は彼に柔らかい羽毛の入った枕を投げ付けた。

彼は色々と毒を吐きながらも、熱心にその本を読んでいるみたいだった。

「俺はドストエフスキーの方が好きだ。『カラマーゾフの兄弟』はよく読んだ。話の構成はぐちゃぐちゃだが、登場人物の造詣が面白い。俺は、この小説が一般的に、言われているような、人間の英知だとか、愛や平和を願う心だとか。そういった風には読み取ってはいない。こいつは、哲学による狂気を描いてやがるんだ。小説の中のイワン・カラマーゾフには共感するな。もっとも、俺はこいつよりも、よりクレバーで、この地上の道德だとか信仰だとかをまるで、信じちゃいないんだがな」

「だから、何言っているか、分からないのよっ」

彼女は、溜め息を吐いて、頭をぼりぼりと搔く。

そして、小型冷蔵庫を開いて、中にあるアルコールのカクテルを一気に口に入れていく。

ウォーター・ハウスは、冷蔵庫から、アイス・ケーキと紙パックの野菜ジュースを取るように言う。彼女は、言われたものを見つけると、彼に向かって放り投げる。彼はそれらを片手だけでキャッチすると、ジュースを飲み始めた。

「俺の友人は、『白痴』の主人公のような奴だ。あるいは、『罪と罰』の老婆を殺す若造が通っている大学の、性格の良い学友のような奴だ。つまり、性善説だとかを信じている、救い難い愚か者なんだ。しかし、どうやら、俺と奴は光と影なのかもしれん」

グリーン・ドレスは本当に呆れたような顔になる。

どうも、この男は、何処かで、自分の言っている言説と、矛盾している処が多々あるような気がしてならない。

グリーン・ドレスは、ふと、この男の為に、何かしてやれる事は無いかと思った。

何か、ちゃんとした料理でも覚えてみようか。

そう言えば、この男はグルメなのだ。世界各国の料理にも精通している。

美味しいと言わせてみたい。

そんな普通の事を、思ったりした。

「ああ、そうだ。腹が減っただろう。料理作ってやるよ」

そう言いながら、この男は台所へと向かっていった。

そして、パックの米をレンジで温めて、ニンニクや玉葱を刻み、オイスター・ソースで鶏肉を炒めていた。そして、トマトを潰しながら、塩を振っていく。

「何、作っているの？」

「ジャンバラヤ。上手く作れるといいがな」

グリーン・ドレスは、顔が真っ赤になる。

料理は彼の方が、明らかに上手いのだ。

十

……今だけでもいい、アイーシャを守る為に、正義のヒーローごっこをやってやる。こいつは悪だ。敵なのだ。だから、絶対に倒す。

アイーシャは、友人なのだろうか。彼女が死ねば、自分は悲しむのだろうか。

何処かで、自分は壊れてしまっている。

正しさ？ 友愛？ そんなものは、どうだって良かった。

難しい事はどうだっていい。

マグナカルタの“最終必殺技”とでも呼べる、ドラゴン・タイラントを発動させている。

この辺り一帯、全ての熱エネルギーを自分に集めている。

こいつは、全力で殺す。

「私は可能な限りの悪なる行為を行ってきたが、それが私の生きる目的だと思っていた。彼もまた、私にそうであるように言った。けれども、私は今、たった一つの、きっと人として、正しいんじゃないかって思う事をしたと思っている」

数キロ先の熱まで、奪えるだろう。

現象として、彼女自身も、気温を膨大に奪う事によって周辺一帯を、極寒の世界へと変える事が可能なのだ。

「というわけで、死ねよ、悪の怪人っ！ ハリウッド失敗作映画の三流モンスターがっ！」

緑の悪魔は、舌を出して、中指を立てていた。

熱気が上がっていく。

炎が彼女の周辺を、渦巻いていく。

彼女は点滅しながら、剥き出しの黒い骨格を露にしていって。

「私は殺人に対しても、他人の不幸に対しても、何の残悪感も無い。そう、私はこれで良かった」

ウォーター・ハウスに会えた。

そして、だからこそ、アイーシャを守れるのだから。

彼女は、敵の目の前から、一瞬、姿を消す。

次の瞬間。

緑の悪魔は、線路の辺りに置かれていた列車を、さながらヌンチャクのように振り回していた

。そして、それを全速度で、ヴェルゼへと向けて叩き付ける。
これだけの派手な攻撃を与えても、正直、牽制にしかっていないのだろう。
とにかく、敵の肉体が強靱なのだ。
「きっちり完全にぶち殺してやるよ。頭蓋骨を溶かして、黒焦げの脳を引き摺り出してやるよ。その腐り切った脳髓を灰にしてやる。あなたの次はルブルとメアリーだっ！」
原初において、炎は創造と破壊の道標だった。
大地は炎によって包まれていたとされる。
街中が吹き飛ばされていく。
そして、炎の渦と共に、氷点下の世界が襲い掛かっていく。
アイシャのいるアジトは、離れた場所にある。
彼女ならば、ドラゴン・タイラントの渦中にあっても生き残るだろうという機算はあった。
ヴェルゼは、口からネジやガラスの破片を吐き出していく。
「暴君はねえ。みんなのものなんだよ？ 君が独占していたっていうのが我慢ならない。僕のものでもあるんだよ？ 彼は救世主だ。悪として生まれた者達のね？ 僕は生まれた時から、悪だった。みんなそういう言うから、僕を虐め続けたんだよ。だからねえ、悪には悪の救世主が必要なんだ。彼はキリストなんだよ。全ての罪を赦す為のね？」
ヴェルゼは自分の爪を噛み始めた。
「マグダラの MARIA はキリストとくっ付いたわけじゃあない。君はただの売女だった」
「ああ？ きっちり殺してやる、ってんだから。地獄で喚いてろよ。パラノイア」
隕石が、何処かから雨霞と降り注いでくる。
グリーン・ドレスは、それら全てを拳だけで弾き飛ばしていく。
そして、降り注いできた隕石の一つを受け止めて、それを砕いて、焰の弾丸へと変え、ヴェルゼへと放り投げた。
二人は、同じような言葉を同時に言っていた。
「時間よ、もう終わりね」
「時間が来たよ。終いだね」
グリーン・ドレスのドラゴン・タイラントが、辺り一帯を焰の渦へと変えていく。そして、それと同時に、一面の温度が下がり続けていく。
グリーン・ドレスは、全身に焰を纏っていた。
真っ赤な竜のような姿へと変わっていた。
ヴェルゼもまた、形態変化を行っていた。
彼の下へ、電信柱が、車が、家々が飲み込まれていく。
彼は、ありとあらゆるものを飲み込み、喰らっていた。
彼自身が、一個のブラック・ホールへと変わっていた。

アイーシャは、グリーン・ドレスの下へと向かっていた。

何度も、戦いの場所を変えているのか、とても追い付けずにいる。

此れ程までに、彼女の攻撃は早かったのか。

ただ、轟音と、破壊音ばかりはひたすらに聞こえてくる。

アイーシャは、両脚を変形させていく。

アイーシャの脚の裏側は、車輪が付いて、ローラー・ブレードのような形状へと変わっていく。彼女はアスファルトの地面を滑りながら進んでいた。次第に加速していく。

アイーシャは、グリーン・ドレスの下へと向かう途中、完全に頭の中が真っ白になりそうになっていた。二人の戦いが近づくに連れて、街が異界へと飲み込まれていく事が分かる。何故だか、全身が震えている。気温が下がっているのが分かる。

アイーシャは見る。

巨大な赤い竜が翼を広げていた。

凄まじいまでの、竜巻が一带を飲み干そうとしていた。赤い色の竜巻だ。炎が空を、地上を焦がしている。何もかもを喰い尽くさんまでの烈風が激しく一面に踊っている。

そして、赤い竜巻が一瞬にして、収束していく。

まるでそれは、一つの星の終焉にさえ似ていた。

十

ヴェルゼは動物も人間も、大差無いと考えている。

知的生命体ばかりが驕り高ぶっているというのは、彼にとっては欺瞞だ。

動物の世界は過酷で劣悪だ。適者生存がつねに行われている。ある意味で言えば、それは人間の世界よりも、遥かに醜悪なものなのだ。

人間だけが、搾取者であり、驕り高ぶっていると考えている奴もいるのだが。動物の世界の酷さを、ヴェルゼは感じるのだ。それは、ヴェルゼの種族が、人と動物や昆虫の混血種のようなものだったからだろう。

つねに、生命というものは、他の生命と争い、貪り食らい、絶滅さえ望んでいるんじゃないかと考えてしまう。食物連鎖、弱肉強食という自然のルールは、極めて凄惨を極めるものだ。それは、きっと人間の世界にも当てはまるものなのだろう。

ヴェルゼは、種族間で被った虐待の怒りを忘れていない。

その憎悪こそが、彼の生きる根源となっている。

だから、彼は全ての生命が死に絶えた世界こそが美しいと考えているのだ。

人間というものは、ある種の正義感や、宗教観などで、動物に対する強い敬意を持っていたりする。たとえば、環境破壊の果てに動物や植物などが死に絶えてしまった世界を憎む者達も多いと聞いている。しかし、ヴェルゼからすると、そんなものは欺瞞以外の何物でも無かった。彼は動物の邪悪さを知っている。生命それ自体のグロテスクさを理解しているつもりだ。

人間の世界では、支配者がいて、被支配者が存在する。そして、支配者が統治して、悪政の国においては、酷い搾取が行われている。しかし、そんなものは、自然の世界では当たり前の事だ。

スズメバチが蜜蜂の巣に入り込んで、蜜蜂を虐殺するように。

肉食動物のボスが、支配権を巡って同属の雄と殺し合いをするように。

そういった、鏡写しのように、人間の世界というものは成り立っているのだろう。

彼は、所謂、自然は美しいだとか、生命は美しい、だとかいった考え方に対して、凄まじいばかりの嫌悪感を示していた。

いわく、鉱物こそが美しい。大気こそが美しい。何も無い廃墟こそが美しい。

この世界を消し炭にして、生命を根絶やしにする事こそが美しい。

ヴェルゼは、そう考えるのだった。

十

アイーシャは、ぺたり、と膝を付いていた。

何故、間に合わなかったのだろう？

「あらあ？ どうしたの？」

グリーン・ドレスは、困ったような顔をしていつものように笑っていた。

「あれは、私が一人で倒すって言っているでしょう？」

いつものような表情の、驕りながら、他人を見下したような顔をしている。

グリーン・ドレスの腹は大きく抉れていた。そして彼女の右側の顔半分は無残な傷が広がっている。そして……、胸の辺りには、壊れた鉄骨が生えていた。

「あの……………」

「大丈夫」

緑の悪魔は唇を歪める。

「倒すつもりでいるから」

そんな不敵な顔をされる。

けれども、彼女はすぐに、自分の命の火は無いのだという事を理解したのか……。

ぼそぼそっ、と、アイーシャの耳元で、何事かを話し続ける。それは、どうやら、敵の行ってきた能力の概要みたいだった。

彼女は死に際に、アイーシャに託しているのだ。

アイーシャは、向こう側にいる敵の方を向く。

それは空気を侵食する壊疽のようなオーラを発していた。

そいつは、蠅のような翼を生やしていた。そして、焼け爛れた全身から煙を放ちながら、四肢を僅かに動かし、両眼が血走り、口からは涎を垂らし続けている。

その化け物は、ただただ笑っている。

まるで、呪いでも振り撒くかのような笑みだ。

グリーン・ドレスはふいに、まるで操り糸でも切れたように、地面に倒れる。
彼女の肉体が、さらさらっ、と、灰のように空気へと溶けていく。
それは、どうしようもない程に無情だった。
服だけが残り、彼女の肉体が空へと消えていく。
アイーシャは、彼女がいつも身に付けていた首飾りを握り締める。四つの赤い牙のようなものが付いたペンダントだ。
「ねえ、何で……？」
アイーシャは、ふいに、訊ねていた。
自分の両目から、止まる事無く涙が溢れてくる。
感傷に浸る時間など、無かった。
蠅男は翼を広げて笑っていた。
辺り一面の空間が避けていく。
隕石がアイーシャの下へと降り注ごうとしていた。
アイーシャは、帯刀していた剣を引き抜く。
自分が倒すしかなかった。
そもそも、こいつは自分達を始末しに来た刺客なのだ。
隕石が何も無い空間から飛来してくる。
アイーシャは、それらを剣で弾き飛ばしていく。……かなり重い攻撃だった。
まともに捌き切れない。全身が吹き飛ばされそうだった。
彼女は気付けば、逃げて走っていた。両足の裏側を変形させて、車輪を作り、ローラー・ブレードのようにアスファルトを滑走していく。
それを見て、とても楽しそうな顔で、蠅男は此方側へと飛んでくる。
敵は追ってくる。
アイーシャは無我夢中だった。
隠れていたアジトに辿り着く。
アイーシャは全身の、悪寒が止まらなかった。ひたすらに寒い。それは悲しみなのだろうか？
あるいは、どうしようもない程の死の恐怖なのかもしれない。
……呼吸が出来ない？
辺りの空間が歪んでいる。
おそらくは、真空のようなフィールドを作られたのだろうか。
ぱきり、ぱきりと、卵の殻でも割れるようにヒビ割れている。
……化け物がっ！ 何なの？ こいつ？
屋敷全体が、巨大な重力の磁場の中へと放り込まれていっているのだろう。このままだと、自分の肉体も押し潰されてしまう。
ブラック・ホールを生成している。
このまま、屋敷ごと、辺り一帯を押し潰すつもりなのだ。
……グリーン・ドレス、仇は討つ。

彼女は首飾りを強く握り締める。多分、生き残れば、これが形見になるのだろうか……。

この敵は、宇宙空間を作成してくるらしい。それも、そいつの持っているイメージの宇宙空間だ。おそらくは、想像力を形にしたタイプの能力なのだろうが。

……真空で、人間が爆発したり、凍結したりするのかしら？ 原理を解明しようとするだけ無意味かもしれないわね。

とにかく、相手の出方を伺うしかない。

……いや、そんなんでいいのか？ 私。何が何でも、倒さないよ。

アイーシャは、自分を必死で落ち着かせようとする。

今ある感情は何なのだろう？

悲しみ？ それとも、怒り？ あるいは、喪失感？ 分からない。多分、色々なものが混じっている。

あらゆるマイナスな感情を振り払って、戦っていこう。

そこにきっと、自分の成長と……自分の失った誇りを取り戻す術があるのだから。

十

戦って、自分自身を取り戻すしかない。

負ける事は許されない。

そいつは、窓を破って、中へと入ってきた。

彼の周辺は、光を吸い込み続けている。更に、重力によって壊れていく壁や床などが凍り続けていく。

ヴェルゼは辺りをきょろきょろと見回していた。

応接間だ。家具などが散らばっている。

どうやら、彼女を探しているみたいだった。

口を開き、吐息が漏れる。そのまま吐息が凍り付いていく。

部屋中に仕掛けられたトラップが発動していた。

零度の中を、熱を帯びた、光のようなものが線を引くかのようなようだった。

何か、細長い矢のようなものが、ヴェルゼの肩を貫通していた。

ヴェルゼは、それを即座に引き抜こうとする。

すると、肉が抉れていく。

「……銚？」

同じように、左の腿、そして背中の翹へと銚が突き刺してくる。

彼は、しばし、その場所へと固定されていた。

「引き千切らないと……………」

彼は肉が抉れる事も構わず、それらを引き抜こうとする。

「来たな、蠅野郎っ！」

部屋のクローゼットに、隠れていたアイーシャは飛び出す。

アイーシャは両腕を銃へと変形させていた。
弾丸はその辺りにある鉄屑を鉛玉へと変えていた。
「地獄へ行けよ、クソ野郎っ！」
バルカン砲だった。
鉛玉が、高速回転の砲身から飛び出していく。
重力の全てが、そのままヴェルゼへと向かっていく。
ヴェルゼの肉体がこのまま鉛玉の嵐によって、全身の血肉が吹き飛んでしまうのだろう。
当然のように、撃ち込まれる鉛玉の全てがヴェルゼを外したものの、彼を中心に向かっていく。
凍結の能力によって、本来ならば、鉛玉は空中に静止している筈だった。彼のイメージによれば、絶対零度は全ての攻撃を、彼に辿り着かせる前に凍り付かせるからだ。
鉛玉は熱を帯びているのだ……。
「……………あれっ、か、解除しないと、……………」
彼にとっては、予想外の攻撃だったのだろう。
一閃だった。
全身から熱を発しながら、蒸気を上げ続ける剣を構えたアイーシャが。
そのままの勢いで、ヴェルゼの首を両断していた。
ごろりっ、と、蠅男の首は回りながら、地面へと落ちていく。
ヴェルゼの肉体が、自身が作り出したブラック・ホールの中へと吸い込まれ、押し潰されていく。そのまま、彼は無へと還っていく。
アイーシャは茫然自失のまま、重力や凍結によって破壊された周辺を見回していた。
どうやら、自分が勝利した事を確認する。
「あれ、私、勝った……………？」
震えが止まらなかった。
どうしようもない程に、涙も止まらなかった。
どうしようもない程に、嬉しいような、あるいは可笑しいような感情さえ込み上げてくる。ただとにかく、敵を迎撃出来たのだ、という事は分かった。

十

寝台の上で、アイーシャは一人、自分自身に手術を施していた。
機械兵を医療用に改造して、レントゲンで自分の体内を見る限り、下腹部の皮下脂肪の上ら辺に、メアリー辺りが埋め込んだであろう発信機が仕掛けられていた。
麻酔は無かったので、舌を噛まないように口の中にタオルを詰めて、アルコールで切開部を消毒して、機械兵に身体を切り開いて貰う。
しばらくすると、確かに、腸がある部分に、小型の機械が入り込んでいた。
アイーシャはそれを取り出すと、憎々しげに、その機械を踏み潰す。
そして、今度は針と糸を取り出して、自分で自分の切り裂いた腹を縫っていく。

「殺してやる、殺してやるぞ、メアリー。ルブル、あの人外の畜生のクソ共っ！」

震えがまるで止まらない。

失ってしまったもの、それは大き過ぎる何かだ。

もう、二度と失いたくない。

だから、戦わなければならないと思った。前に進まなければならないと思った。

彼女は自身の剣に額を当てる。冷たさが額を伝わっていく。

彼女は剣の柄を強く握り締める。

この剣で倒さなければならない相手がいる。

この剣で拭わなければならない涙があって、誓わなければならない祈りがある。

自分は戦い続けなければならないのだ、と思った。

そう。

過去に苦しむよりも、未来を築き上げたいから。自分自身の存在が呪われていたとしても、それでも立ち向かいたいものがあるのだから……………。

第十章 武器商人と滅ぼす光

ルブルの作った塹壕のような、地下の家の中だ。

セルジュは、自室へと戻る。

そこが、いつものように、彼にとっての居場所だった。

全身を映す鏡を部屋に、取り付けていく。

「よう、ダリア」

セルジュは冷笑を浮かべる。

「俺は欲しいものは、全部、奪おうかって考えている処だ。お前の肉体をぶん取ったようにな？

なあ、普通に考えて、お前は殺されて死んだだけなんだよ。俺がお前の肉体を再利用しているだけって解釈もあるよな？ ルブルとか見てみろよ、あいつは本当に人間の死体は道具や、何かの部品だとしか思っていない。そこに人格だとか、人権だとか、そんなものをまるで見ていやしない。最高だろう？」

罪悪感を握り潰そう。

そんなもの、自分には存在してはならないものだと考えよう。

「お前の思考回路は手に入らなかった。それで別に構わないだろ？ 俺がお前から取ったものは、顔や髪、胸、腹、腰。綺麗な指先、肘、腿。皮膚、血液、筋肉、骨。眼球、鼻、耳、それから一応、恥部。胃、腸、肺、心臓。別にそんだだけだ。お前の脳だとか、お前の魂だとか、って奴は奪っていない。お前は人格まで俺に侵される事なんて無かった。なら、別に大した事、無いんじゃないか？」

セルジュは、両肘と背中、両膝から、鋭く婉曲したナイフを生やす。

「ケルベロスの力だ。この刃物はとてつもなく美しい。お前だけでは手に入らなかったものだ。なあ、俺はこれ以上、誰かから何かを奪えるのかな？ 俺には分からない。俺はどういう風に、強くなっていくのが.....」

間違いなく分かっているのは、ダリアの肉体を手にしても、自分はダリアじゃない。

何処までいっても、自分は自分でしかない。

人の表面を取り替えたとしても、その人間になる事なんて出来はしなかった。

なら、自分は今、誰に劣等感を覚えているのだろう.....？

「ミソギの話を聞いている限り、この世界ってのは他人の人生の奪い合いなんだな。支配者と被支配者が存在している。誰もが、その渦の中にいるのかもしれないな？」

何の為に、自分が生きているのか、まだその意味を実感出来そうにない。

だから、きっと手に入れなければならないのだ。

この押し寄せてくる劣等感は、何なのだろう？

きっと、自分自身の精神を、もっとも嫌悪している。

自分の人生は呪われている。未来は更に、呪われていくのだろう。

それでも構わないと誓った筈だ。

抗おうとするのが、愚かなのかもしれない。

抗う？ 何にだろう？

「俺は、俺は矮小な自分を乗り越えたいのか……？」

彼は鏡の部屋の中で、一人、打ち震える。

化粧の仕方を教えてくれたのは、メアリーだ。

髪の手入れ方を教えてくれたのは、メアリーだ。

服を見繕ってくれて、着こなし方を教えてくれたのも、メアリーだ。

そして、ダリアの肉体を奪う提案をしたのも、メアリーだ。

だから、セルジュはメアリーに尽くそうと考えているのだ。主君のように思いたいのだが、彼女自身は、そういう関係を望まない。あくまでも、大切な仲間として接してくれる。

彼女の役に立つ瞬間の為にだけ、自分は生きている。

きっと、それが自分の始まりなのだから。

そう。

たとえ、自分が醜悪な化け物になっても構わない。

その覚悟が、ずっと必要なのだから。

外で、ルブルの声が聞こえた。

どうやら、この城の主が帰ってきたみたいだった。

十

「ヴェルゼが死んだみたい。そして、アイーシャの体内に入れた通信機からの信号は途絶えた……」

そう言いながら、ルブルは、塹壕の家の中へと入ってきた。

どうも、ルブルは不安定そうだった。おそらくは、受信している波長のようなものが酷く乱れているからなのだろう。

中では、セルジュとメアリーの二人が待機していた。

ルブルが暗黒の地から帰ってくる頃には、メアリーの全身は体裁上、復元していた。しかし、実際、どうなのかは分からない。彼女の肉体はアンデッドだ、どれだけの耐久力があるのかは、ルブルにも未知数だった。

セルジュは自室に閉じ籠って、相変わらず、自分の姿を見ていた。

小さいながらも、以前、城にいた時と同じように暮らしている。

「二人共、お疲れ様」

ルブルはそう言う。

「そっちこそ、大変だったんだろ？ なんだ？ その、デス・ウィング、ってのは？」

セルジュが自身の部屋から出て、ルブルに話し掛ける。

「昔からの友人。それで、私が留守にしている間、異常は無かった？」

「ええ」

メアリーが頷く。

「新たなダートのメンバーが追加される、“武器商人”と言うらしいわ。本名は聞かされていない」

「ふうん？」

セルジュの顔がいぶかしむ。

ルブルは武器商人の電話番号を、デス・ウィングという女から教えて貰ったらしい。

ルブルは通信機を使って、武器商人に電話を入れる。

「えっ、既に手配しているの？ 分かったわ、場所は、そうね……」

漆黒の魔女の声音に、警戒心が灯る。

そう。

今から、十数時間後に、ヘリがこの森の付近に訪れるらしい。

セルジュとメアリーの二人が、ヘリに乗ると言った。

「今度は、俺とメアリーが出向いてやるよ。ルブル、お前が此処を守ってくれよ？」

セルジュは不敵な笑みを浮かべる。

黒い魔女は、とても信頼に満ちた眼差しで、二人に対して頷いていた。

十

そこは、森の外から、数キロ程、離れた場所だった。

黒いスーツの男だった。目元まで伸ばした髪の色や、瞳も黒だ。年齢は三十代後半くらいだろうか。ブランド物のネクタイやシャツを身に付けている。

彼が武器商人だった。

「お嬢さん達が、ダートのメンバーかな？」

メアリーは頷く。

「ええっ」

「そうか。俺の本名はミソギと言う。一緒に来てくれないかな？」

「喜んで」

メアリーとセルジュは、ヘリの後部座席に乗る。

運転手は五十くらいの男だった。どうやら、ミソギの側近の一人らしい。

ちなみに、俺は側近を殆ど作らない、と。彼は独り言のように呟いたのだった。彼の瞳は、何者をも信じない頑なな、強い懐疑心が灯っていた。

十

それから、数時間後の事だった。

繁華街へと案内される。

此処には、主に違法な風俗産業やドラッグの販売ショップなどが、ちらほらと散見される。都会の体を為した無法地帯なのだろうか。

大ホールだった。

いつもは、コンサート会場として使われているらしい。

武器商人ミソギは、今夜、此処でパーティーを開いているらしかった。

セルジュとメアリーは、豪華なドレスを渡されて、その中へと案内された。

ドレスは、多少、露出度が高かったが、まあ正装というものはこんなものなのだろう。

二人は大ホールの中に案内される。

会場内には、正装をした男女が沢山、交流を行っていた。

おそらくは、政治家や企業の幹部などが集まっているのだろう。

セルジュは顔ぶれを見ながら、かつて住んでいた故郷に、外国の新聞雑誌でよく顔を載せていた政治家などがいるなあ、などと考えていた。

白い髭を生やしたタキシードの男が、ミソギに対して、連れてきている二人の女性は何者か？ と訊ねていた。すると、ミソギは冗談めかした口調で、彼女達は“人類の敵”です、と答えた。タキシードの紳士は笑っていた。

ミソギは二人に振り返る。

右手には、シャンパン・グラスを手にしていた。

「処で、俺は本当に女好きなんだが。お嬢さん達、どうだ？ 俺とお手合わせに今夜？」

ミソギはそう言って、自らの左手の親指と人差し指で輪を作って、右手の形を拳銃のようにして、右手の人差し指を左手で作った輪の中に軽く出し入れする。

「いや、私、レズなんで。両刀でも無いんで」

「俺、身体、女だけれども、これでも男なんだよ。俺は自分の身体しか愛せないんで」

メアリーは露骨に強い生理的な嫌悪感を露にし、セルジュは舌を出して中指を立てる。

「つれねーな……？ 色々、体験してみるもんだぜ？ こんな美男子、いつもなら、女の方から誘われるんだ。奴ら、必死で色仕掛けしてくるぜ？」

ミソギはそう言って、自分の唇に指先に手を当てた。

「お前よりも、イズルダの方が俺の憧れだったぜ？ 俺はホモじゃねえが。俺は元々の肉体は貧相だったからなあ。だから、ケルベロスって奴、見ているとムカ付いてくるんだが」

そう言いながら、セルジュはステーキをがつつと音を出して食べる。

「下品よねえ。貴方がグリーン・ドレスにバラバラにされれば良かったのよ。あいつ、美男子好きだから、貴方とやりたがるんじゃない？ いや、貴方を殺りたがるのかしら？」

そう言いながら、メアリーは強くセルジュを抱き締める。

ミソギは少し、面食らったような顔をする。

その後で、溜め息を吐く。

「はっ。まあ、お前ら、世俗離れしてそうだよなあ？ 女ってのは、俺の顔と金見せれば、あちらから寄ってくるんだが。お前らみたいなものや、デス・ウィングみたいなのは、俺の理解の外にいるねえ。まるで、思考が分かんねえよ」

メアリーは、彼をよくよく観察しながら、ふと思い至った。

「でもまあ、私は貴方嫌いだけれども、ルブルは好きでしょうね。合格、なんじゃないかしら？ ダートのメンバーとしては。でもそうね……やっぱり、……」

出来れば、採用試験を厳しくしたい。

出なければ、使い物にならなかつたり。それ処か、また裏切られて、組織が壊滅しかねないからだ。此方を利用したいだけの相手で、なおかつ脆い存在ならば、簡単に切り伏せたって別に構わないだろう。

「ちなみに、俺は銃口でファックするのも好きだ。撃ち殺すと、欲望の絶頂に至るんだよなあ？ ショット・ガンがいい。下の孔から挿れて、上の口から綺麗に出ていくと、どうしようもなくなる」

セルジュは、飲んでいたワインを軽く吹き出しそうになる。

「何だ、お前も倒錯型のサイコ・キラーか」

セルジュは、飽き飽きしたような顔をしていた。

「ちなみに、俺の方はというと両刀でもあるぜ？ 猿や豚みたいな顔の親父に、バックからやらせている。それで、糊口を凌いできた事もあったもんだ。いい金蔓だった」

ミソギは自嘲的に笑った。

「だから、デス・ウィングってのにも、気に入られている。俺はあの女、女と思えなくて苦手だけだな。まず、血が出ないのが萎えるんだ」

ミソギは尊大な顔で、煙草に火を付ける。

「俺は能力者じゃないが、武器だけで、能力者共を大量に屠ってきた。奴らの力なんて、手品みたいなもんばっかだったからなあ？ 銃や爆弾があれば、充分に殺せる」

それは本当なのだろう。

そして、ミソギは数々の修羅場を潜ってきているのだろう。

しかし、しかし……だから、それがどうした、という思考に行き着いてしまうのだ。

セルジュは、メアリーに耳打ちしていた。

セルジュはアサイラムに行つて兵隊を探してきた感触としては、イゾルダとグリーン・ドレスの二人を念頭に入れて、メンバーを選ばなければ話にならないという事が身に沁みて分かつたからだ。

それくらいに、今から対峙する相手、今まで対峙してきた相手はやっかいなのだ。

そして、あのグリーン・ドレスを倒したのが、ヴェルゼで、そのヴェルゼを倒したのが、アイーシャだ。

「なあ、メアリー。さっきヘリの中で、兵器とか戦争とかこの男、言っていたが。緑の悪魔の奴一人で、全部、使いこなせたよな？ そして、アイーシャのネクロ・クルセイダーの機械ゾンビ、相当、やっかいなんだっけ？」

「そうなのよねえ……………」

セルジュは、今度はミソギにはっきり聞こえるように言った。

「なあ、ひょっとして。外にいる連中とか、警備兵とか、この会場の奴らとか、全員、まとめて死体にしてから、ルブルが操つて武器持たせた方が早いんじゃないかねえの？」

そう言うや、否や。

セルジュは、肘からアケロンのナイフを出すと、一瞬にして、ミソギの首を切り落とそうと

襲い掛かる。

ミソギは、いつの間にか手にしていた鉄製のステッキで、セルジュのナイフを防ごうとする。ステッキは、そのまま二つに両断されて、セルジュの肘の刃物は、彼の頸動脈の辺りをかすめていた。

ミソギは、明らかに狼狽したような顔をしていた。

「お前、……何しやがる？」

「俺の不意打ちで、このまま首が落とされるならやっぱりいらぬ、ってんだよ。なあ、アイーシャって奴のネクロ・クルセイダーの機械ゾンビは、ルブルのゾンビに銃や刀持たせた程度じゃねえんだぞ？ 奴の兵隊一人で、数十名の人間を一度にミンチに出来る、って聞いている。しかも、ルブルのゾンビと違って、アイーシャのゾンビは、銃も刃物も通らねえらしい。俺達は焦っているんだ。このままだと負ける。お前が道楽程度で、ギブ・アンド・テイクだの、金儲けだけのすげえ、下らねえ事言うんなら。全部、奪ってから、俺達の資材にしてしまった方が早いつて言っているんだよ？」

ミソギの額に、筋が走っていく。

「マーザ・ファックッ！ ざけやがって。悔い改めさせてやる」

ミソギは立ち上がり、いつの間にか手にしていたハンドガンの照準をセルジュへと向ける。

セルジュは鼻で笑っていた。

辺りに、騒ぎが広まっていく。

おそらくは、ボディー・ガードらしき者達が集まってきて、次々と手に手に銃を握り締めていた。

メアリーは、冷たく彼らに言う。

まるで、スピーカーから音が発せられたように、よく通る声だった。

「あら、貴方達。牽制くらいで、それ見せるならいいけれども。もし、撃ち込んだりすれば。殺すわよ？ 大人しくしている事ね。どうせ命中なんてしないんだから」

そう言いながら、彼女は料理に口を付けていた。

彼女は、七面鳥が気に入り、それをテーブル・ナイフで切り分けていく。中には、シチューが詰まっていた。

「味付けがいいわね。今度、ルブルとセルジュにも、同じもの作ってあげないと……」

そう言いながら、彼女は、味付けなどを確かめていた。

ミソギは、ハンドガンを手にしなが、いきり立つセルジュを牽制する。

「なあ、セルジュ。てめえは、金が欲しいって思わなかったのかよ？ 俺はずっとずっと欲しかったぜ？ 何しろ、子供の頃、草とかゴキブリとか食って生きていたからなあ？ そして、病気を抱えながら生きた。地雷に怯えながら生きた。お前は、どうなんだ？ お前、育ち実は良さそうだからなあ？」

「ああ？」

セルジュは、腹の底から笑った。

「確かに、俺はそれなりに裕福な家で育った。普通に大学に通わせてくれるな。だが、俺はお前

が嫌いだ。お前の思想も嫌いだ。俺はお前が国民の大半が餓死寸前の国で育って、ずっと親に殴られ蹴られ人格を否定されながら育った境遇だとしても、何と云うか、俺はお前に同情しない。心の底から、小馬鹿にしてやる材料が増えるだけだ。なあ、同情して欲しいのかよ？ 可哀想だな、って甘ったるい涙でも流して欲しいのか？ そんな奴、余計にダートになんていらぬ。児童保護団体やクソ偽善者のボランティア連中に悲しまれてろ」

セルジュは、円月刀のような形の肘のナイフを振り翳す。

相変わらず、ミソギは、その攻撃を、銃身を盾にして捌いていく。

「メアリーは言う。他人の不幸は蜜の味だ、ってな。日々を幸福に生きる為のスパイスだ。たとえ、全人類の殆どが飢餓で切実に飢えて、毎日、食べられるという当たり前の幸せを望んでいようが。俺は、俺やメアリーは、自分達よりも、ちょっと顔が良かったり、ちょっと楽しげで幸せな恋愛をしている奴らを妬んで呪って生きてやるよ」

セルジュは、ラッシュを続けた。

何度も、何度も、肘のナイフを振り回していく。

その度に、ミソギのハンドガンによって防がれていく。

……身体能力がやっかいな男だった。

ルブルから又聞きした、デス・ウィングからの情報によると、このミソギという男は、一切の異質な能力を有していないにも関わらず、彼が有する武器などで、能力者を倒してきたらしい。恐ろしい男なのだ。

それでも、セルジュは、アケロンの性能を確かめる意味も込めて、まるで怖気付く事無く、ミソギへと向かっていく。

「まあ、俺達ダートは、自分が全てのエゴイストばかりでいいって事だ。他人がどんなに苦しもうが、悲しもうが、それらを踏み潰して自分の快樂を満たせればいい。そういう連中を揃えたい。それがルブルの意思だ、分かるよな？」

ミソギは、明らかに苛立った顔をしながらセルジュを見ていた。

そして、おもむろに彼は、セルジュの顔へと向かって唾を吐く。

セルジュは、彼の飛ばした唾を難なく避けて、嘲笑う。

「俺もお前が嫌いだ。お前らのような連中が大嫌いだ。なあ、俺には理解できねえよ。何だ、その、人を殺すのはどんな気分なのか試してみたかったって、っていう非合理的な理由は？ 殺しちまったら、刑務所行くし、職失うだろ？ そしたら、シャバに出ても食うに困る。お前らのような異常快樂殺人犯は、俺の理解出来ない理由で犯罪に手を染めるよな？ 普通に幸せな人生を送れる筈なのにな？」

「お前、本当は同情されたいだけだろ？ 恥ずかしくないのかよ？」

二人は、まるで一步も引かなかった。

「処で、ミソギ。お前、言っている事、支離滅裂なんだよ。お前、女を撃ち殺すのも趣味だって言ってたんだろ？ それなのに、異常快樂殺人犯が嫌い？ 馬鹿じゃねえのか？ それとも、ただの同属嫌悪かよ？」

「筋通ってるだろ？ 幸福な家庭で育った奴が、狂ったフリなんかすんのが、反吐が出るってん

だよ。デス・ウィングや、お前のようなタイプが俺が一番、嫌いなんだ。俺は、今でも、幼少期のトラウマに蝕まれる……………」

ミソギは、いつの間にか、両手に小型ショット・ガンを手にしていた。

そして、それらの引き金を引いて、セルジュへと撃ち込んでいく。

銃撃戦は始まったのだった。

いや、銃とナイフの戦いか……………」

メアリーは、ひたすらに、席に付いたままコーヒーを飲んでいた。

どうやら、ミソギのボディー・ガード達は、拳銃を握り締めながらも、二人の身体能力に付いていけずに、まるで照準を合わせられずにいるみたいだった。

ミソギはセルジュの動きを何故か、追えている。自分では能力者じゃないと言っていたのにも関わらず、セルジュの動きを追えているのだ。

セルジュは、両肘の刃物で、ミソギの攻撃を全て受け止める。

音速で飛んでくる弾丸を、正確に弾き飛ばしていた。

「やはり、軽いんだよ。お前の攻撃はなあ？ 所詮は、ただの鉄砲玉だろ？」

そう言いながら、セルジュは、その辺りにある椅子を蹴り飛ばす。

椅子が、ぐちゃぐちゃに変形しながら、一本の槍となって、ミソギの下へと襲い掛かる。

ミソギは、あっさりと、それをかわす。

更に、乱戦は続いていく。

メアリーは、一通り、ディナーを食べ終わっていた。

メアリーは、通信機を取り出すと、ルブルへと連絡する。

「中々、ミソギという男。面白いわよ。ダートのメンバーに相応しい奴だと思うわね。あらっ、……………デス・ウィングが、もう一人、斡旋してくれるの。そう、頼もしい限りね」

十

武器商人、ミソギ。

全ては、高い数値の上で成り立っているのが、彼の人生だった。

分かりやすく数値化されているものが金だ。愛だとか情だとか、そういったものも、所詮、数字で示してしまえば、その程度のものなのだろうと考えてしまう。

金はあればある程、良いし、酒も上等な物の方が良い。

家や車も服も、そうだった。

困う女も綺麗であればある程に、豊満な肉体をしていればしている程に、それなりの上物の地位を持っている程に良いものだった。

ミソギにとって、そればかりが全てだった。

何よりも、高級なブランドを愛したし、ブランドにブランドとして与えられている価値観を素晴らしいものだと考えるようにしていた。

そう。

ミソギは完全なまでの、拝金主義者……というか、物質主義者だった。

彼にとっての精神的価値は、金銭が動く社会において、もっとも価値があるものとされるものだけだった。そういったもので、天へと届くバベルの塔を建てたかった。

全ては、空っぽな洞窟のようなものだ。

彼は、他人の愛というものを知らなかった。

そんなものは、彼にとっては、全てが不純物なものか、弱い者達が寄り添い合う為に、抱こうとした幻影のようなものだと考えていた。

そういった幻影がファンタジーとなって、メディアの力を借りて都市に蔓延して行って、善良な市民はファンタジーの世界に浸る事が出来る。そうやって、幸福というものが手に入る。ミソギはそういったものを、実にこよなく愛した。

何故ならば、善良な一般市民こそが、ミソギにとってカモ以外の何者でもなく、そして、無くてはならない存在だったからだ。

しかし……、一方で、彼は理解出来ない相手には、嫌悪や畏怖さえ覚えた。

デス・ウィングは、彼からすると、まるで理解が出来なかった。

彼女は、ひたすらに彼が認識している“一流”というものを貶しているような節さえあった。ミソギにとってゴミだと感じているもので、更にもっとも理解が出来ないものを、彼女は集めたがる。

人間の死体が欲しい。

悪趣味な物語に魅力を感じる。

それが、デス・ウィングの思考だ。

理解の出来ない道楽だった。

まだ、博愛思想や家族愛などを語られる方が、よっぽどマシだった。

彼にとって、みな欲している愛というものは、欺瞞そのものだとこそは思わなかったが、自分にとっては必要の無いものだろう、くらいは思った。

そう。彼の目的はシンプルだ。

彼には、ただ野心ばかりがあった。

冷たい環境で育ったからだ。

だから、逆説的にか、本物の“異常者”を理解する事は出来ない。

メアリーやセルジュ、そして二人の背後にいるルブルなどは、ミソギにとっては、デス・ウィングのように不可解で、何の為に生きているのかまるで理解出来ない連中だった。

まだ、偽善者の行動の方が理解出来た。

偽善者は、結局の処、利益で動いている。何かしらの代償行為の為に動いている、自身のエゴの為に、あるいは物欲を隠す口上として動いている。

明らかに、メアリー達は、殺す事、壊す事、そのものを楽しんでいる。

ミソギにとって必要なものは、結果であって、過程なんかではなかった。

たとえば、大きな金を手にする為に、殺人を犯す事はあっても、殺人そのものの為に、大きな金を溝に捨てる連中が理解出来なかった。

それが、メアリー達で、デス・ウィングだった。

.....本当に、狂っているんだろうな。

彼らのような連中は、自分自身の命さえも、使い捨てる弾丸か何かだと思っている。社会的な名声に興味が無くて、人並みの幸福さえ願おうとしない。

彼らのような存在は、小難しい本を読んで、意味の分からない芸術を愛して、それから、理解の出来ない思想を持っている者が多い。誰もが理解出来ないような理由で、行動を起こし、社会の秩序を壊し、破壊行為を繰り返して、まともな人間が理解出来ないものを目的とする。それはある種の宗教じみた何か、だった。

そう、思い出した、暴君.....ウォーター・ハウスという男もそうだった。

何を欲しているのか分からない。

精神的とかいう唾棄すべき概念の中でも、更に理解出来ない何かだ。

セルジュからは、お前は面白くない、と言われて、ミソギは違和感ばかりが付き纏って仕方が無かった。そもそも、ダートは何の為に動いているのか分からなかった。

十

「ミソギという男は面白いですよ。最高に頭が壊れている。その部分が私は好きなのです」

彼女は、武器商人ミソギという男に関して、店に入ってきた客に話していた。

客はどうやら、この黒い森の魔女に、武器を購入しに来たみたいだった。

デス・ウィングは、ミソギの言葉であるギブ・アンド・テイクに基づいて、彼の言葉を尊重し、彼と付き合いを続けている。

拳銃、サブ・マシンガン、アサルト・ライフル、地雷、ワイヤー・トラップ、小型ミサイル、バズーカ、ランチャー、戦車。そういったものが、最新式で、この店にも流れてくる。取り合えず、拳銃や小型爆弾は店の中に置いておくのだが。流石に、大型の兵器類は、カタログとして、客に見せている。

最新の兵器が開発される度に、ある一部の者達にカタログが配られる。

このカタログは、各国の官僚や警察組織などにも出回っている。市販される事は無い。

そしてだ。

この黒い森の魔女は、手軽に兵器が購入出来る場所としても、その筋では有名だった。

何処かの国のエージェントらしき男が、店に置いてあるカタログを真剣に読みながら、武器商人ミソギに付いて訊ねてくるのだった。

デス・ウィングは、知っている限りの事を臆面も無く話す。

店の客には、基本、親切な態度を通してからのだ。

「彼から直接、話を聞いた事はありませんが。よく、そんな境遇で生き残ったな？ よく、そんな環境で能力者になれずに、逆に、生きようとする意思だけでのし上がったな。そんな事を言いましたよ。でも、私は彼の境遇に何も同情しないし、彼はそんなのを望んでいないのでしょうね」

男はカタログを見ながら唸る。

店の中に置かれている兵器の見本が、数十丁、数百個、数千艦単位で購入出来る。デス・ウィングは、その仲介をしているのだ。片手間で。

「ちなみに、私は金持ちの子として生まれました。何一つ不自由の無い暮らしでした。けれども、彼を憐れまない。そして、彼を見ても、私の思想は何一つとして、揺るがない。まあ、そういうものなのだろうと思っています」

エージェントは、カタログに載っている武器を購入した者達の名前を訊ねる。

金なら出す、とも言った。

「駄目です。情報は売れません。守秘義務があるもので」

エージェントは溜め息を付く。

「すみませんね、私は“中立”という立場を取っているのですから。しかし……」

デス・ウィングは何気なしに、棚から一冊の本を取り出した。

「此れなんてどうですか？ 何なら、この本と写し水晶、そして武器カタログをお売りしますよ。貴方が覗くと良いのです。痕跡を。もっとも、どうなるかは分かりませんが。これまで、この店に訪れて、このカタログを手にして、武器を購入していった者達の記憶の断片なら読めるかもしれせん」

そのエージェントは、彼女から、本と水晶、カタログを買っていった。

デス・ウィングは、くくっ、と含み笑いを続けていた。

おそらく、今の男は、以前訪れたある国の首相によって粛清される可能性が高い。その国において、側近を何名か連れた大統領と名乗る、違法な兵器などを購入した男がいるが。以前の男と、今来た男の国籍は同じだった。

秘密というものは知らない方が良いに決まっている。

デス・ウィングは、客が出て行って、十数分くらいすると突然、大欠伸をした後、そういえば、ティー・タイムをまだ行っていなかったなあ、という事を思い出したのだった。

十

グリーン・ドレスは、アイーシャの為に死んだ。

アイーシャ自身は、そう解釈している。

明らかに、他人を踏み躪る事しか考えなかった彼女は、何故、最期に他人を助けよう、といった信念を持ったのだろうか？

だから、メアリーとルブルは絶対に倒さなければならない。

それだけが、今は彼女の生きる目的だった。

そして、もしこの因縁を断ち切れて、望みを叶えられたならば、自分自身を取り戻す旅にでも出ようと考えていた。

きっと、自分は正義にも悪にも興味が無い。

故郷なんてものも、もう何処にも無い。

メアリーが、彼の仲間達を、みんな殺してしまったのだから。

魔女の森へと向かう途中だった。

まだ、太陽は真上にある。

アイーシャは、顔を布で覆いながら、近くの田舎の村に寄っていた。

そこは、露店やバーが多かった。

牛馬が歩いている村だった。畑には様々な野菜が植えられている。

彼女は店の一つに入り、そこでビールを注文して、しばらくの間、くつろいでいた。

イゾルダの生体兵器が各地で暴れ回っていると聞く。

今更、ドーンに付こうとはまるで思わない。心情として、それはまるで考えられなかった。ドーンは敵という認識は無いが、味方とも思えない。

これは、純粋に自分自身の戦いなのだと思った。

「どうしたものかな……………」

少し眩暈がする。どうにも、グリーン・ドレスが死んでから、頭が痛い。熱が出ているのかもしれない。

ふと。

彼女の下に、近寄ってくる者がいた。

見ると、まだ、年端もいかない少年だ。

淡い茶色の混ざる金髪の少年だった。左耳にピアスをしている。

彼は、くくっ、と笑っていた。

「ねえ、君さあ。機械兵、操っていた人でしょう？」

アイーシャは、呆けたような顔をする。

何だ？ こいつは？

「雰囲気分かるんだよねえ。赤黒い髪をした女がいたっ、って。グリズリーの兵隊の生き残りが言っていたよ？ 御丁寧に写真まで撮っていた。それから、ドーンってのを、調べて見ると、リストに君の顔が載っているんだよねえ？ この意味分かるかな？」

アイーシャは、ふうっ、と溜め息を吐く。

「刺客か。いいだろう。お前らは私を殺す権利はある。けれども、私の方も、お前らを返り討ちにする権利はあると思っている」

「俺の名はバイアス。カの名は、クリムゾン・サクリファイス。あのさあ」

アイーシャは、両腕を変形させていた。

何か知らないが、何かやってきたなら、速攻で首を刎ね飛ばしてしまおう。

彼は、アイーシャの下へ更に近付くと。

そのまま、片膝を付いて、深々とお辞儀をする。

アイーシャは、彼のその行動に、完全に面食らっていた。

「俺を、この俺を……貴方様の手下にしてくださいっ！」

「……………はあっ？ ……………」

アイーシャは、思わず声が裏返る。

「その為に、俺はグリズリーの周りにいた生き残りの人達を、俺の力で皆殺しにしてきました。生贄は完全に揃っているのです。何なら、生贄をお渡しします。その証明として」

アイーシャは、面食らった顔をする。

「外に向かって下さい。俺はトラックを運転して、此方まで来ました。ありったけのガソリンを詰めて、運転して、貴方様を探してきました。トラックの中を見て下さい」

アイーシャは、まるで催眠術にでも掛けられたかのように、言われたままに立ち上がる。

ビールの勘定を、店員に渡して、店の外に出る。

すると、確かに一台のトラックが止まっていた。確か、軍事大国グリズリーに合ったタイプの奴だ。この少年が運転してきたのか……？

彼は、トラックの荷台を、その場で空けていく。

アイーシャは嫌な予感がしたので、この村の者達の眼に留まらないように彼に言う。

アイーシャは、トラックを半開きにして、荷台の中を覗き見る。

そして、絶句した。

「この、サイコ野郎がっ……………」

彼女は忌々しげに言った。

「あのさ、普通に考えて、私は恨まれて襲撃されるべきなのよ？ お前は、お前は何を考えている？ ふざけるな……………」

少年の顔は、ただひたすらに笑っていた。笑い続けていた。

荷台の中は、冷凍室になっていた。

そこには、おそらくは、百名近くの人間の部品が無理やりに押し込められていた。

細切れに解体されて、丁寧に積み上げられていた。

「献上品なのです。生贄なのです。貴方達は美しかった。炎の天使も美しかった」

「炎の天使……か。グリーン・ドレスはもう死んだ。私のせいで死んだ。私は今から、メアリーを殺しに行く。ルブルもだ。ドレスは私を闇の中から、救ってくれたから。お前は、……お前が、忠誠を誓っているのは、私達じゃあない。メアリーなんだ。彼女は、憎悪と狂気を撒いていつている、ああ、畜生……」

アイーシャは、少年の顔を見ながら、思わず涙を流しそうになる。

メアリーは、人を狂気へと追い遣る才能がある。

おそらくは、セルジュも、彼女のせいで変えられてしまった。

本来ならば、マトモな人生を歩むつもりだったのだ。

……可哀想だけれども、このガキ。此処で、殺してしまおうか？

そう考えるしか無かった。

少年の眼は、水晶みたいにきらきらと輝いていた。

……いや、グリズリーを破壊したのは。グリーン・ドレスだ。そして彼女は、メアリーの支配下で行動したわけじゃない。この少年は、自分や緑の悪魔が作り出した、罪の結晶そのものな

のだ。

アイーシャは、嘔吐感を堪えながら、少年に向かっていう。

「じゃあ、じゃあ……、私と共に、来いよ。ただし、世界の破壊じゃなくて、メアリーとルブルを。ダートの大元を倒す旅路だ。それ以外は認めない。特に、ダートに加担するようなら、今、この場でお前の首を切り落とすっ！」

少年は、また深々とお辞儀をする。

「貴方の望みに。俺は喜んで、自らの人生を奉げます……………」

アイーシャは、自らの赤い髪を撫でながら、とてつもなく逡巡していた。

……………正直、メアリー達と戦うには、自分一人では不安があった。

なら。

なら、きっとこれは運命なのだろう。

「一つだけ約束してくれないか……？」

アイーシャは強く言った。

「え、ええ、……何でも聞きます」

「私が殺せ、って言った相手以外は殺すなよ？ それだけが私に付いてくる条件だ」

彼女はそう言いながら、思わず、右腕を刀に変形させて、バイアスの喉に突き付けていた。

「それから、これから行く先の山中で。今からこのトラックの中にいる奴らの墓を作る。お前がやれよ？ 一人、一人だ。野良犬に食われないように、深く掘れよ？ シャベルくらいは貸してやるからさあ」

アイーシャは強く言い放つ。

バイアスは彼女が、何を言っているのかよく分からないみたいだった。

けれども、無邪気な顔で従うつもりでいるみたいだった。

十

最初の頃の記憶は、真っ白な光でいっぱいだった。

ミソギは物心付いた頃から、銃を持たされて人間を撃ち殺される訓練を受けさせられていた。彼は貧しい国の子供兵士だった。

何故だか、生きている事は不条理だとは漠然と思っていたが、その頃は視野が狭かったせいもあって、こういうものが人生なのだ、という理解の仕方をしていたような気がする。

何をやるにしても、金がいた。食べ物から、小さな娯楽のサッカー・ボールを買う為にもだ。金がいる。

それだけが、彼に刷り込まれた唯一の真実だった。

ミソギは覚えている。

決して、忘れる事が出来ずに覚えている。

友人達は、地雷で手足を吹っ飛ばされて、死んだ。

ガール・フレンドは売春組織へ売られて、何処かの国へと行ってしまった。

屈強な男の兵士達は、ガムを噛みながら、子守唄のようなものを歌って、彼に殺せと命じ続ける。彼の幼少期から、少年時代なんてものはそんなものだった。

つねに、空腹と戦い続けていた。

鉄屑を拾って売り、大人兵士からライフルを渡されながら、その日に食べるものを手に入れる日が続いた。その日、その日の仕事に在り付けない為に、必死になって出来る仕事を探していたような気がする。

そう、ただただ生きる事は必死だった。

幸福の意味も、不幸の意味も分からなかった。

伝染病が蔓延した時、白内障になり、治療を受けられずに失明していく者達も多い。彼らは最初、物乞いをして生きるが、相手にされない。だから、すぐに飢えて死んでいく。人生の無情さを、ミソギは物心付いた頃から知っていた。

やがて、十を半ばまで、過ぎた頃、彼はある老夫妻によって買われていった。その頃、ミソギは漠然と、彼らなら自分が書けない文字なども教えてくれるのかなあ、などと思っていた。

そして、彼らは金持ちだった。

ミソギは遠い異国の地で、彼らに育てられた。

その老夫妻は、ペドファイルで、ミソギは彼らの慰めものになった。

彼らは少年を犯すのが、趣味の変態だった。

ミソギは、これまでに絵本の中でしか見た事の無いような豪勢な食べ物を与えられるが、代わりに、夜には鞭や変な道具と一緒に犯され続けた。十五近いにも関わらず、彼の容姿は十にも届かない幼いものに見えて、それが却って老夫婦の変態性欲をよく刺激するみたいだった。それでも、兵士として他人に殺されそうになる事や、蚊や蠅に集られながら伝染病に襲われたりする事や、必死で草や地を這う虫を食べる日々よりは、よっぽどマシで彼にとっては天国でしか無かった。後から思うと、明らかに子供に行うには異常過ぎる性技も、当時のミソギは特に抵抗する事無く受け入れていた。

たまに、戦場の記憶が、フラッシュバックして蘇る。

撃たれそうな自分、大人の恐ろしい顔。そして、銃殺された友達。

彼は、愛というものをまるで理解が出来なかった。

更に、死と戯れたり、死に焦がれたりする奴や、異常快樂殺人犯の気持ちも理解するつもりは無かった。

ただ単純に、彼の思想は生きるには、金が必要なんだ、という事だけだった。

老夫婦の財産が自分のものになる頃には、彼は事業家なり何なりになろうと決意した。そして、戦争を食い物にしてやろうと決意した。

そして、武器商人、ミソギが誕生したのだった。

この世界のシステムは単純だ。金があれば、生きられる。金が無ければ死ぬ。

拳銃や地雷は、食べ物を得る為のルールだ。

高級とみなが呼ばれているものを集める事は、彼がこの世界に屈服していないという事を証明する為の道具だ。だから、彼はひたすらに資本主義の奴隷として生きる事をのみ望んだ。それが

、彼が戦争の奴隷として生きない事の証明だった。

今なお、あの頃の事がフラッシュバックして離れない。

ミソギは、金のみが信頼の置けるものだと思った。

.....

彼は暑い国に生まれた。

太陽は、忌み嫌うものでしかなかった。

ある国においては、太陽は希望の象徴なのだとも聞かされている。

ミソギは肌寒い季節が好きだ。何故なら、彼にとって太陽は悪魔以外の何者でも無かったからだ。

あの頃は、何を考えていたのか。

単純な衝動は、生きたい、という純然たる欲望だけだった。

それが、彼の金に対する執着心だった。

彼は人間が創り上げてきたものの中で、彼は高級品こそが至上の価値だった。

そういった物を手に入れる事こそが、彼の世界に対しての復讐心を癒やしてくれた。

彼の野心は尽きる事を知らなかった。

裏の世界を、この手で掌握した。

その先にあったのは、戦争という道具を引き起こす銃や兵器の輸入業者だった。武器を製造して、様々な国に売り捌くだけで、上へ上へと申し上がる事が出来た。

彼は手にした金で、高価な物を可能な限り買い占めた。

このどうしようもない、強欲さばかりが、彼にとっての生の証だった。

人々の間において、流行しているブランド物の服、料理。

選ぶ女も、俗的なものを可能な限り選択した。

女優やモデル、アイドル。社長秘書。

そう。

彼は愛というものを知らない。

デス・ウィングからは、お前は狂っている、と言われる。だからこそ、彼は自分が正常である事を言及する。彼女の好む、宗教や芸術は退廃だとさえ、彼は考えている。

.....“卑俗なるものを崇高なものへ、俗物性そのものを聖性へ”。お前は、きっと、裏返しの世界の中で生きようとしている。眼に見える物質こそが、どんな他の精神的価値よりも重いものだと考えている。黄金の塔を作ればいい。札束の宮殿を作ればいい。お前は、まるで聖堂や十字架を糞尿で汚すサド侯爵だ。

彼は紫煙をくゆらせながら、灰皿に煙草を押し付ける。

「俺は、意味の分からないポエムも嫌いなんだよ」

彼は、思わず呟いていた。

デス・ウィングは、何を考えているのか分からない。

いつだったか。

お前は一体、何を欲しているんだ？ と彼は訊ねた事がある。

すると、“私は私の死以外、本当は何も望んでいない。他人の死を見る事によって、自らの死の代償へと変えているだけだ。私の人生は無為そのものだからな”。

そう言われた。

ミソギは、頭を抱えた。

デス・ウィングの思考はよく分からない。

考えれば考えるだけ、無駄なのだろう。

十

デス・ウィングは、店の中でタロット・カードを広げていた。

この戦局がどうなるか分からない。

しかし、とても彼女好みのものになっていく気配はする。

武器商人ミソギは、念入りにドーンの連中を殺すと言っていた。

彼は商売の為に動いている。

金に対する崇拜こそが、彼の全てなのだろうから。

デス・ウィングは、水晶の一つに焰が燈っている事に気付いた。

彼女は、ホワイト・セージを焚き始める。

“召霊の術”という奴だ。

彼女は、専用の尖ったクリスタルを取り出す。

それは、声の媒介となって、彼女に語り掛けてくる。

「俺も参戦していいのか？」

「『ホーリー・ドラゴン』か。貴方の方から、私にコンタクトをしてくるとは思わなかった」

セージの煙が、もやもやと、竜のような形を取り始める。

「どちら側に付けば、楽しいのか考えている。俺は浄化したいだけだ。不浄をな」

「前から思っていたのだけれども、お前は自分自身が所謂、悪である、という自覚はあるのか？」

」

「ふん。俺は俺が正しいと考えている事をやろうと思っているだけだ。お前だってそうだろう？」

」

デス・ウィングは、腹を抱えて笑い出す。

「お前、ダートとかいうのに入ればいい。魔女は、お前のような人材を探している。適任だと思うけどな？ お前は何を望んでいるんだ？ 言ってみろ」

彼女は笑う。真っ黒に淀んだ笑みだ。

「命は余計なものだな。生は呪いだ。俺はこの世界を裁きたいだけだ。俺はその為に、生きているんだからな？」

辺りに、光の翼のようなものが広がっていく。

「おい、店を荒らすなよ」

デス・ウィングは、一冊の本を取り出すと、ぱらぱらと捲る。

「何なら、お前の処に魔物を送ってやってもいいんだぞ？」

「ふん、お前の集めている化け物程度じゃ、俺を殺せない」

彼女は珍しく苛立たしげな顔になる。

この男は、基本的に苦手だ。

本当に、本当に彼女にとって迷惑極まり無い事をしてくるのだ。

完全なまでの異常者なのは、彼女好みなのだが。何よりも苦手なのは、稀に店の中で暴れて、店を荒らす事だ。そういう意味で、最悪な存在だと言っていい。

「ホーリー・ドラゴン。私は随分、温厚になったが。お前はいつか始末してやりたいんだよ？」

私のコレクション、お前、何回、壊した？」

「まあ、落ち着けよ。お前の悪趣味な商品に俺は興味無い」

生理的に苦手だ。

何故、苦手なのかは今でもよく分からない。

「お前は私の商売の邪魔で、ついでに言うと私の人生の邪魔なんだ」

デス・ウィングは毒づく。

しかし。

彼女はそう言いながらも、彼の思想と感性は認めていた。

この男は、間違いなく折り紙付きで強い。

そして、誰に見せても恥ずかしくないくらいに、間違っているし、狂っている。

だから、どうにもアンヴィバレントな感情が、この男に対しては在るのだ。

「まあ、お前は私の商品やコレクションを壊さなければ、私はお前がお気に入りだったんだけどな」

「“そういう能力”なんだから、仕方無いだろう？ お前は俺からすると、穢れそのものなんだよ。だから、俺の聖なる光の破片が当たって、お前の集めたものは壊れてしまう。それだけだ。相性が悪いんだろうな、俺達は」

「私は私の城を壊す奴だけは赦さない。それがお前だ」

はっ、と。声は、嘲るような、おどけるように息を吐く。

「別に壊れない品物もあるだろ、幾らでも。お前の精神の歪みに問題があるんだよ」

「お前に壊されるものに限って、私のお気に入りだったりする。人体の部品、処刑道具、暗黒魔術の儀式刀、毒薬、死霊術の経典、血塗りの鎧、海竜のゾンビの剥製。お前、一体、どれくらい私の大切な物を破壊した？ 使い魔も何名か死んだ。冗談は大概にして欲しいものだな？」

「悪しきものとして、“認識された”から仕方無いだろ。俺の能力は、自動追尾に近いからな」

「弁償しろと言っている。あるいは、私に二度と関わるな。お前は悪だ」

「俺が悪か、成る程……………」

飛び散る光は、顎のような形状へと変わっていく。

水晶は割れていく。

そして、虹色の光が覆っていく。

それは光の環のようだった。

デス・ウィングは、焦りながら、それを鷲掴みにする。

自分の右腕が雲散霧消していく。

光が少し漏れて、それが近くにあった真っ赤な壁絵に命中する。

そのまま、光は消えていった。

「おい、お前、やっぱり私の敵だ。今、お前が壊したのは、何百名もの死刑囚の血を使って描かれた絵画だ。弁償しろよ。オークションで幾らで競り落としたと思っているんだ」

デス・ウィングは、珍しく苛立ちを抑えられなかった。

そして、一通り、落ち着くと口元を笑みに変える。

「まあ、いい。お前が暴れ始めると、悲劇が作られる。私はその観客になれる。だから、そういう部分は気に入っている。とても、楽しみにしているよ」

……………

ホーリー・ドラゴン。

それは、彼の俗称であり、能力の名前でもあった。

こいつの生み出す光は、“悪しきもの”を浄化し、消滅させていく。

そして、無制限にその光は暴れ回っていく。

こいつは、“信仰”という狂気の中から生まれた化け物だ。

そして、何処までも歪んでいるが故に、最高なまでに間違っている。

ドーンのランキングに乗ってこそいないが、おそらく、Aを突き抜けてしまうだろう。

それくらいに、理不尽で常軌を逸した能力を駆使していく。

「対策無いかな。……弁償させるか。よくても、防御しないといけないな。あるいは、壊されたものを、復元出来ないものか」

そう言いながら、デス・ウィングは、自身の右腕を綺麗に再生させていく。

そして、彼女は、ふと思いついた。

「『属性』を作るんだろうな、奴は。なら、店内を奴の言う処の“聖なる属性”とやらで、コーティングしてみるか」

デス・ウィングは、そんな事を思いついていた。

「まあ、何にしろ、奴は私からすれば、白蟻みたいな害虫なんだけどな」

デス・ウィングは死にたがっている。

しかし、ホーリー・ドラゴンの能力でも、彼女は死ぬ事が出来なかった。

彼女の肉体は、大気で作られている。

「人間は純粹善になれるのか？ 悪なる部分を持たない人間はどれくらいいるんだ？ お前の能力で完全消滅しない私は、善なる部分が砂粒の一滴くらいは残っているのかもな？ 何にしても、お前は悲劇と絶望と惨劇と悪夢を齎す者だ。最高なくらいに、自分自身を極悪人だとよく理解していない悪そのものだ」

そして、彼女は一人、愚痴るように呟く。

「まあ、いい。せいぜい、頑張れよ、“エア”。お前の悪意、とっても期待しているよ」

何にしても、壊された絵の代わりになるものを入手しないと気が済まない。

彼女は、パソコンを開いて、闇オークションのサイトを覗く。

そして、自分自身の空虚を満たしてくれる商品を、ひたすらに探し続けていた。

十

とある国の話だった。

デス・ウィングは、その出来事の話をも美しい物語だと認識している。

彼は、そこに舞い降りた。

彼の名はエアと言う。力の名は、ホーリー・ドラゴンと呼ばれていた。そして、彼自身が、ホーリー・ドラゴン。聖なる竜と名乗る事もあった。

国全体に、光の柱と、光の環が降りていった。

そこは信仰が強い国だった。神を強く信じていた。

人々は、光の柱によって包まれていった。

光は怪物だった。

その柱に触れた人々の多くは、大脳が消滅したり、手足が無くなったりした。

それは、どうしようもない程に、無残な光景だった。

たとえば。

手癖が悪かった盗み犯。

そして、肉欲や食欲、物欲などの強かった者。

それらは、彼の能力が裁く対象になってしまったからだ。

盗み犯は、利き腕の手首を消滅させられた。幼い頃に万引き癖のあった青年の一人が、両手を消された。詐欺師は喉を消された。空き巣は両脚を消された。大食漢は、食道を、胃袋を消された。

売春婦は、下半身や胸元を消滅させられた。好色で、妻がいるのに、浮気をしていた男も、下半身や両眼などを消された。

過剰なまでの、粛清。

それは、暴力による圧政以外の何物でも無い。

赦す、という事、人間は変わる、という事を、エアは考えなかった。邪悪なる魂は、全て滅すべきだ、と思い続けていた。

それに、何故、犯罪が起こるのか、に関して、彼の思慮は浅薄だった。あるいは、どうだって良かったのかもしれない。盗みや売春でしか生計を立てられない者達、それらの者達の立場など、まるでお構いなしだった。

その光の柱は、極めて独善的な裁きを行い続けていた。

この惨状を引き起こした者は、正しい事をしているのだと本気で思っているみたいだった。確かに、情緒としては正しいと思う者も多かった。

しかし、やっている事は、実質、独善的な大量虐殺や重度の刑罰を、黙々と実行しているに過ぎなかった。独裁者による見せしめと何ら変わりが無かった。

エアは病的なまでの独善的な潔癖症だった。

エアは、自分の正義に酔っている。

それ故に、完全に狂っていた。

そして、彼は自分の正義観が、極めて独我論的であるという事を理解している節もあった。偏執的で、自己中心性さえ含んでいる事も知っていた。

それでも、彼は正しいと思って、自分の力を行使し続けた。

それこそが、自分が為すべき事なのだと思い続けたのだった。

穢れを浄化したい。

それは、彼の極めて、独善的なものからだ。

彼は、厳格な宗教家の両親の下で育てられた。

神の代理人に、あるいは神そのものを降ろす肉体になる事を望まれて、育てられた。

エアは。

子供の頃、何か粗相をする度に、死に掛けるような教育という名の虐待を受け続けた。

彼は、信仰の狂気の犠牲者であり、加害者だった。

力に目覚めて、彼は、まず汚れ切った、この世界を粛清しようと思った。

それこそが、神の望みなのだと思い込んでいた。

黙示録を、神々の黄昏を、最後の審判を行うべきだった。

エアは狂っている。

彼の力である『ホーリー・ドラゴン』は狂っている。

それが、デス・ウィングの認識であり、多くの者達の認識だった。

メビウス・リングは、ドーン全体を管理している、もう一つのシステムである『アリアンロード』に対して、ホーリー・ドラゴンをランキングに加える事は行わなかった。

何故ならば、いつか彼女自身が、忌むべき混沌そのものとして、彼を自ら始末しようと考えていたからだ。

ハンター達、そしてランキングに入れられている者、それらの者達は、メビウスにとっては、あくまで“可能性”だった。意図的に、せめぎ合いをさせる事によって、能力者がこの世界に齎す、ある種の希望の可能性を模索している、実験のようなものだった。

しかし、それから外れてしまった者は、メビウスはどうしようもない“混沌”として始末するべきだと考えていた。

十

「美しい世界以外、俺にはいない」

エアは、透き通るような、金色の髪を撫でる。

彼は、白と蒼を基調にしたローブを身に纏っていた。

十字架型の装飾品も、大量に身に付けていた。

ダートは完全なまでに、悪そのものだ、悪の巣窟だ。

だからこそ、利用してやろうと思った。

この世界そのものに、審判を下す為に、敢えて悪の傍にしようと思った。

デス・ウィングの言葉を思い出す。

.....お前は只のサイコだ。だから、私はお前が好きだ。楽しんでいるだけなんだろう？ お前は、本当はこの世界を破壊したいだけでしかないんだ。間違いを正すだの何だのってのは、只の口上で、自身の欲望の正当化でしかない。だからこそ、お前は美しいし、素晴らしいんだろ
うな？

エアは、その言葉を思い出して、笑った。

この世界を、清めよう。

全ては、汚れているのだから。

エアは、自分の力の事を考える。

これは、暴力衝動から為るものなのだろうか。あるいは、これもまた、異常な倒錯性から巻き起こるものなのだろうか。どちらにしても構わない。ただ、自分の感覚に従うまでだ。

もともと、神に近い竜になりたい。

彼は、自らの家に、自室に、祭壇を作る。聖杯を置く。

これは、自らが創り出した教義なのだ。それは自分だけが知っていればいい。

彼は部屋の扉を開けた。

外はよく澄んだ空気をしている。

さて、これから、ドーンを倒しに行こう。

ドーンだけでなく、可能な限りの賞金首も倒しに行こう。

そもそも、能力者の数は、少なければ少ない方がいい。きっと、妥協しないという方向を突き詰めていけば、自分以外の能力者なんて存在する必要なんて無い。

浄化こそが、人類にとっての幸福になるだろうから。

ハンターなんて連中も、本質的には、賞金首と何ら変わらない。

十

朧気に、夢を見ていた。

過去の記憶の残滓だ。

メアリーの顔が、ちらつく。

今日からは、新しい両腕と、両脚を与えてやる、と言われた。

言われるままに、アイーシャは、金属の両手と両足を取り付けられる。

何だか、不気味だ。自分は解放されるのだろうか？ そんな訝しげな気分になる。

メアリーが、アイーシャをある部屋の中へと案内する。

そこには、ルブルとセルジュもいた。

暗く、冷たい部屋だった。

メアリーの顔は、いつに無く、恍惚としていた。

その部屋では、おそらくは近隣の村からさらってきたであろう、彼女好みの女達がいた。

アイーシャは絶句していた。メアリーの隣にいる、セルジュの顔も蒼白になっていたのが分かった。

それは、ルブルの能力によって、肉体を接合された女達だった。彼女達の服を見る限り、様々な階級や立場の人間なのだろう。十名近くはいたと思う。

彼女達は頭半分がそれぞれ、お互いの頭と重なっていて、融合していた。メアリーが、何度も、女達で出来た、その“生け花”に剣を刺していった。その度に、女達は快樂中枢を刺激されるのか、恍惚とした表情を浮かべていく。彼女達は両腕の切断面が天井と融合し、両脚はそれこそ大きな鉢のようなものに植えられていた。

そして、おそらく女達から切断したであろう二十本近くの両腕は、生け花のように、海草のように、鉢を取り囲むように、地面から生えて、それぞれ不気味に蠢いていた。

ルブルは、椅子に座りながら、じいっと、それを観察していた。

セルジュは、今にも吐き出しそうな顔をしていた。

アイーシャの顔は、真っ白だった。

メアリーだけが、正気を欠いた顔で、ひたすらに女達にサーベル状の剣を突き刺していく。とてつもなく、彼女は楽しそうだった。

「ねえ、アイーシャ。アイーシャ、貴方はもういい。ちゃんとダートのメンバーをやってね？ 私は新しいプレイ用の相手を見つけたからっ！」

そう言いながら、

「……お前は、お前は、間違っているっ……。何で、そんな事、出来るんだ？ おいっ、何とか、言えよ。狂っているなんてもんじゃない、そんなのは褒め言葉か？ 何で、そんな事、出来るんだっ……」

セルジュは、アイーシャの言葉に頷きながら、項垂れて壁に持たれていた。

「俺も、メアリーの事は理解出来ない。こんなの作ったから、自慢気に見せられている。上手くプラモデルが作れたって、ノリだぜ？」

そう言いながら、セルジュは地面にへたり込んで、必死で口を押さえていた。

女達の不気味な声が唱和していく。

セルジュは耳を塞ぎながら、部屋を出ていこうとする。

「ねえ、グリーン・ドレスにも自慢しようと思うの。ああ、アイーシャ。怖い？ 私が怖いのかしら？ 大丈夫よ、貴方を彼女達の中に、加えるつもり無いから。ねえ、せいぜい、腕を磨いて、私を殺そうとしてよ。もうすぐ、侵略を始めようと思っているから。貴方にも期待している……」

ルブルはひたすらに、冷たい眼で、女達とメアリーを交互に見ていた。

メアリーはひたすらに、サディスティックな喜びに耽り続けていた。

セルジュが口元を押さえながら、アイーシャの肩を掴んで、一緒に部屋の外へと連れていく。

二人で、その部屋の外で、胃袋が空になるまで吐いた。

吐瀉物は、地面の部品となった死体達が、床から口や舌を生やして食べ尽くしてくれた。

そう言えば、これから夕食の時間だった。

メアリーが作った晚餐だ。

二人共、食欲が完全に失せていた。

.....。

それは、ダートの侵略が始まる直前の頃の出来事だった。

十

アイーシャは、寝汗と共に飛び起きる。

そこは、湿った洞窟の中だった。

彼女は、水筒を取り出して、口の中に注いでいく。

どうやら、アイーシャは悲鳴を上げるように飛び起きたらしい。

横で毛布に包まっている、バイアスをも起こしてしまっていた。

アイーシャは、魚の缶詰を開けて、それを口にしながら、あの部屋の光景が、また頭の中でちらついている。ルブルのカラプトで醜悪なオブジェへとデザインされた、あの女達は、おそらくは、先日のグリーン・ドレスの城への放火でちゃんと、焼け死んでくれただろうか。彼女達にとっては、死こそが救いだったであろう。

過去の出来事を思い出して、メアリーの異常さを再確認し、アイーシャは闘争意欲を掻き立てていた。

やはり、メアリーは生かしておくべきじゃない。

彼女は、この世界にいてはいけない悪魔でしかないのだから。

アイーシャには、ひたすらメアリーに対しての憎悪と、怒りばかりだけがあった。

「なあ、バイアス。お前さ、何かに対して怒っているの？」

アイーシャは、思わず訊ねた。

少年は、相変わらず、きょとんとした顔をしていた。

彼もまた、無邪気に大量殺人を犯したのだ。

きっと、この少年も、完全なまでに狂っている。

正気を彼岸の向こう側に置いていったに違いない。

けれども、元はと言えば、自分達が彼の中にある闇を目覚めさせたんじゃないのか。

だからこそ、元凶は自分達にある。そして、この侵略戦争の引き金を引いたのは、メアリーとルブルにある。

アイーシャは、きっとこの少年は、自分が引き受ける責任なのだと思うた。

道中、鹿を殺す時に、少年は嬉々として力を使っていた。

彼にとっては、おそらくは殺す事そのものが目的と化してしまっているのだろう。

侵略戦争は、彼のような存在を燻り出す為に、行っているものなのかもしれない。

メアリーは何を考えているのか分からない。

ルブルもだ。彼女達二人は、真の狂人なのだ。

なら、どうやって倒せばいいのだろう？

それにしてもだ。

美しいものが見たかった。とにかく、汚れの無い何かが見たかった。

心地の良い音楽だとか、晴れ渡った景色だとか。そういうものが見たかった。

アイーシャは、心と呟いていた。

「私はもしかしたら、イゾルダと仲良くなれたかも……。メアリーはイゾルダにとって、矛盾そのものじゃないか？ イゾルダは彼の言う組織から、似たような実験をされ続けてきた筈……………」

そうなのだ。

ダートは、矛盾だらけだった。

共通の目的なんて、何も無かったのだろう。

全ては、ルブルの遊戯でしかないのだから。

鏡写しのように、同じ事をしてはならないんじゃないのか？

少なくとも、イゾルダは復讐として、人間を人体実験には使わなかった。

だから、アイーシャは、メアリーは、速やかに息の根を止めるつもりでいる。自分もまた、サディズムに蝕まれるつもりは無いと考えている。

バイアスは、グリーン・ドレスと自分が生んだ産物だ。

憎悪や破壊の連鎖を止めなければならない。

狂気の蔓延を終わらせなければならないのだ。

……。

自分は汚れている。

清らかな感情を取り戻したい。きっと、それは幼い頃に持っていた。自分は正しい意志を持てるんじゃないのか、とかいう何かなんじゃないのかと思うのだ。

「なあ、バイアス。お前、現実にはいないだろ？」

アイーシャは、明らかに責めるように彼に言う。

少年は、きょとんとした顔をしていた。

「お前は、お前のイメージの世界の中を彷徨っているんじゃないかって思うの。お前は他人の心の痛みを思い浮かべられない。死体を美化してしまっている。自分の感情を取り戻せずにいるんだ。なあ、人間に戻れよ、

バイアスは、ぽかん、とした顔をしていた。

「……あな、貴方は……、貴方は俺を否定するのですか？ 俺には、天使が降ろされたのです。俺は貴方達に、生贄を奉げようと思ったのです。これは供物なのです。何百年もの昔、グリズリーは、儀式を執り行っていました。それは、神様や悪魔に奉げる為の供物なのです。俺はだから、贄を奉げたんです。もう一人の俺が囁き掛けてくるのです。貴方達のお手伝いをしなければならんって。きっと、これはこうなる運命なんだって」

言うならば。

これは、責務だった。

きっと、彼みたいに、ダートの侵略によって悲劇的な人生を送ってしまう者達は、数知れない。自分が眼を瞑って、何も見ないようにしているだけだ。

破壊行為の本当に恐ろしいのは、その後に残った呪詛が蔓延していくという事。

暴力の先にあるのは、更なる暴力で、それは伝染病のように広がっていく。

だから、この世界は何一つとして良くなりはしない。

そうだ。

ダートを止めなければならない。

十

処で、メアリーとルブル、どちらの方が脅威なのだろうか。

ルブルの作り出すゾンビ達は、言ってしまうえば有象無象の集団だ。

アイーシャのネクロ・クルセイダーで作り出す機械兵団には足元も及ばない。アイーシャのゾンビー体は、ルブルのゾンビ数十体分くらいの性能と殺傷能力があると言っていい。そういう単純なパワー差が生まれてしまったのは、ルブルに対しての過剰なまでの恐怖からだろう。純粹な戦力だけならば、負ける気がしない。けれども、アイーシャは、ルブル一人とも一騎打ちで戦う事に対して、怯えていた。

メアリーも怖い、ルブルも怖い……。

それは、心の奥底までに植え付けられてしまった恐怖心からなのか。それとも、ルブルにはまだまだ秘めた能力の使い方を感じ取ってしまうからなのか。

恐怖は、それ自体の奴隷となる。そんなものに、隷属させられるわけにはいかない。

あるいは、罪が、鎖のように重なりあっていくのかもしれない。

だから、罪の根源を経つしか他には無い。

絶対に、倒さなければならない。

ドーン側には、アイーシャから見ると、まだ迷いさえ感じられる。結局の処、ケルベロスの甘さと、インソムニアの物事に対してのシニカルさが大きな問題だとしか思えない。よって、そういう意味でも、アイーシャは、ドーンに協力する気にはなれない。

自分は、今、何を求めているのだろうか？

この肉体は汚れているのだから、きっと清らかになりたいと思ってしまう。

だから、大きな光を探しているような気がする。

だからこそ、これは自分が責任を負わなければならない罪証なのだろう。

魔女の森に、ある日、メリサは迷い込んだ。

この森は街から街を繋ぐ街道を繋ぐ場所に隣していた。魔女の森には、中心部に近づくに連れて、ルブルの放った奇形のゾンビ達が彷徨っていたのだが、街道の辺りはとても静かなものだった。

彼女は、たまたま街道を歩いていて、夕暮れ近くになってしまった。

しばらく、彼女が歩いていると、四人組の無骨な男達に囲まれた。

メリサは慌てて走り出したが、逃げる暇も無く、彼女は男達に連れ去られてしまい、その男達の洞窟のねぐらへと入れられた。

男達は夜盗だった。この辺りで、追い剥ぎをしながら糊口を凌いでいた。おそらくは、離れの街で敗戦した兵士達の残党だったのだろうが、その素性は不明だった。

男達は、あらん限りの暴力を振るいながら、メリサを凌辱した。メリサは処女でこそ無かったが、五日近くもの間、男達に犯され続けて、この世の生き地獄を味わい続けた。

しばらくして、彼女は飽きられて、森の奥へと捨てられてしまった。

この辺りは、怪物が出るという事で、夜盗達から恐れられた場所だった。

メリサは、ひたすらに崩壊した心のまま森の息吹を吸い続けた。

彼女は男達の体液がこびり付いた襤褸雑巾のようになった服を身に付け、全身の所々が痣だらけになり、骨が折れている箇所もあった。このままだと、森の獣に食い殺されるか、餓死して地虫達の餌食になるのだろう。彼女は、ぼんやりと、これまでの人生の事を思い返し続けていたのだった。

そして、七日目の夜が訪れた。

そこには、一人の漆黒のドレスをその身に纏った女が佇んでいた。

彼女は、メリサに何があったのかを訊ねる。メリサは断片的に合った出来事の一部始終を話した。

復讐がしたい？ メリサは、そう訊ねられる。メリサは地面に倒れたまま、頷く。

黒いドレスの女は微笑を浮かべていた。

ならば、それだけの力を貴方に上げる。そう告げられた。

十

アイーシャは、バイアスと一緒に、ルブルの森の中を彷徨っていた。

もし、メアリーがいるとするならば、おそらくは、幻影によって霍乱してくる筈だ。森の木々を増やししたり、地形を変えたりなどをしてくる筈だ。

以前も、城の数を増やして、ドーン側を寄せ付けないようにしていた。だから、念入りに、相手の出方を伺った方がいい。

メアリーの幻影の対策は取れている。

単純な事だ。それは、グリーン・ドレスから学んだ事だった。

それは、体温だった。

幻影には、体温が存在しない。だから、森の木々に住む小鳥やリスなどを探せばいい。

彼女は緑の悪魔を真似して、体温を感知する機械を創り上げていたのだった。

先に機械の斥候を送って、それから慎重に攻める。

それが、メアリー達と戦う為の必須条件だった。

森の中を進みながら、アイーシャは機械のレンズ越しに奇妙な物を見つける。

「……何だ？ 此処は？」

そこは、大きなコテージだった。

以前は、こんなものは無かった筈だ。

どうやら、切られた丸太を、木の枝や蔓、根で編まれて作られている。酷く妙だった。

どう考えても、不自然極まりない。

無視して横切ろうかと思ったが、そう言えば、ルブルの城はどうなったのだろうか。グリーン・ドレスが破壊した後、彼女達はどのようにしているのだろうか？

ルブルは城を建造する際に、死体を必要としていた。こんな短期間に、あの戦力で城一つを作れる程の死体を用意出来るとは思えない。

「バイアス」

アイーシャは、ひとまず新しく出来た味方を試しに頼ってみる事にした。

「何ですか？」

「あのコテージ目掛けて、お前の能力を全力で発動させる事は可能か？」

「ええ、やってみます」

バイアスは、両手を翳す。

コテージが、虚空から生み出された杭の群れによって、孔だらけになっていく。

中に誰かがいるとすれば、ひとたまりも無いだろう。

アイーシャは、慎重を来たしながら、ズックの中から、ネクロ・クルセイダーで作り出した梟型の機械鳥を取り出して、孔の開いたコテージの中へと差し向ける。

そして、彼女は中継用に、小さなスクリーンの付いた電子機械を取り出した。

機械鳥は、コテージの中を中継している。アイーシャには、それが分かる。

コテージの中は、無人だった。動く者が誰もいない。

しかし……………。

「何だ？ あれは……………」

地下室へと続いている階段を見つけた。

もしかすると、あの中に、メアリー達が潜んでいるのかもしれない。

どうしても、その疑念を拭い去る事が出来なかった。

恐怖が背筋を駆け上ってくる。

しかし、そんなものは克服しなければならなかった。

これからの人生の為にも、そして彼女達によって喰い潰されていく多くの者達の為にも、自分

はメアリー達を討たなければならないと思った。

きっと、それは信念のようなものなのだろう。

かつて、プライドの高かった自分を取り戻さなければならない。

十

地下室を、ゆっくりと降りていく。

死体の臭いが、何処かしら充満してくるかのようだった。

中を進んでいると、此処がどういう場所かを理解する。

それは、牢屋だった。

牢屋が並んでいる。

アイーシャは、この中に、何者かが潜んでいる事に気付く。

.....新たな、ダートのメンバーか？

分からないが、とにかく警戒するに越した事は無かった。

セルジュなんかは、鏡のトラップで、一撃で相手を葬り去る事が出来る。だから、この地下室の奥に潜む何者かも、警戒し過ぎという事は無いのだった。

「でも、.....私は、臆病者なんかじゃない。奴隷じゃない、屈服なんてしたくない」

彼女は、腰元に指していた長剣を掲げる。

現れた敵を、いつでも両断出来るようにしなければならなかった。

それは、大きな鳥籠だった。

中にいる者達を見て、アイーシャは絶句していた。

それは、複数の男達だった。

男達は、顔や背中、胸や腹などに女性器のようなものを縫い付けられて、皮膚と一体化し、男性器のような形をした植物の蔓に犯され続けていた。男達の快楽に酔い痴れ、苦痛に戦慄く声が同時に聴こえてくる。もはや、性欲と肉体の苦痛以外には感じていないのかもしれない。

見るに堪えなかった。

アイーシャは、思わず眼を反らす。

奥には、一人の人影がいた。

それはゆらゆらと、蝋燭のように揺らめいていた。

「あなたも、素敵な芸術品にしてあげようか？ あたしが感じた絶望、あたしが感じた恐怖、あたしが感じた苦痛、あたしが感じた殺意、あたしが感じた屈辱感をみんなに分け与えたくてきたの。贈り物にしてあげたい、とっても素敵な贈り物に。そうすれば、私はきっと幸せを感じる事が出来るからあ」

奥の方から何者かの声が聞こえてくる。女の声だ。

声はかすれている。まるで、それが当たり前であるかのように、酷い憎悪を押し殺している。

空間一帯が震えているかのようだった。

アイーシャは、嘔吐感を抑えながら、その女を切り伏せようと考えていた。

「お前は、何だ？」

「あたし？」

涎を垂らしながら、女は笑う。

「あたしの名前、メリサ、って言うの。あはっ、あははっ、あなたも仲間に入りに来たの？ 気持ちいいわよお？ 植物に強姦され続けるの？ ほら、男達を見てよ。私を輪姦した男達。彼らはずっとずっと、二十四時間、植物のエキスを注入され、生かされながら、快樂の絶頂を味わい続けている」

アイーシャは、自らの額を押さえる。

この女は、狂っている、完璧にだ……………。

何をどうやったら、こんな精神状態になったのか理解が出来ない。

醜悪過ぎる。

それは、どうしようもない程に。

人間という存在を、人格というものを凌辱して、物としか扱っていない。

頭が痛くて仕方が無かった。

アイーシャは、しばし茫然としていた。

何かが、おかしかった。まるで、歪んで反転してしまった世界を見せられているみたいだった。もしかすると、ルブルの城にいた時の自分は、このような顔付きをしていたのだろうか？

おぞましい姿をしていたのだろう。身も心もだ。

アイーシャはこの空間にただいて、気分が滅入っていく。恐怖よりもむしろ、強い自己嫌悪に襲われる。

奇形の植物が、一面を支配していた。それらは、まるで蜘蛛の糸のように辺りに伸びている。

「お前は、……罪悪感というものを感じないのか？」

アイーシャは、頬から一筋の汗が流れるのが分かった。

背筋に、僅かな悪寒が走り出す。

「あたしが？」

女は、歌うような声質をしていた。

罪悪感、という言葉に強く反応したみたいだった。

かなり、やばそうだ。

アイーシャは、大剣を手にする。

「だって、この男達は私を散々、慰め物にしたのよ？ 怖かった、苦しかった、憎かった。身体中が痛くて、頭の中がバラバラに壊れていった。……あなたも女なら、分かるでしょう？ 危険な日だったのよ？ 真っ赤な血が体内から流れる日。私、産みたくないのよ。可哀相でしょう。可哀相。大丈夫だった、私は化け物になったから。でも、代わりに彼らを私の子供にするの」

その歌声は、怨嗟だった。その両眼は、この世界全てを憎んでいるものだった。

彼女は両眼を剥き出しにしながら、地下へと入ってきた二人を舐めるように見つめていた。

ずりい、じゅりい、と、壁や天井などから、人型をした頭部がウツボカズラのような形状をした食虫植物達が生え出して来る。その数は、次第に増えていく。

アイーシャは、心が折れないように、強く剣の柄を握り締めていた。

十

一面に、廃墟が広がっていた。

此処は、無法地帯と化していつていくのだろう。既に、何名かのグループが、他の住民から食料を奪い合っているらしい。

そこは、軍の施設跡だった。

彼らは、小さな火を焚いていた。

火は忌むべきものだったが、暖を取る為に、あるいは肉や魚を焼く為に、必要なものだ。炎のトラウマが湧き上がってくるが、それでも彼らは必死で生きようと、トラウマを克服しようとしていた。

彼らの中には、女子供もいた。

小さな赤ん坊を守る女もいた。

幸い、軍の地下シェルターにあった食料は綺麗に残ったままだった。

機械兵達は、何処かへと行ってしまった。

つい、昨日の事のように思えるのだが、もう数週間も経過しているのだ。

皇帝であるパルスは死亡している。

それ処が、此処はもうどう考えても、国の体裁を取っていない。

ただ、廃墟の残骸なのだ。

此処は、亡んでしまった国なのだ。

生き残りばかりが、此処には寄り添っている。

他にも、生き残りがいれば、見つけようと思う。

食料が不足している、傷薬も不足している。

傷の深いものは、仕方無く、刃物で刺し殺して楽にしていった。

おそらく、まだ数千名くらいの者達が、国に散り散りになって生き残っているに違いない。彼らは、百名余りの人間で固まっていた。

みな、口々に呪詛の言葉を吐いた後、しばらくして、誰かが諫めようとする。

「ドーンのハンターになるんだ。奴ら、絶対に殺してやる」

男達はいきり立っていた。

禿頭の大男が、大きな斧を手にして、先陣を切るつもりでいるみたいだった。

彼らは、グリズリーに住まう者達の生き残りだった。

家族を殺され、国を焼かれた。

その代償は、とてつもなく大きい。

男は、どうやら気付いていなかった。

それこそが、ダートの……メアリーという存在の目的である事をだ。

憎悪を撒く者、それがメアリーだ。

その禿頭の男の頭は、大きな杭によって、吹き飛ばされる。

そして、彼はそのまま廃墟の壁へと撃ち付けられた。

まだ二十にも満たない少年だった。

彼らは、此処に住まう者達を、自分が手にした力で、殺して、殺して、殺し続けた。みな、何かを口々に叫び続けていたが、お構いなしだった。

「楽しいんだ、こんなに楽しいんだ。天使はこんなに楽しい事をしてくれたんだ」

彼は、自分の力を使い続ける。

次々と、同胞達の肉に、骨に、内臓に、彼が作り出した杭が刺さっていく。彼らは磔刑へと変えられていく。

子供を抱えた母親の姿を眼にする。

彼は、悲しそうな顔で、右手を母親と、彼女の子供に掲げた。

「生まれなければよかったんだ。この場所でな。可哀想だろ？ そいつもお前も死なせてやるよ」

そう言って、彼は母子共、殺した。

彼の全身は、真っ赤な紅で染め上げられていた。

人々は、大きな針によって頭や、胸を壁に打ち付けられて死んでいた。

そう言えば、彼らは数日前までは、大切な友人だったような気がする。一緒に、食べ物を分け合っていた。

けれども、そんな事は、どうだって良かった。

彼にとっては、とてつもなく瑣末な事だった。

彼は、ダートの侵略により生まれた者だった。

まるで、それは星を見ているかのようだった。

それは、とてつもなく美しかった。

燃え殻の中で、彼は、星を見ていた。

機械兵達が、侵攻してくる。

それを、彼は遠くから眺めていた。

ウイルスのように、憎悪や思想は伝染していく。

この戦いによって、様々な能力者達が立ち上がった。

通信機から、それは聞かされている。

グリズリーにも、多くの能力者達がいた。

けれども、あの天空から舞い降りてきた赤い悪魔を倒す事は誰も出来なかった。

きっと、彼女を再び呼ぶ為にはそれなりの代償が必要なのだろう、だから。

生贄は必要だった。

七名いる家族の全てを殺す事。

殺して、殺して、殺して、殺し尽くす事。

おそらく、そこに正常なものなど、存在しないのだから。

彼の名前は、バイアスと言った。

元々は、普通の人間だったのだが、この災厄の影響で覚醒のようなものをしたのだと思う。

彼は、星になりたいと思った。

天空に、祈りを奉げたかった。

だから、沢山の生贄を用意した。

『クリムゾン・サクリファイス』

それが、彼自身の力に付けた名前だ。

焦がれる感情が、彼の心を支配する。

出来れば、あの焔を操る女と、機械兵達に、また出会ってみたい。

それが、彼の願いだった。

だから、彼は、レジスタンス達を、みんな殺害した。生贄が必要だったから。

きっと、大切な友達になれると思った。

感動的だったし、とてつもなく美しかった。

きっと、自分の為に、彼女達は、あのような行いをしたのだろう。

胸がどうしようもない程に、躍り出してしまいそうだ。

破壊はとてつもなく美しい。その空虚さが、胸の空虚さを埋め合わせてくれるのだから。

万象の音が聴こえてくる。

それは、どうしようもなく美しい。

彼は、音を感じているのだと思った。

悲鳴が、どうしようもない程に感動的だった。

何もかもを、生贄へと奉げてやろう。みな、供物になっていけばいい。

生きている者が、下らなくて仕方が無い。

せつかく与えられたチャンスは、使いこなすべきなのだ。

バイアスは、軍事国家グリズリーにおいて、軍人の父親を持っていた。

厳格な父親の下で、育てられていた。

軍隊に入って、銃の訓練が行われる。

そういう人生ばかりが、目の前に広がっている。

彼はつね日頃から、この国に対して違和感を持っていた。

グリズリーは、色々な国を搾取して、強大な国家になっていた。何もかもが、欺瞞に満ちているような気がした。

あの天高く舞い上がる、焔の怪物。

それから、地上を侵攻する機械兵達。

機械兵は、グリズリーの兵達を次々と挽肉へと変えていくと、そこら辺の鉄骨や機械などが変形していき、死体を飲み込んでいく。すると、挽肉になった死体は新たな機械兵へと変わっていく。その光景を見ていると、バイアスは自分も解放しなければならないと思った。

あの紅の魔王達の下で戦いたい。

それが、彼にとっての強い望みだった。そして、救いだったのだ。

赤い花を咲かせよう。赤い花畑で、いっぱいしよう。

大きな、墓を作ろう。

どうしようもない程に、とてつもなく大きな墓をだ。

あの赤い天使と、機械兵を作り出した者の下へ行こうと思った。

それぞれ、二人いるんだろうなあ、と彼は漠然と思った。

機械兵を作り出したのは、赤い天使ではない、何故だか、そんな確信だけはあった。何故ならば、彼は手に入る力には、制限のようなものがあるんじゃないのかと、感覚的に理解してしまったのだから。

バイアスは歩み出した。

自分の進むべき道は修羅だとか、悪鬼羅刹だとか、そういったものなのだろう。けれども、それでも構わないと思った。自分は真っ赤な存在になりたい。

かつて、彼に真っ赤で綺麗な色彩を網膜に植え付けてくれた者達に対して、最大限の敬意を示さなければならない。

そう、あの者達に会えたなら、もし自分が殺される事になったとしても、付き従いたい、と誠意を持って頭を垂れようと思ったのだった。

十

バイアスの能力が、刃の吹雪となって、メリサの作り出す植物達を串刺しにしていく。

バイアスは鬼気迫る顔で、さながら自身の君主に対して道を開けるように、敵の作り出した怪物達を始末していく。

アイーシャは剣を変形させながら考えていた。

メリサは自分なんだ。

それは、確信だった。

アイーシャは、苦しい程に痛感していた。

自分は、ルブルの城にいる時、ずっとメアリーの手によって汚され続けていた。身も心もだ。乗り越えなければならなかった。

幸福を感じ取れないのならば、間違いなく不幸なのだと思う。

アイーシャも、何度も戦おうとした。過去の傷からだ。

どうしようもない憎悪と自分自身に対する嫌悪感が、交互に湧き上がってくる。自分は汚れているんじゃないのか？ そんな思いでいっぱいになる。そして、自分を汚した対象を、あるいはどうしようもない程に生きるだけで苦しい、この世界を破壊したくなる。

眼を反らすわけにはいかない。

そう、メリサは自分の鏡だった。

彼女は、おそらくかなり苦しんでいるのだろう。

もはや、正気というものを失ってしまっている。

アイーシャは、自分の思考を整理する為に、自分が“何を憎んで”、“何を憎むべきではないか”を切り分けようとしていた。

憎むべき相手と憎まない相手を峻別しなければならない。

そして、憎むべき相手は可能な限り少ない方がいい。

「.....そうだな、たとえば、セルジュも、まだ好きだったかな」

そう言いながら、アイーシャは、手にした剣を振るっていた。

剣は、バラバラに分解されて、中心をワイヤーで通されて、メリサの肉体を叩き潰していく。

そして、くるくると回りながら、彼女の上半身を覆っていく。

「奴は、私の知る限り、最後まで正気を保っていたのと。お前みたいな自我が崩壊しなかったからな。お前は、きっと死んだ方がいいんだ。そして、私の在り得たかもしれない可能性なんだ。お前なんて、大嫌いだ」

メリサの腹が膨れ上がり、腹が破れ、巨大な食虫植物が生え出してくる。それは、幾つものメリサの頭部が融合していた。メリサの頭部は増え続けていく。みな、歌い、唱和し、恨み言を言い、涎を垂らし続けていた。

バイアスが、アイーシャの背後で、彼女を援護として、巨大な杭や釘を幾つも、メリサの腹へと打ち込んでいく。

「.....どうして？」

メリサは、立ち上がる。

「あなたも、あなた達も、この世界が憎く無いの？ 最初、憎んでいるのは、自分を傷付けた相手だけだった。けれども、被った苦しみとか絶望は消えないの。みんな、そんなものを抱えずに生きている。私が受けたのは、男からの凌辱だけではなくて、この世界から振り下ろされた不条理なんだって分かった、だから、私はみんな憎くて仕方無いの.....」

べきりっ、べきゅりっ、と、メリサの全身の骨格が歪んでいく。

そして、無理やり、巻き付いた剣を振り解こうとする。しかし、アイーシャの剣は、しっかりと、メリサの肉体に深く食い込んでいた。

彼女の両腕が、槍のような形へと変わっていく。

「だから、セルジュとグリーン・ドレスはマシだったって言っている。私は“切り分けている”。憎悪するべき相手と、まだマシだと思える相手をだ。好きと嫌い。それは、ほんの些細な部分でいい。ほんの小さな違いでいい。それが、“赦す”って事なんじゃないかって、漠然と思った」

アイーシャは、分解して、蛇のように巻き付けた剣の柄を強く握り締める。

「いくぞ、『ネクロ・クルセイダー・ヒート・ソード』」

すると、蛇のような形になってメリサの上半身に撒き付いていたアイーシャの剣が、高熱を帯びていく。

「熱い、.....何、これ.....？ ううううっ、ひiiiiiiiiiiiiっ！」

メリサの顔が苦痛に歪む。

「私は、切り分けている。ルブルとメアリーは絶対に倒す。そして、お前も生かさない。お前はあったかもしれない私だからだ。とてつもなく醜悪だ。鏡なんだ。セルジュも、醜い自分自身と戦っていたな。今になって、彼の事がちらつくのは、お前は私の鏡だからなんだっ！」

メリサの全身が、燃えていく。

ぼろぼろと、皮膚が崩れ、肉が溶けていく。

バイアスが、追撃として、針の束を撃ち込み続ける。どうやら、彼は用途によって、杭、釘、針など、生み出して撃ち込めるものを変えられるみたいだった。

メリサの命は消えていく。

枝が落ち、葉が散り、幹が裂け、根が朽ちていく。

「お前、多分、ダートのメンバーに入れられていないんだろう？」

アイーシャは、冷淡な口調で訊ねる。

この敵は、弱過ぎるからだ……。

もはや、メリサの命は消え去ってしまっていた。後には、炭化した人のような形のものが転がっているだけだった。

アイーシャはバイアスの方を向く。

どうやら、二人とも肉体的にはほぼ無傷だ。

しかし、アイーシャは心をズタズタにされたような気分には陥っていた。

アイーシャは、地下室を出る際に、バイアスに命じて、メリサによって変形させられた男達の命を絶つ。男達は、頭蓋を叩き潰すと、あっさりとして死んでいってしまった。

おそらく、メリサはルブルの能力である、『カラプト』によって植物の死体と合成させられたのだろう。ルブルは人の苦しみさえも、自らの道具へと変えてしまう奴なのだ。

絶対に倒さなければならない。

彼女はふと、どうしようもない不条理を思い出す。

構造は読めてしまっていた。

おそらく、メリサを凌辱したとかいう男達、彼らはこの辺りに住まう住民と同じような血筋の顔立ちをしていた。

多分、貧困か何かで盗賊に落ちぶれて、メリサを襲ったのだろう。

男という生き物は死の恐怖を性欲で隠そうとする。実際、アイーシャが知る限り、戦争に向かう男達は、侵略する国々の女達を強姦する者が多いのだと聞かされている。

そう。

被害者が加害者になり、被害者を増やし続けていくのだ。

それこそが、憎悪が連鎖していくという事なのだろうから。

だから、それを乗り越えなければならない。

バイアスは、アイーシャの顔を見て、にこにこ笑っていた。

彼は、アイーシャに、そしてグリーン・ドレスに親兄弟、友人などを殺されている筈なのだ。それでも、彼は彼女に笑いかける。拳句に崇敬していうと言う。

彼は、彼女にとっての罪なのだ。

だから、きっと彼を守ったり、何かしらの代償を払わなければならない。

……私に何が出来るんだ？ 私は何をしたいんだ？

何も分からない。どうすればいいのか答えが何も出来ない。

狂気の先に、何があるのだろうか？

ダートは、異常性欲を在りのままの肯定し、暴力を疫病のように蔓延させていく。

ルブルとメアリーの二人は、全てのモラルを踏み躪る。

つまり、そういう事なのだろう。

そういう事がやりたいのだ。

憎悪は、伝染病のように広まっていつているのだろう。それこそが、メアリーが望んだ目的なのだから。

疫病の進行を止めなければならない。

不条理なまでに押し掛かってくる、破壊の意志という衝動。

それらは、きっと誰もが持っているものなのだろうから。

ドーンの者達だけでは駄目だと思った。

何故ならば、ドーンはメアリーの目的を理解していないだろうから。だから、彼らもまた憎悪に飲み込まれていくのだろう。終わる事の無い憎しみの環の中に押し込められるのだろう。それこそが、メアリーの、ダートの目的なのだろうから。

そして。

ルブルは、きっと純然たる悪だ。

この世界に背信する者だ。

在ってはならない、混沌そのものなのだ。

アイーシャは、傍らにいる少年の顔を見る。

バイアスは、アイーシャにとっての、業のようなものだった。

アイーシャは、かつて正義とかいうものを、漠然と信じていた。

その為に、剣を振るった。祖国の為に忠誠を誓おうと思った。

何の為に自分は戦ってきたのか。

自分の原点を取り戻さないといけない。

切断されたのは、手足だけではないのだから。

きっと、大事な意志だとか、信念だとか、そういったものも切り落とされたのだろうから。けれども……、自分の現状を冷静に認識するならば。

そう、大した事なんかじゃない。

戦争に赴けば、刃物や爆弾の負傷で手足を無くしていく者達なんてザラにいる。

敵軍の捕虜にされて、異常な拷問を受けて、全身の皮を剥がされたり、顔のパーツを削ぎ落とされたりなんて、話もよく耳にする。爆弾で両手両脚や加えて、顔のパーツを失って、病院で生命維持装置に繋がれたまま生き長らえざるを得なかった者達の話もよく耳にする。

自分は、機械だが、手足が生えてきた。

だから、幸福なのだ。

メアリーから受けた性的な汚辱さえも、大した事なんかじゃない。敗戦国の女は、次々と売春

婦にされた国だって知っている。

自分は、もっと強くなければならぬ。マゾヒズムに屈してはならぬから。

苦痛に屈する事は快楽なんかじゃない。

戦って、おそらくは希望だとかいったものを手にしなければならないのだ。

だから、自分がメアリーから受けたものも、戦士として戦う以上は受け入れなければならない。敗北者は、奪われるだけなのだから。

言うならば。

自分の憎悪を乗り越えた上で、メアリーを倒さなければならない。

その為、アイーシャは、一度、グリズリーに戻ろうかとも思った。あるいは、せめてグリーン・ドレスが破壊した街を見て回る旅も行いたい。

彼女は、首を横に振る。

「……いや、今、倒しに行く。バイアスには、奴を倒した後で正気に戻る事を考えて貰う」
アイーシャのネクロ・クルセイダーは、人間や動物などの死体に、金属加工を施して、それをロボットや、乗り物などへと変える能力だ。

喪失した手足を復元させようとする執念によって、手にした力だった。

この力の意味を、これから刻んでいくしかないのだ。

十

ルブルの城があった場所は、焼け跡ばかりが残っていた。

近付くと、何か罫が仕掛けてある可能性もあったので、ひとまず遠くからゴーグルで焼け跡を監視する。特に、変わったものは無い。

そう言えば、森中に放たれていたアンデッドは、先ほどのメリサを除いて、一体も徘徊していなかった。

更に、暫く森の中を調べていた。

すると、塹壕のような形をした家を見つけた。

アイーシャは、例によって、梟型の機械を使って内部を除く。

生活感が漂っている場所だった。冷蔵庫もあり、機械に翼で開けさせると、食べ残しのパイなどが見つかった。

戸棚には、ラズベリーのジャムなどが置かれている。確か、セルジュの好物だったか。

家の質感を見る限り、明らかにルブルが腐肉で作ったものだ。

部屋の一つ一つを見ていくと、何と明らかにセルジュの部屋らしき、鏡の間まで見つかった。更に、ルブルが暗黒魔術に使う壺まで置かれている。

誰もいない。

何処かへと、出払ったか？

しかし、魔術に使う壺が残されている。得体の知れない液体が壺の中に入り、壺を燃やす為の薪が置かれ、つい先ほどまで、使っていたかのような状態で置かれている。この壺で、彼女は何

者かと交信しているのだと、緑の悪魔から聞かされている。そんな大事な物を置いて、何処へと去っていくものなのだろうか？ いや、こんな壺くらい簡単に用意出来る筈だ。

アイーシャは苛立ちを覚え始める。

此処は、正直、不気味だ。

罨の可能性も充分ある。

何かしらの仕掛けが置かれていても不思議ではない。少なくとも、ルブルとメアリーの能力を考える限り、そういう事が得意な力なのだから。

「……もぬけの殻かな……」

普通に考えて、彼女達が、この魔女の森にいつまでもいる道理は無い。

しかし、もし何処かへと潜伏場所を変えるのならば、一体、何処へと向かったのだろうか？

大体、数十分程、経過した頃だろうか。

まるで、痕跡が見つからない。

罨だったら罨だったで、それでも構わない、という考えだった。

だが、ある意味で一番の罨は……。

「……駄目だ。やはり、もぬけの殻だ。此処にはいない、か。……。時間の無駄だったかな。メリサって女を置いておいたのが、そもそも罨だったのかも。此処には、誰もいない。私に無駄足をさせる為の罨なのかな」

深く、溜め息が漏れ出してくる。

アイーシャは、バイアスの肩を叩いて、塹壕の家を後にする事にした。

「もう、魔女達は、この森にはいない。場所を変えられたんだ、これ以上は時間の無駄だ。行こうか」

彼女は、少し、鬱々としたような顔になる。

もし、一番の罨があるとすれば、それは懐疑心に苛まれ続け、ひたすらに無意味に時間を消耗してしまう事なんじゃないのかと思ってしまう。まだ急いで打つ必要は無かったが、それでも、迷わせる、という事はそれだけで精神を削られる。

もしかすると、本当にただの留守で、ルブル達が戻ってくる可能性も高いが、アイーシャは此処から離れる事を決断したのだった。

十

ルブルは、アイーシャの存在に気付いていた。

ニーズヘッグが去っていった後、しばらくしてアイーシャが此処に来ていた。

一応、切り札として、クルーエルがいる。

しかし、アイーシャはまるで隙を見せなかった。そして、クルーエルの能力は、アイーシャに知られている。完全に、それを念頭に入れられて、飛行型の機械ゾンビで、偵察を行っている。

彼女に手落ちがあるとすれば、未だ、ルブルとクルーエルのみが、この家の中に隠れていたという事を見つけられなかった事だろう。

地下室は、二重にも、三重にも作られていた。

戸棚の裏側に、隠し部屋を設置して。更に、その隠し部屋から、別の部屋へと向かえた。

頼りの、メアリーとセルジュは出払ってしまっている。

もし、全力で叩かれたら、完全に終わりだった。

特に、今、メビウス辺りに来られたら、ルブルは完全に詰んでいた。

ルブルは自省の念に駆られる。

.....アイシャの考え通りね。学ばないと。彼女は私を“買い被り過ぎていた”。もう少しだけ、色々な場所を調べれば、私が此処にいる事に気が付いた筈なのに。やはり、私は早くこの場所を去らないと。来たのがアイシャじゃなくて、メビウスだったら、間違いなく見つけられて、殺されていた可能性が高い.....。

それにしても。

メアリーとセルジュが戻るのが遅い。

ミソギとの交渉に時間が掛かっているのだろう。

二人が戻ったら、すぐにでも、此処を離れるべきだった。

ルブルは認めている。

というよりも、冷静に実力を見極めている。

アイシャは、強い。

もはや、彼女の創り出すゾンビは、ルブルのゾンビでは話にならない上に、それ処が、アイシャそのものが脅威以外の何者でもない。

ルブルは少しだけ、固まったような顔になる。

.....って、待って。あれ、もしかして、首領の私が、ダートで一番、弱い.....？

ルブルは自虐的な笑みを浮かべる。

多分、この考えは事実だ。

メアリーも、セルジュも、どんどん能力者として、成長していつている。

ルブルがやった事は、多分、居場所を与えた事くらいだ。

彼女は苦笑する。

.....うーん、ボスとして威厳、何も無いわねえ。グリーン・ドレスに謀反された時も、メアリーのお陰で難を逃れたし。どうしたものかしら。また、謀反されたら、私、簡単に負けて死ぬわねえ。まあ、それはそれで面白いのだけれども。

ルブルは、指先をこめかみに当てながら、色々と、何か良い策が無いか考えていた。

ミソギとかいう男は、メアリー達からの通信によれば、兵器を貸してくれるらしい。それで、何とか、難を逃れようと考えていた。

もし、その兵器とやらが、それなりに強いものならば。自分の生み出すゾンビ達に持たせてみよう。そうすれば、アイシャやメビウス、ケルベロスといった、厄介な連中に対する牽制になり得るかもしれない。

「ドーンの創造主である、メビウス・リングか……」

噂には聞いている。

ドーンは元々は、能力者犯罪者の私刑を行う、各地に集った者達を管理して、組合の体裁を為そうとした試みだ。以前はもっと混沌としていて、能力者同士の派閥や仲間割れ、同族殺しなどが後を立たなかったらしい。

普通に考えれば、メビウスはドーンの中で“最強”という事になるんじゃないのか。

戦ってみたい……。

彼女と対峙すると、自分の不安定な状態を生き来し続ける人生に、何かしらの光明が見えるかもしれないから。

エアは、あの動く人間大の人形を、直接、見た事は無い。

しかし、会ってみたい。

以前から、ずっと思っていた願望なのだが、警戒心からか動かずにいた。しかし、今、ダートが世界中に破壊を巻き起こしてもなお、メビウスはまともに収束出来ずにいる。噂によると、メビウス・リングという存在は、彼女が現れただけで、どんな能力者も一瞬にして、抹消してしまうと聞いていたのだが。

会って、戦ってみて、自分にも勝機があるんじゃないのか、と思えてしまう。

……いっそ、宣戦布告してやろうか？

あるいは、罠に嵌め込んでみようか？

エアの中から、無性に衝動が、湧き上がってくる。

戦ってみたい。

あるいは、彼女がどんな思想信条の下、動いているのか真摯に話してみたい。

とにかく、会うだけの価値はありそうだった。

そうだ、ゴスペルを背景に流そう。

盛大なオーケストラで、醜いもの、汚いものを駆逐してしまおう。

もし、メビウスと分かち合えたならば、彼の理想とする世界を共に創ってくれるのかもしれない。

彼は光の環から、光の鳥を生み出す。

エアは、鳥に、どのような行動を起こすかを命じる。

そして、もはや各地に居場所が知らされているアサイラムの辺りへと文書と一緒に飛ばしていく。

十

エアが、光の鳥を飛ばしてから、数十分後の事だった。

アサイラムの窓から見える壁に、大きな光で出来た虹色の文字が浮かんでいた。

ケルベロス、レウケー、リレイズ、そして数多くの者達が、その光の文字を見ていた。

元々は、孤島の場所にあつて、天候や地理などの関係を利用してひた隠しにしていたアサイラム収容所のある島国なのだが。

今や、アサイラムの場所は、ネット上に流出し、世界中にダダ漏れの状態だ。そう、アサイラムを管理するコンピューターのファイヤー・ウォールなどが弱体化して、今やアサイラムの機密管理は世界中のハッカーなどによって、ハッキングの対象を受けている。アサイラムに収容されている囚人達の情報も漏れているだろう。

巷では、収容されている囚人達を公開処刑しろ、との声まで上がっている。囚人の最大限の人権保障などが気に食わないらしい。当然の理由だろう。此処に収容されている者達は、ある意味ではVIP待遇の生活を送っている。特に貧困国などの怒りは絶大だった。

下手をすれば、ダートのメンバーだけではなく、個人的にアサイラムに私刑を下そうとする者達が現れてもおかしくない。何とかして、この施設のコンピューターを早急に、復帰させなければならぬのだ。

そんな緊張を孕んだ状態に、新たに送られてきた布告だ。

怒りを想起させないわけにはいかない。

ケルベロスなどの一部の人間を除く、囚人も含めた、アサイラムの関係者達は口々に、宣戦布告の文字に対して、怒声を上げていた。

レウケーなどは、その場でグラウンド・ゼロをぶっ放してしまいそうな顔をしていた。

匿名で送られてきた文書だったが、すぐに、メビウスは相手が誰であることを理解する。

それは、彼女が直々に、いつか始末しようと考えていた、混沌の担い手だった。

“ドーンの最重要人物である、メビウス・リングと戦いたい”と。

「いいだろう」

メビウスは出向く事にした。

彼女は知っていた、そいつをだ。

それは、彼女がいつか直々に始末しようと考えていた者だ。

十

エアは、厳しい戒律の下、育てられた。

主に、キリスト教がベースになっていたのだが、色々と教団の都合の良いように教義の内容は改竄されていた。

実態としては、他国に渡ってカルト指定を受ける程の教団だったのだが、信者の数はやたらと多く、エアの両親は、その教団の幹部を行っていた。

汝の隣人を愛せ。

その言葉を、強く胸に抱えていた。

天の国は、開かれている。

誰にでも、開かれている。

悪人をこそ、救う、という教義だった。エアは、何処かで、それに疑問を呈していた。教会は多くの布施の下、成り立っていた。

エアは思う。

キリストは、本当に、死んだ後に復活を遂げたのだろう。

天界は、罪を浄化していくのだろう。

記憶は、酷く断片的だったが、確かに覚えている。

エアの父親は、本業の実業家としては守銭奴と言って良い男だったし、母親は酷い浮気癖を働いていた。父親のせいで路頭に迷ったり、首を括ったりした者達は後を絶たなかったし、母親の方は好色で、父親に隠れて何名もの男を作っていた。

エアは、聖書を熱心に読みながら育った。

家族愛の事をずっと、知ろうとした。

汚い世界は、浄化すべきだと思った。何もかもを、滅すべきなのだと考えた。

多感な思春期を送っていた彼の心は、少しずつ、少しずつ、蝕まれていったのだった。

汚いものは、徹底して清めなければならないと思った。そうでなければ、この世界では生きられないと思った。

強迫神経的で、偏執的な感覚と感情、認識の歪みが彼の人格を構築していった。

力の名前は、『ホーリー・ドラゴン』。

最初に攻撃したのは、両親だった。

父親の方は、金をめくる右腕に、嘘を吐く声帯を。

母親の方は、胸と性器、そして顔のあらゆるパーツを消滅させていた。

二人共、今も生きているのだが、どちらも精神病院の中で、発狂したまま生かされ続けている。きっと、正気に戻る事は無いのだろう。

彼が作り出す、光の渦の中に入れられた者は、彼が嫌悪する概念に触れた部分が滅していく。

彼は、教団の者達にも、ひっそりと試しに使ってみた。

すると、多くの者達が、身体のあらゆるパーツを喰い尽くされていった。

尊敬する教祖でさえ、両眼と両腕、喉などが消されていった。

おそらくは、偽善者ばかりだったのだろう。

裏では、自分達の欲望に忠実だったに違いない。

完全なまでに、悪の象徴であり、闇そのものであるデス・ウィングとは、何故だか反りがあった。おそらくそれは、この世界の虚構性に対して、強い悪意を有しているという事で、分かり合えたからなのだろう。

彼は、この世界に大きな光を齎そうと考えている。

何もかもが、汚らわしく思えてしまうから。

デス・ウィングは言っていた、お前の独善的というか、強迫神経症的で利己的な感覚は、不潔に対する恐怖感でしかないのだと。エアは分かっている。分かっている自らの行為を正当化している。

純粹に自分が、幸せになる為には、この世界に対して妥協してはならないのだと彼は思うのだ

。

十

そこは、イゾルダの生体兵器が根差している場所だった。

元々は、谷によって覆われた国で、光が刺し込み難い場所だ。

どうやら、位置的に、苔などの植物が繁茂しやすい場所みたいだった。

スロープと、ホビドーが、この辺りの事後処理をしようと訪れたのだった。

スロープは、獅子の頭を持った巨躯の男だった。

ホビドーは、細長い筋肉質の神経質そうな顔の男だった。

二人は、苦虫を噛み潰した顔で、かつて国の体裁を為していた場所を眺めていた。

生体兵器は、まるで食虫植物のような姿をしていた。

そして、何処まで天高く聳え立つ、バベルの塔のように細長く、その全身を天へと伸ばして、巨大だった。

奇怪な姿の、花が咲いている。

口を開いた植物が、胞子を撒き続けていた。

この怪物が、この街を喰い潰している、大地の癌だ。

レウケーやマディスは、散々、手こずっていた。

しかし……。

「三十以上の都市が、化け物共の苗床にされているらしいが、俺の力なら、大丈夫だろ」

ホビドーの能力ならば、根元から根絶出来る。

そもそも、レウケーのグラウンド・ゼロは威力こそ高いが、このような細胞の一部でも残っていれば、再生していく相手には不利なのだ。

ホビドーの強さは、レウケーの折り紙付きだ。

だから、ホビドーは上司から信頼されている自分の力に誇りを持っている。

この怪物を、どうやって、倒せばいいかレウケーは逡巡しているのだと聞く。

スロープは、ハルバードと呼ばれる大斧のような槍を構えていた。これで、敵の触手や牙などを、薙ぎ倒すつもりでいた。

ホビドーの手助けだ。彼の力である、『アシッド・フィールド』によって、この辺り一帯を酸化させていくつもりだった。

彼の酸の能力は、蛋白質や食物繊維を有する有機物にとって絶大なダメージを与える事が可能だ。彼は自分の“胃袋”を作り出す事が出来るのだった。

何度か、怪物の鞭のような葉に遮られるが、次々と、スロープが、それらを切り落としていく

。

時間を掛ければ、駆逐し切れるかもしれない。

二人はそう確信していた。

少なくとも、上司のレウケー程、悲観的には考えていなかった。

中心部には、巨大な花が鎮座していた。

そいつが、おそらくはこの地の怪物を増殖させている元凶なのだろう。

「あら、あたしも混ぜてくれない？」

二人は、後ろを振り返る。

骨ばった身体の男が、ウインクをしながら、二人を見ていた。

「お前は何だ？」

「あら、あたしの名前は、ラジュリ。あんた達の助っ人になるように言われてきたの」

そう言いながら、その男は身体をくねらせる。

「オカマか……。まあ、いい。お前は何か出来るんだ？」

ホビドーは訊ねる。

心なしか、彼は何処か軽蔑したような視線で、ラジュリを見ていた。

ラジュリの全身から、薄桃色の霧が周囲を撒かれていく。

「あたしの『ハイエルフ』は、毒物を押さえたり。戦闘意欲を殺いだり出来るわよ。ちなみに、ケルベロスちゃんが、イゾルダちゃんと戦う際に、彼に毒の攻撃の耐性を与える防護円を張ったのは、あたし。あたし、一応、アサイラムにも雇われているの」

「そうか、そりゃ頼もしいな」

ホビドーは、頬をぽりぽりと搔く。

「ちなみに、あなた、あたし好みの男よ」

そう言って、ラジュリは、再びウインクをする。

ホビドーは、ふうっ、と溜め息を吐いた。

やはり、この手の馬鹿には余り深く関わらない方がいいのだろう。

巨大な花が、眠りに付こうとしているのが分かる。

確かに、ラジュリのハイエルフの効果は中々なものだった。

片っ端から、生物を眠らせている。

この辺りに、特殊なフェロモンのようなものを撒いているのだろう。

「はあーい、お二人共、眠っている間に好きにしちゃって、あたしがいつもそうしているようにっ！」

そう言いながら、ラジュリはくるくるとダンスを踊る。

もしかすると、結構、恐ろしい能力なのかもしれないが、ホビドーは深く考えないようにした。

ホビドーはふと、何気なしに、空を見ていた。

初め、それは星の瞬きなのかと思った。

まるで、空がヒビ割れて、亀裂が走っていったのかと思った。

刹那の時間だった。

空から、何者かが舞い降りてきた事を、ホビドーは理解する。

そいつは、一番、大きな頭の食虫植物の上へと乗っていた。

「何だ？ 此処は？」

そいつは、漆黒のドレスを纏っていた。

そして、肩の辺りを真っ白なケープで覆っていた。

美少女のように見えたが、何処か違和感があった。

頭には、針のような角飾りのようなものが生えたカチューシャを身に付けている。何処か、その両眼は、獰猛な印象を受けた。

ホビドーは、本能的に“眼の前の存在には絶対に勝てない”という事を理解する。

どうやり過ごせばいいのだろうか……。彼の思考は、瞬時にその事に切り替わる。

そいつは、よく響く声で、下界の二人を見下ろしながら喋っていた。

「ああ、お前ら、ちなみに俺様は男だ。まあ、ゴシック・ロリィタの女装は、何ていうか、趣味みたいなもんだ。気にするな」

彼は、大欠伸のようなものをする。

「俺の名は、ニーズヘッグ。ルブル、って奴に、この世界に呼ばれたんだよ。“不在の世界”からやってきた者だ。取り合えず、何だ？ 俺様はお前らを叩き潰せばいいのか？」

彼は何か、迷っているみたいに見えた。

「この世界に合わせる為に、力をコントロールしなければならないからなあ……………」

彼は、つまらなそうな顔で呟いていた。

彼の右腕は、長い鉤爪へと変わっていく。

「俺様は強いぞ」

そう言うと。

一瞬にして、遠くの山が、谷へと変わっていた。

スロープと、ホビドーは、呆気に取られていた。

実際、一体、今、何が起こったのかよく理解出来ていなかった。

そして。

更に、瞬時にして、彼は乗っていた巨大食虫直物と、おそらくは、この辺り一帯の怪物を媒介している、巨大な花を消滅させてしまう。

気付くと、スロープ、ホビドー、ラジュリ、そして目の前にいるニーズヘッグ以外の全てが、無へと帰っていて、辺り一面が砂丘のように変わっていた。

三人共、愕然としていた。

「ちなみに、この俺様だが。力の名前は『アビス・ゲート』と言う。俺様は、お前らの概念で言う処の精神生命体みたいなもんだ。つまり、“概念”に近い存在って奴だな。お前らの持っている“深淵”っていう概念に肉体と意志を持たせたような存在として、この世界に実体化しているようなもんだな、分かるか？」

その怪物は傲慢そうな態度で、辺りを見回していた。

綺麗なまでに、一帯が消滅してしまっている。

ニーズヘッグと、ラジュリは対峙する。

「あらあ、あなたも男の娘なのお？ あたしもそうなのよ。お友達になれそうね」

ニーズは、無感動にラジュリを見ていた。

そして、おもむろに舌なめずりをする。

「お前らは、殺す価値も無い。この世界は壊す価値も無い。俺様は全力の力で、お前らと戦う事は無いだろうな。そういう存在として、この世界に召喚されたんだろからな。まあ、何だ。せいぜい、俺様の強さは、この世界の強者程度だろうな。一応、俺は……」

そう言うと、彼は再び、右腕を掲げた。

彼の右手から、漆黒の光が放たれていく。

空の上にある星々の一つに向けて、それが撃ち込まれていく。

瞬間、空が燃え広がり、爆発を起こしたような気がした。

「何をやった……？」

ホビドーが、思わず訊ねていた。

「ああ？ 何億光年くらい先にある、惑星一つを粉微塵の消し炭にした。何なら、銀河一帯くらいなら滅す事が出来る。でも、俺様はお前ら相手には、やらない。……出来ない、と言ってもいいかもしれんな。何しろ、この世界に召喚された俺様は、あくまで概念であって、この世界自体を瞬時に滅ぼす事は不可能だからな」

ホビドーは彼の説明を聞いて、余りの荒唐無稽さに絶句していた。

しかし、確かに、彼が本当に“実行したのだろう”という事だけは分かった。

口から出任せを言っているわけじゃない。

それに、何にしても、絶対に自分達では勝ち目が無い。

「まあ、詳しい説明はどうでもいい。そのうち、理解するだろ。とにかく、俺はルブルの下へと行く。まあ、この世界では、沢山、死んでいくんだろが。せいぜい、少しでも長生き出来るように祈っておくんだな」

そう言うと、彼の肉体は地面から這い出してきた、影の中へと包まれていく。

そして、彼は漆黒のドラゴンへと変化を遂げていた。

ニーズヘッグは、翼を広げて飛び立つと、三名の下から去っていく。

見逃したのだろうか？

ホビドーは、理解が遠く及ばない相手と対峙してみて、どうすればいいか立ち竦むばかりだった。もしかすると、あのニーズヘッグという者からしてみると、自分達など、アリみたいなものなのかもしれない。だから、どうでも良かったのだろうか。

十

エアは、イゾルダの生体兵器が集まっている場所へと向かっていた。

何者かによって、多くの生体兵器が駆逐されていっているらしい。

彼は、その者達には、大して興味が無かった。

彼はおもむろに、この場所を選んで、相手に来るように指示をした。

それは、自分が好きなデザインの建築物が建てられていた場所だったからだ。

この街は、宗教が根差されており、聖堂などが多く建てられていた。

しかし、それらは見るも無残に破壊されているのだが、それでも、それはそれで廃墟の持つ退廃的な美しさを放っていた。

そこは、海の神に対する信仰心が強い場所だった。

漁業が盛んで、毎年、陸の動物などを海へと流して、信仰心を強めていた。

今や、隣接する海の水によって街全体が押し流されてしまい、瓦礫の山と化している。そして、所々の地区が、未だ水に飲まれている。

巨大なウツボ型の生体兵器によって、壊された島国だった。

この生体兵器は津波を引き起こして、街全体を襲撃したのだった。

海底へと沈んでいく大聖堂。

エアは不思議な景観を眺めていた。

「あれが、イゾルダの能力で生み出した化け物か……」

思わず、大きく息を吐き出してしまう。

海底には、島程もある、ウツボが影を見せていた。

ゆらゆらと水の底で、この辺り一帯に寄生している。

この辺り一帯が、大神殿となっていたのだろう。

様々な神の彫像が、そこいらに置かれている。

「で、此処でいいのか？」

言われて、エアは頷く。

その女は、彼が訪れた時には、既にこの地へと鎮座していた。

黒衣の女は、無感情な瞳で訊ねる。

捻じ曲がった、腰まである金色の髪が、風に靡いていた。

十

沢山の死体達が横たわっている。

所々で、悲鳴を上げ続けている者達もいる。

そこは、焼け野原だった。

ペイガンは、剣を構えながら、ぼんやりとした顔で、辺りを彷徨っていた。

彼はぼさぼさになった、自らの髪の毛を掻き毟る。

まるで、この世界では無い、別の何処かの世界を彷徨っている場所だった。此処は、彼が知らない場所だ。

頭の中身全てが、シェイクされてしまったみたいだった。

記憶は断片的だが、確かにそれは網膜に焼き付いている。

それは、災厄としか言えなかった。

まるで、巨大隕石でも飛来してきたかのように、この街は壊れてしまった。

ペイガンは薄っすらと覚えている。

それは、炎を纏った天使だった。

どうしようもないくらいに美しく、おぞましく街を壊してきた。

彼は現実に帰る事が出来ない。

喪失感は、とても強い。

彼は、未だ身体が震えて仕方が無かった。

未だ、燃え殻が辺りに渦巻いている。

とぼとぼと、亡霊のような歩みで。

瓦礫の中を歩いていると、どうやら生きた人間らしき者を見つける。

一人の男が、呻き声を上げていた。

どうやら、彼は下半身が、瓦礫の中へと挟まってしまったらしい。

彼は、ペイガンを見つけると、叫び声を上げて呼び止めてきた。

ペイガンは、咄嗟に、現実に戻って、男の両腕を引っ張っていく。

男は、瓦礫の中から引きずり出されていく。

ペイガンは両目を剥いた。

男の腰から下は、馬の両脚をしていた。

「何だ、お前……………」

ペイガンは、思わず、尻餅を付く。

……、えっと、確か。あれ、あれ、何だっけ？ そうだ。ケン、ケンタ……、ケンタウロス、って奴なのか？ 何だそりゃ？ そんなのいるのかよ？ 俺、絵とかでしか見た事無いぞ。ギユスターヴ・モローの絵の奴……………。

そう言えば、彼が集めていた画集も、焼けてしまった。

まあ、それは今となっては、どうでも良い事だ。

自分は、まだ夢の中にいるんじゃないのだろうか。もしかすると、自分は死の間際にいるのかもしれない。

「俺は、夢を見ているのか……………」

彼は思わず、呟いていた。

どう言葉にしていいいのか、分からない。

「助けてくれて、ありがとう。俺はカシュー……。それにしても酷いな。街が焼け野原だ」

ペイガンは、まじまじと男の下半身を見ながら、困惑する。

これは、どう反応すればいいのだろうか？

まるで、何なのか分からない。

ペイガンは、口を半開きにしながら、ぼうっと、俯いていた。

「ああ、そうだ……」

その男は、死体の服を剥ぎながら、自身の腕の傷口を縛っていた。

「なあ、俺の背中に乗っていくか？ 人、一人くらいなら、乗せれる」

「うあっ……………っ！」

ペイガンは、裏返った声を上げて、頭を抱えていた。

十

カシューは、森の中を走っていた。

ペイガンは、彼の首に掴まりながら、頭の中を整理していた。

そもそも、炎の天使が訪れたの自体が、非現実だし。街が壊され、友人知人、家族がみんな死んだり、何処かへと消えてしまったりした事自体が、おかしい出来事なのだ。

とにかく、頭の中が痛くて仕方が無かった。

彼は、剣術というものを習っていた。

いつも通りに、稽古場に行って、その帰りに、そいつは天から現れた。

そうだ、師範の焼死体も見つかったんだった。

……この辺りは、共通言語が未開拓なのよね？ だから、宣戦布告の為の言葉だけ覚えてきた。私の名前はグリーン・ドレス。この街を焼き払い、破壊する者だ。

そう言って、炎を纏った天使は、右腕を掲げて、右手から無数の炎の塊を放ち続けたのだった。

ペイガンは確かに、その光景を覚えている。

少しずつ、おかしくなってきたのだろうか。

ただ、もう平穏な生活には戻れないのだろうか、という事だけは理解していた。

大切な日常というものは、壊れてしまったのだ。

そう、無慈悲なまでに、何もかもが無くなってしまったのだ。これから、どうしようと思ひ、悩むのだ。ただ、ぼんやりと思うのは、自分は生きなければなあ、と思った。どんな事があっても、生きなければならぬなあ、と。

それくらいに、余りにも多くの者達を失ってしまったのだから。

赤い天使に対する、憎しみが不思議と湧いてこないのは、きっとまだ、自分が夢現の中にいるような気分だからだろう。

実際、今、ケンタウロスの背に跨っている。

彼は、どうやら、生き残った者達がいる避難所へと連れて行ってくれるらしい。

十

ニーズヘッグ。

彼は、深淵の力を操る魔竜だ。

“この世界には、存在していない世界”に住む、神話のドラゴンなのだ。

次元の狭間を通過して。

彼は、ルブルの下へとやってきた。

ルブルの波長を感じ取って、彼はこの世界まで、降下する事が出来たのだった。

《俺様は、この世界を平らにしたり、ましてや消滅させる事なんて出来ないぞ。何しろ、この世界に召喚された俺様は、あくまで、近くにいる対象の恐怖や不安などによって、肉体や、力を実

体化させる事が可能なのだからな》

彼は自分自身の存在を確認するかのように述べていく。

《俺は、星も、そして宇宙全体も破壊出来るが。あくまで、別の平行世界でのみだ。この世界においては、せいぜい、街を瞬時に滅するくらいの事しか出来ない。しかも、ターゲットに依存している。どうにも、不安定な存在だろう？ 俺なんぞ、お前の作っているダートとかいう組織に必要なのか？》

彼は自分自身の存在に、酷く疑問を抱いているみたいだった。

彼は力こそ持っているが、目的というものが無いのだろう。その力をどのように使えばいいのか分からないのだろう。

概念とは、つまり何処までこの世界に根差されているのか。

ルブルには分からない。

人間が持っている、底知れない根源のようなもの。

その一つが、恐怖であり、破壊の衝動そのものだったりする。

『神の世界』、あるいは『不在の世界』という場所においては、そのような“概念”によって構築された者達が渦巻いて、住んでいる。そいつらは、この世界に肉体を持たない。おそらくは、たとえば、メビウス・リングなどもそのような存在で、この世界に人形という媒体を通して、受肉しているのだろう。

ニーズヘッグが、受肉する為の媒体は“人間の余りにも強大過ぎて勝ち目の無い存在がいる”という根源的な恐怖や畏怖の感情だ。

そうやって、人間を使い“認識させる事”によって、彼はこの世界に降下し、実体化する事が可能だった。

ニーズヘッグとは知り合いだった。

かつて、ルブルが“世界樹を巡る旅”において出会った、最強の魔竜こそが彼だった。彼の強さのみにおいては、信頼を置いている。

間違いなく、その強大さのみならば、緑の悪魔やヴェルゼなどよりも、比べ物にならないくらいに強い。しかし……………。

あくまで、この世界においての彼の存在は、不安定そのものでしかないのだろう。

十

「ミソギちゃん」

ラジュリは、通信機を取り出して、自分の主人と通話する。

ホビド一達とは離れ、山岳地帯を歩きながら喋り続けていた。

「そう、そうなのよ。新たなる、ダートのメンバーですって。ラジュリ、見ていて、とっても恐ろしかったわよ」

彼は、くねくねと全身を動かさせながら、自分の主人に逐一報告をする。

「あなた、ダートとドーン、どちらがお金になるのか採算を考えているのでしょうか？」

通信機の向こう側で、ミソギは、ほくそ笑むように笑った。

「ふふっ、そうよねえ。そうそう、ドーンはお金を出してくれる見込みも無いし、金儲けに使えるようにないのよね。ええ、そう。ダートの引き起こした破壊によって、恐怖から武装したがる国家が増えている。だから、力を貸すんでしょう？ とても儲かりそうね。世界中が混乱していくわね。嬉しそうじゃない、うふふふふっ」

そう言いながら、ラジュリはくねくねと全身を動かしていた。

この辺りには、まだ生体兵器の小さな種子が根付いている。

彼は自身の能力であるハイエルフを撒き散らしながら、彼を襲おうとする小さな植物型の怪物達を眠らせた後、手に持った小さなレーザー銃のようなもので焼き払っていた。

十

「俺様には何が出来るか、って？」

ルブルの問いに対して、ニーズは、くっくっ、と笑う。

「俺様は世界を破壊する者だ。ただ、そういう“存在”で“概念”なんだ。俺はそれだけだ。この世界に実体化しているが、みなが俺に対して、どのように畏怖して、どのように崇め、どのように恐怖するのか、には興味があるな」

彼の口調は、何処までも傲慢だった。

しかし、同時に、自分の存在の不確定さによって、自分自身に違和感を持っているかのようにも思えた。

「俺は神話の存在なんだ。ほら、神話ってのは、世界の破壊と終末を行える神がいるだろ？俺はそんなもんなんだろ。だから、星だって壊せるんだから。宇宙そのものだとか。取り合えず、この世界全体だとかを終わらせられるんじゃないか？だからまあ、俺は何ていうか、そういう存在なんだろ」

余りにも、圧倒的な実力を、彼はさも当たり前のもので、話していく。

「ふふっ、幼稚な子供の空想みたいな力ね」

ルブルは微笑する。

「神話ってのは、幼稚な連中の空想で生まれるだろ？それにほら、みんな、この世界の構造自体を知りたがる。だから、神話、ってか、物語作って理解しようとするんだ。そういった存在が、俺の住んでいる世界にはいる。平行世界って奴だ。お前も、以前、来た事があるだろ？あの時には、ろくに話さなかったようにも思うけどな」

「貴方が私を覚えていなくても、私は貴方をちゃんと覚えていたから」

「まあいい、とにかく協力してやるぜ」

ニーズヘッグは、全身から、一つの揺らめく闇を発して、それを辺り一面へと広げていく。

すると、大宇宙の惑星が空間から出現する。

「お前が、俺の力の媒介として、俺の力を“実体化”させるんだ。俺を“引き出す”んだ。俺はまあ、神話最強の怪物なんだろ。そういう事になっているらしいからな」

瞬く間に。

辺り一面に、宇宙が花畑のように咲いていた。

圧倒的なまでに、広大な深淵の伽藍だ。

暗黒のドラゴンは、ひたすらに笑い続けていた。

果てしない黒の中から、幾つもの巨大な牙の生えた口が現れる。

深淵の只中で、ルブルは浮遊している。

ニーズヘッグは、大隕石を自在に操作し、ブラック・ホールを次々と生み出していき、更には宇宙全体を突き崩していく。

「俺は最強だ。おそらくな？ お前の悪意が、お前らの世界で、俺の力を召喚するんだ。言わば、そう、それこそが俺の『アビス・ゲート』の力なんだ」

彼は何処までも、不敵な顔をしていた。

ルブルは、悪戯っぽく、思い付いた事を口にする。

「じゃあ、あれやって。死に際のヴェルゼから伝聞を貰ったの。グリーン・ドレスとアイーシャの二人が潜伏していた都市は、しばらくの間、氷の世界へと変えられた。彼女はその技の名を、『ドラゴン・タイラント』と呼んだ。自身を竜に見立ててね。貴方は本物のドラゴンなのでしょう？ じゃあ、同じような事をやってみて？ 貴方の力そのままの形でいいから」

そう言うと、彼女は思わず腹を抱えて、笑い出す。

「はああ？」

「タイラントは暴君って意味でしょう？ グリーン・ドレスは、最大の奥義って奴を、自身の持っている最強の技の名前に、自身の尊敬する男の異名を入れた。ねえ、ニーズヘッグ。貴方、踏み躪ってよ？ もし、緑の悪魔が生きていれば、ニーズ、貴方の足元にも及ばないんだって事を示したい」

ルブルは強気の様子を見せる。

「アイーシャは絶望すると思うわ。そして、ケルベロスも……メビウスも……」

もし、ニーズヘッグを完全にコントロールする事が出来れば。

そして、ニーズヘッグ自身が自らの力を適度に、この世界において使いこなす事が可能ならば、彼一人で全ての敵を制圧出来るだろう。しかし、ルブルはその事もまた、望んでいなかった。

狂気の先を見たいからだろう。

人間が与えられる不条理な暴力に対して、どんな答えを見出すのか、などを……。

十

この都市の名前は無い。

何故ならば、この都市は、おそらくは数百年、あるいは数千年は続いたかもしれない歴史を、今、終わらせられるだけなのだから。

人口、数千万はいただろうか。

それは、一つの大陸だった。

様々な国が幾つも犇いていて、領土問題などに関して冷戦状態が続いていた。

裕福な層が貧困層を搾取する。そんな当たり前の構造を保っていた。

「グリーン・ドレスとかいう奴の真似事をしろ、か………………。それくらいでいいのかよ」

ニーズヘッグは、鼻で笑う。

ルブルの情報によれば、グリーン・ドレスとかいう女は、熱を操り、辺り一面の熱を奪い、零度の世界へと変えていく『ドラゴン・タイラント』という技を使用するらしい。

ルブルの緑の悪魔とかいう奴に対する当て付けなのだが、名前の響きは何となく気に入ってしまった。

だから、彼は少しずつ、その気になっていく。

ニーズヘッグの全身は闇色に塗られて、そのフォームが変化を遂げていく。

人型の姿だったものが、翼が生え尾が生え、首が伸び、両手と両脚から鍵爪が生まれ、所謂、黒き竜の姿へと変貌していく。

「やるか」

彼の声は、咆哮へと変わっていた。

「『アビス・ゲート・ドラゴン・タイラント』」

闇の扉から発せられる、暗黒の暴君竜。

彼の力が、降り注ぐ。

それは、時間にすれば、およそ一瞬の出来事だった。

街全体から、光が奪われて、ニーズヘッグの創り出した闇の深淵へと飲み込まれていった。炎も、陽光も、もはやこの街に生まれる事は無かった。

人々の命全てが、闇へと飲み込まれていく。

そして、凝縮された闇に飲み込まれた場所は、黄色い砂漠へと変わり果てていた。虫の一匹も、草の一本も生えない砂漠にだ。

彼はせせら笑う。

「何だぁ？ この世界の人類って奴は、この程度のもんなのかぁ？ つまんねえなあ。俺様が遊んでも仕方が無えんじゃねえか」

ニーズは、がっくりと肩を落とす。

「まあいい。この星、この次元、この世界。暇潰しに、アビス・ゲートを撒き散らしていくとするかな。どうせ、誰も俺に勝てねえんだから」

そう言いながら、彼は全身から、禍々しい漆黒の光を放ち続けていた。

十

レウケーは自室で、トレーニングを終えて、床に伏せっていたが、しばらくして頭からペットボトルの水をぶち撒けて、起き上がる。

自己嫌悪ばかりが膨れ上がってくる。

彼の部下である、スロープとホビドーは、引き続き、あのニーズヘッグとかいう男の調査を続

ける事にすると書いていた。二人共、自分よりも、よっぽど前を向いている。

イゾルダの生体兵器の脅威は、少しずつ去ろうとしていた。

グリーン・ドレスに破壊された都市も、一部は復興を続けていると聞かされている。

少しずつ、世界は元通りになる筈だった。

絶対に、立て直していくべきだった。

だが……………。

ケルベロスは、車椅子に乗りながら、アサイラムの施設内を移動していた。

イゾルダとセルジュから受けたダメージが、まともに回復していない。

治癒系の能力を使う能力者達を探しているのだが、そういった者達の多くは、ケルベロスの治療よりも、より多くの被害者達の怪我を治癒する方針のように、ケルベロス本人が支持を出しているのだ。

そして、何よりも、セルジュから受けたダメージよりも、イゾルダから受けたダメージの方が酷く。まるで膿のようになっており、彼の肉体を蝕み続けていた。

絶対に、何かしらの毒物を混合させた攻撃だろう。特に、呪いのように、アサイラム施設内にあった治癒系の能力者の能力で治らなかったからだ。

セルジュから受けた左腕のダメージは、自然治癒によって少しずつ回復していた。骨がべきべきにへし折れていたが、ケルベロスは彼の意志に敬意を称して、能力者の能力によって、治すのを拒んだのだった。

レウケーは、相変わらずな、そんな彼の性格に呆れてしまう。宿病のごとく、治らないものなのだ。本当にお人好しなのだ。

「やはり、何とか探してきましょうか？」

リレイズは、ケルベロスを強く気遣っていた。

「いや、俺はやはり、このままアサイラムで待機している。メビウス様や、インソムニア、それから他の奴らを信頼したいから」

レウケーは思わず、うんざりした溜め息を吐き出す。

「綺麗事ってか、世迷い事言うのはいいんだが……」

レウケーは、憔悴し切った顔でケルベロスの前に佇む。

「もう、既にダートは新たな戦力を付けてきている……………」

レウケーは忌々しそうに言った。

「何よりもまず、俺の部下達が遭遇したニーズヘッグって奴だ。どうやら、そいつは、イゾルダとグリーン・ドレスに代わって、色々な都市を破壊しているらしい。しかも、少なくとも、あの二人よりも悪質なんだ。ニーズヘッグが通った場所は、“生き残った人間”がないんだ。少なくとも、イゾルダとグリーン・ドレスの時は、多くの者達が生き残って、奴らの災厄から逃げてきた。今、俺の部下達は彼らの為に、避難所とシェルターを作ろうとしている。それから、とにかく各地で恐怖に震える者達の声が上がっている。とにかく、みな、逃げ場所を探している。俺はある程度の人々をアサイラムに避難させようとも考えているが、どうかな？ もっとも、此処も安全とは言えないけどな？」

ケルベロスは眼を閉じる。

どれ程、今、世界中に混乱の波紋が広がっているのくらいは、彼は理解しているからだ。けれども、どうしても性格の甘さが抜け出ない。

「分かった。この辺りに、シェルターを作ろう。人々が住めるような孤島は幾つもある。今こそ、アサイラムに収容されている囚人達の力を借りよう。彼らの協力で、故郷や家族を失った者達の逃げ場を作ろう」

レウケーは再三、溜め息を吐く。

「頑張れよ、偽善者。俺は何てか、応援している。少なくとも、俺はイゾルダもグリーン・ドレスも倒せなかったからな。もしかすると、お前なら、能力者達の可能性の未来を作れるかもしれないからな」

そして、レウケーはリレイズにも聞こえるように強く言った。

「ああ、それから。更に、事態が深刻化している。先ほど、また宣戦布告のようなものがあつた。ニーズヘッグ以外でも、新たに二人程、メンバーが加わったらしい。一人は“武器商人”と名乗っている、もう一人の方は“ホーリー・ドラゴン”だそうだ。脅威は、どう考えても、以前と同じくらいか、下手をするとそれ以上だと考えた方がいい」

ルブルは次々と、メンバーを増やしていつている。

どう手を付ければいいのか、もはや分からない。

事態は収束していくのだろうか。

十

イゾルダが残した生体兵器に食い潰された都市。

そこは、海底へと沈みゆく大神殿が設置されている場所だった。

空が果てしない程に、蒼穹だ。

突き出した二つの瓦礫の足場に、それぞれ、金色の髪をした漆黒のドレスの女と、白金の髪をした白い法衣の男が佇んでいた。

メビウスと、エア。

二人は、お互いを吟味していた。

光が照らし出され、そよ風が吹いている。

「お前はランキングには入っていないが。私がいつか抹殺する為の対象には入っていた。お前は这个世界にとっての混沌そのものだ。お前には生きていて貰っては困るんだ」

「成る程、そうか。俺がお前に興味を持つ遙か前から、お前は俺に興味を抱いていたってわけか。それはとても嬉しい事だな」

彼は少しだけ、苦笑する。

エアは、自身の力である『ホーリー・ドラゴン』の光の柱を、辺り一帯へと撒き散らしていく。

。

メビウスは、異にも介さない。

光の柱や、光の輪に包まれてもなお、彼女は無傷で佇んでいた。

全長が数キロ程はあろう、巨大なウツボの怪物が、海原から這い上がり、エアを飲み込もうと口を広げる。

エアの光の輪が、その大海蛇のごとき姿をした怪物の全身を滅していく。

イズルダの生んだ、生体兵器達の肉体が光の中へと消されていく。それらは、エアの能力によって、悪しきものと認識されて、滅されていったのだろう。

「成る程、俺の力がまるで通じない」

「そうだ。お前は私に大人しく始末されろ」

まるで、この世界の理を受け入れろ、とでも言うように、メビウスは超然とエアに対して、その存在を否定する。

「しかし、お前を倒す方法は幾らでも思い付く」

エアは人差し指を掲げる。

大神殿の柱の一つが、光の帯の中に包まれていく。そして、まるで巨大な光の巨人でもいるかのように、柱がへし折られ、持ち上げられて、メビウスの下へと投げ飛ばされていく。

メビウスは微動だにしなかった。

柱は空中で静止する。

そのしばらく後、柱は螺旋状に振れていき、そのままエアのいる方角へと突き飛ばされていく。エアは、後ろへと高く上昇して飛び上がる。

自分の攻撃が、まるで通じない事に対して、彼はこれと云って意に介していなかった。むしろ、彼の心臓の鼓動は高鳴っていた。

「会いたかった。メビウス・リング、ドーンの中核にして、動く球体関節人形」

エアはただただ、高笑いを浮かべていた。

きっと、今、人生において幸福なひとときなのだろう。

エアは記憶を掘り起こす。

何故、自分は汚らしいものを嫌うのだろうか。

彼は、強い信仰心を持って生きてきた。貞節であれ、プラトニックであれ。そのような感情の下、生きてきたのだ。

だから、性的なものだとかは、きっと清らかなもののみが存在するべきだし。この世界に、不条理な暴力など存在してはならないのだろうと考えていた。

悪は裁かれる。

醜悪なものは、いつか滅せられる。

だから、自分は信仰を大切にしよう。そう考えて、生き続けてきた。

全てが無情に見て、全てが救われないように感じる。

あるいは、自分が何よりも救われないのだろう。

「在りのままに、この世界を愛せたならば、きっとずっと幸せだった」

エアは酷薄な笑みを浮かべる。

彼の背後から、光の輪が花火のように打ち上げられては、消えていく。彼は、何処か、何かに

陶醉しているかのようだった。

エアの背後から、大きな海蛇が口を広げて彼を飲み込もうとしていた。

彼は、いつしか涙を流していた。光が渦となり、それは一つの音楽の螺旋を描いているかのようだった。実際、音のようなものが辺り一面へと響き渡っていた。

エアは口笛で、メロディーを口ずさんでいた。

海蛇は、光の渦へと飲み込まれ、消し飛ばされていく。邪悪なるものと認定されたからなのだろう。

「俺にとって、醜いものは、この世界にはいらぬ。存在してはいけない。分かるか？」

メビウスは、無言だった。

無言のまま、自身のウロボロスで、彼を始末しようとしていた。

回転の攻撃が、彼を襲う。

しかし、光の奔流によって、回転の軌道が読まれていた。

エアは、メビウスの攻撃を見切れると考えていた。

彼は永遠に自由で在りたい。この世の生に束縛されたくない。しかし、決してアンデッドのような、汚れた生なんかじゃない。彼は神々の住む世界に向かいたかった。

この世界全体が汚れているから。

全てを浄化してもなお、新たに汚れが生まれてきそうで怖い。

だから、彼はこの世界全体を否定している。

「メビウス・リング、お前は素晴らしいな。こうして、逢いまみれる事を夢に見ていた。お前は気高く、何者にも汚されないんだろうな。それはそうなんだろう、人では無いのだからな。俺はお前のような存在が羨ましい」

厳かな聖堂の中で、澄み渡った歌を聴いているかのようだった。

空は、やはり、何処まで青空だ。

それはそうだ。

メビウスがウロボロスで。

エアがホーリー・ドラゴンで。

此処に来る時に浮かんでいた曇り空を、全て吹き飛ばして消し去ってしまったのだから。

だから、今、世界はとてつもなく澄み渡っている。

「まあ、私からしてみれば、お前は“可能性の否定”だ。お前の力は、やがて全世界全てを飲み込もうとするのかもしれない。お前は自分では、自分が悪だと考えた事は？」

エアは、腹を抱えて笑った。

彼は、自らの白金の髪を撫でる。

「はっ、何を言い出す事やら」

彼はふと、少しだけ、冷徹な顔になる。

「俺は悪だ。とてつもなく、どうしようもない程の邪悪だ。そうなんだろう？ この世界にとっては、だが、俺は生きたい。俺にとって醜いと感じる、この世界を破壊したい。人間はどうしようもない程に、醜い、人間の感性も醜い。あるいは、生命というもの、それ自体が醜いかもしれ

んな？」

彼は法衣から伸びる両手から、幾つも、幾つも、光の刃や、光の槍を生み出していく。

そして、彼の背後から、巨大な光の翼が生えていた。

「なあ、おい。メビウス。多分、俺はお前に瑕一つ与えられないだろうが。俺は今、お前に倒されてやるつもりは無い。だが、お前と会えて良かった。今、人生で一番、最高の日なのかもしれないのだからな」

ふいに。

エアは飛び跳ねて、メビウスの下へと接近する。

その足場は、絶壁状になっていて、丁度、メビウスが高みからエアを見下ろせる位置にいた。

そして、エアは自分でも思いも寄らない事を口にしていた。

しかし、それは本音から出たものだった。

「貴方の下へ付きたかった」

メビウスは、嘲弄するかのような眼で彼を見る。

「私はお前を始末する対象としか捉えていない」

メビウスはそう、断言する。

「ふふ、ははっ、お前は俺を殺す事でしか解決出来ない。俺の心の悲鳴を聞き取ろうとはしない。なあ、分かるか？ 俺は見ていた。母親が、父親以外の男と性行為をする事を。それからなあ、臭い路地裏で何人もの男達に犯される少女をな。全員、粛清してやった。俺の光の柱の中へと放り込んでやった。俺は間違っているか？」

「さあな。だが、お前の精神は、きつとこの世界と相容れないのだろう。私は私自身でさえも、どのような方針で指定しているのかさえ。それこそ、私は神の力を有しているだけで、神そのものでは無いのかもしれないからな」

そう言いながら、メビウスのウロボロスの渦巻きが、エアの周辺を捻じ曲げ続けていた。

エアは自嘲する。

「お前は独裁者か？ それこそ、暴君か？ なあ、俺はこの世界を赦せない。みな、死ねばいいとさえ思う。全ては汚れている。ははっ、俺の力は、お前を汚濁と指定出来ない。けれども、お前は俺を一方向的に始末出来る。だが.....」

エアは翼を広げて、回転の渦へと自ら入り込む。

彼の身体は、捻じ曲げられていく。

彼は、自身の光の渦を使って、無理やり、捻られていく回転の隙間を探して、ようやく、ウロボロスの渦巻きから逃れる。

エアは冷や汗を流しながら、ウロボロスの攻撃が行き届いていない場所へと飛んでいく。

まだ、無傷だった。

彼は、自身の力に余裕が在る事を理解する。

“力自体は、五分だ”。その意味する事は.....

「俺はもう、行く。まだ、ルブルに会っていない処だしな」

メビウスは、彼の真意を測りかねていた。

「ふむ？ お前は何がしたいのだ？ 私と戦いたかったわけではないのか？ 勝てそうにないから逃げたいのか？ それとも……」

「いや、お前の手で、殺されたい、とも考えた事はある。けれども、俺は生きたくなくなった」

エアは笑っていた。

何かを掴んだかのようにだった。

あるいは、何かを一つ、悟ったのか。

「お前は素晴らしい。お前や、そうだな、デス・ウィングみたいな存在がいるからこそ、俺はこの世界でまだ自殺せずに生きていける。会えてよかった。お前には、まるで理解出来ないだろうが。俺は“清らかなもの”を探している。美しい女性を探している。決して、汚れる事の無い、永遠無垢なるものを。それはきっと、象徴のようなものなんだろうな。俺が、この世界に生きるに値する象徴なんだ」

彼は狂的に言葉を紡いでいく。

「理解する必要なんて無い、俺の狂った思想によって出した結論なんてな」

光の輪が、竜巻のように渦巻いていく。

「逃がすつもりは無いが？」

メビウスは、全身を浮遊させると、彼を追おうとする。

ウロボロスの回転の攻撃を、全力で放っていた。

辺り一面が、捻じ曲がっていく。

「なあ、神様？ お前は、何で、こんなにも汚らしい世界を肯定出来るんだ？ ドーンはお前が生んだ。そして、お前はハンティングされている能力者達も気に入っているんだろう？ 理解出来ないなあ。だが、俺はお前をきっと、尊敬しているんだろうぜ」

彼は、笑いながら、光の翼を広げて逃げ続ける。

そして、次第に、光に等しい速度へと変わり、彼はどうやっても、メビウスが追い付けない速度で逃げ続けていた。

十

エアは、処女崇拜を持っている。

汚れ無き女性を探している。

そして、自分の性欲を強く憎んでいる。それから、自分の肉体もだ。

そんなどうしようもない狂気の中で、彼は生きて、歪んだ見識で世界を眺めているのだ。

デス・ウィングは、彼のそんな狂気が美しいと感じて、仕方が無い。

そのどうしようもない歪さこそが、彼の魅力なのだろうと、彼女は考えているからだ。あるいは、何処かで、彼と似たような部分を共有しているからかもしれない。

性欲、暴力衝動。人間が持つ、どうしようもないもの。

エアが憎悪しているものは、それらの存在だ。

エアはきっと、メビウスを崇敬しているに違いない。

少なくとも、彼は自分ではそう思っている。

決して、凌辱されない存在、それが彼女なのだと思います。

「……人間の性衝動や暴力衝動に対して、強い嫌悪感を抱く男。彼の理想の世界は、どんな姿をしているんだろうなあ？」

デス・ウィングは、クリスタルを覗き込んでいた。

透明で煌びやかな、それには何も映っていない。

彼女は、狂気の只中にいる者達を、どうしようもなく愛しく思う。それは、自分自身が間違いなく狂っているからに他ならなくて、あるいは、正常な人間というものは本質的に存在しなくて、全ては欺瞞の上に成り立っていると思っているからなのかもしれない。

十

メビウスと、エア。

二人は、絶句していた。

それは、まるで唐突に空から舞い降りてきた。

「何だ？ おい、おいおいおい、俺様も混ぜろよ。お前らはとても強いんだろう？ ほんの少しは楽しませてくれるのか？」

その両手からは、細長い十本の爪が伸びていた。

背中からは、暗黒色の翼が、何対も生えている。

しゅぱんっ、と、辺り一帯が、暗闇へと包まれていく。

「何だ？ お前は？」

メビウスはどう解釈すればいいか、分からなかった。

エアは、かなり困惑していた。

「ああ？ 俺様はニーズヘッグ。ルブルから呼ばれた、一応、ダートのメンバーって事になっている。お前らは何だ？ ドーンか？ ダートか？ なあ、もしかして、俺様一人で、全部、ルブルの目的って奴をこなせばいいのかよ？」

エアは、ふうっ、と溜め息を吐いた。

そして、彼にとって大切な時間を邪魔されて、少しだけ苛立っているみたいだった。

この邂逅と、別離は、誰にも邪魔されたく無かったのだから。

「メビウス。また、会いましょう。俺は“貴方”と会えてよかった。やはり、お前……貴方は美しかった。きっと、貴方の美しさに、俺はまた魅了される」

エアは、光の柱の中へと入り込んでいく。

「ニーズヘッグとか言ったか……………」

彼は、少し詰まらなそうな顔をする。

メビウスも無表情だが、おそらくは、彼と似たような考えを持っているのだろう。

「お前を倒す事は出来ないが、お前から逃れる事は出来そうだ」

メビウスは、そう告げる。

ニーズヘッグは、少しだけ腹立たしそうに二人を見ていた。

「そうかよ？ 俺様のアビス・ゲートは、一帯を深淵へと飲み込んでいくぜ。それに、俺様は何処までも強大な力を有している」

「直観で間違っていたら申し訳ないが。俺はお前の力は、何かしらの“ルール”があるように思うがな」

エアは、既に、殆ど光の柱の中へと入り込んでいた。

そして。

ニーズヘッグの横を、圧倒的なスピードで、彼は光となって飛び抜けていった。

「おい、ちょっと待て」

彼は苛立つ。

振り向くと。

メビウスの姿も無い。

気付けば、まるで、霧のように何処かへと消えてしまっている。

「おい、おい、おいふざけるな。俺は最強なんだ。お前ら虫ケラ共は大人しく、俺の力で塵へと変えればいいってのに。ああっ、何処に行きやがった？」

彼は、アビス・ゲートの口を、一帯に、広げていく。

巨大な口が、幾つもの、辺り一面を飲み干していく。

山も、海も、彼の深淵の中へと引きずり込まれていく。

しかし、逃げてしまった二人は、やはり遥か遠くへと行ってしまったみたいだった。

ニーズヘッグは、半狂乱に為りながら、周辺へと自身の攻撃の波動をひたすらに、撒き散らしていった。

十

「何だ？ あれは？」

エアが黒い魔女にやってきた時、店の主はとっくに、そいつの存在を知っていた。

デス・ウィングは、絶対に、エアを店の中に入れないように警戒しながら、『黒い森の魔女』の付近で、草原の辺りに腰を下ろして、全身から光の輪を放ち続ける法衣の男を睨み付けていた。

「それよりも、お前、ホーリー・ドラゴンを消せ。私の能力で寸刻みにするぞ？」

エアは、ふうっ、と、首をこきりこきりと鳴らしながら、自身の能力を消していく。

「此処は不浄だ。汚らわしい、出来れば、俺が一掃したいんだがな」

そう言いながら、エアは暗黒の地、全体に対して嫌そうな顔をしていた。

「そういうわけにもいかないだろう。此処は人々の悪夢が形になった場所だ。永遠に消える事は無いよ。人間が亡びない限りはね」

デス・ウィングは、とても愉快そうな顔をする。

「しかし、あれは何だ？」

「あれは、“神の世界”の化け物だ。ニーズヘッグと言うらしいな。何でも、国や都市を一瞬にして消滅させ、その気になれば。星や、いや、この大宇宙さえもかき消す事が出来るらしい。もっとも、色々と面倒な制限があるらしいがな」

ふんっ、と。エアは鼻を鳴らす。

「制限か。しかし、どうやら、御大層な強さを有しているみたいだが。俺とメビウスを捕らえる事さえも出来なかったみたいだがな」

「そうだな、……………」

デス・ウィングは、少し説明に困っているみたいだった。

「上手く言えないが、“認識”に依存しているんだ、奴は。他者が必要となる。奴の力を引き出す為のな。この惑星全体を滅する力が在ったとしても、それを見届ける相手がいなければ、使いこなせないんじゃないのかな。国を幾つか、消したらしいが。多分、認識の媒体はルブルなんじゃないかな」

「はん、面倒臭そうな力だな」

「もっとも、適度な破壊くらいなら、彼を認識する他者がいなくても、可能みたいだがな」

デス・ウィングは、本当に楽しそうだった。

「それにしても、この俺は、まだルブルとかいう奴に会っていない。俺はお前を通して、もうダートとかいう組織に入っているみたいだが。気に入らないな。連中は、俺からすれば、駆逐すべき対象以外の何物でも無いように思うがな」

「おや、気が変わったのか？ 参戦したいと元々、言ったのはお前だぞ？」

「メビウスに会えた。それで、俺の目的は果たせた。そうだな」

エアは色々と考えているみたいだった。

「俺は暴りたい。俺のホーリー・ドラゴンを解き放ちたい。ドーンが何であれ、ダートが何であれ。俺は俺の意志で、この世界を破壊する」

彼は自らの髪をかき上げる。

その両眼は、少しだけ血走っていた。

まるで、何かに取り憑かれているかのようにだった。

「占いででしょうか？ 今後の未来を占う為の」

そう言いながら、デス・ウィングは何処からか、タロット・カードのデッキを引っ張り出してくる。そして、ルーン・ストーンの入った小さな袋も見せた。

「やめろ。お前の占いは因果律を捻じ曲げそうだ……。お前の占いは不幸を呼ぶ。それは、実証済みなんだろう？」

「ははっ。そんな大層なもんじゃない」

エアは白金の髪を掻き毟っていた。

「まあいい。俺はルブルに会う。敵か味方か区別する。じゃあ、行くぞ」

そう言いながら、彼の背中から、光の翼が生えてくる。

彼の人間という形態は変化していき、彼は一頭の白い竜へと変わっていった。そして、光の波紋を周囲に撒き散らしながら、何処へと飛んでいく。

近くにいた歩く腐乱死体や、腐肉を喰らう獣達が、彼の光の波動に巻き込まれて消滅していく。デス・ウィングは、咄嗟に、手にしていた占い道具を隠して、彼の力に巻き込まれないようにする。

「私も参戦しようかな？ ドーン側に付くか。ダート側に付くか。どちらにせよ、面白そうだ。ははっ、私も宣戦布告でもしようかな？ ルブルは私をメンバーに入れてくれるかな？ 私が本気を出せば、メビウスは私に敵意を向けずにいられるのかな？ 奴らの行く末は、とても見ものだな」

そう言いながら、彼女は懐から丸い水晶を取り出す。

エアはまた、彼女の悪い癖が始まったなあ、と思ったのだった。

第十三章 崩落が進み、世界への侵食が拡大する

タキオン島。

そこは、アサイラム付近にある場所だった。

赤い珊瑚が浜辺に群生している島だ。

長閑な島だった。

ケルベロスが選んだ場所だ。

敵側にバレないように、各地の難民を集って、シェルターに避難させている。

主に、緑の悪魔とイゾルダの攻撃によって、都市を破壊された者達の避難場所だ。ニーズヘッグと呼ばれる者が破壊した都市は、住民が一人残らず消し去られてしまっている。

現状は悪過ぎると言わざるを得ない。

他にも問題は山積みだ。

武器商人の方は、未だ行動が分からない。

ホーリー・ドラゴンの方は、相手の望み通り、メビウスが討伐に向かったとの事だった。

レウケーは、煙草を吸いながら、心労を抑えていた。

「ん、何だ？」

レウケーは、シェルター内で、彼に語り掛けてくる少年を見る。

どうやら、共通言語が通じない。どうやら、その少年が使う言葉は、翻訳しなければならないみたいだった。レウケーは、彼の話す言語を知っている者を、アサイラム内で探す事にした。

どうやら、かなり田舎町の言語みたいだった。

レウケーは、何とか翻訳機を使って、その少年と会話をする。翻訳機を作ったのは、アサイラムに収容されている囚人だ。レウケーは、心の中で舌打ちをする。

十

グリズリーの焼け跡から、数百キロ離れた地域。

そこは、まだ平和で、侵略に怯える人々で溢れていた。

人口は、数百万人程度だろうか。少し、ダート側の強力な能力者が暴れるだけで、簡単に壊滅してしまうような場所だ。

そこは、中世から近世にかけての、建築物をそのまま残した歴史ある場所だった。白亜の城塞が並んでいる。

兵隊達は、兜に鎧を身に付けて、剣と槍で警護を行っていた。

ホビドーは、この辺りで待機していた。

確実に、狙われる可能性のある場所だからだ。

相棒のスロープは、此処にいる避難要請の住民をシェルターへと案内するべく、幾つか配置されたヘリコプターへと案内している。

もし、逃走用のヘリを敵側に見つけれれば終わりだ。だから、ヘリは光学迷彩という透明に

なる技術を駆使して、慎重に動かさなければならない。

「やはり、此処だったか」

自分の読みは的中した。

街中で、反乱が起こっている。

手に手に、ショットガンを持ったパワード・スーツの男達が現れる。彼らは、街の兵隊達を撃ち殺し続けていた。

ホビドーは、彼らの前におもむろに立ちはだかる。

「何だ？ お前らは？」

男達は、彼に向けて、銃を撃ち続ける。

ホビドーは、周辺へと自身の能力を広げていく。

酸の空間だ。

男達は、悲鳴を上げ始める。

「ゾンビでは無い……？ 生きた人間か？ ゾンビなら痛覚は無いだろうからなあ」

彼はそう言いながら、冷静に状況を分析しようとしていた。

通信機から、スロープの声が入る。

「何？ 街が囲まれている？ 強化服を身に付けた者達にか？」

彼は、苛立っていた。

彼の上司であるレウケーは、タキオン島へと出払っている。レウケーはすっかり意気消沈してしまっただけで、この戦いでは、自分は裏方に回ると述べていた。彼の自尊心をへし折る程に、ダート側の敵は強力な相手ばかりだった。実際、この前、アサイラムは再び襲撃されて、ケルベロスが重症を負っている。

ホビドーは折れるわけにはいかなかった。

自分の能力は、きっと大した事は無い。だから、最大限に生かさなければならない。

敵は、市外地のあらゆる場所を歩き回っている。

彼は、パワード・スーツの男達を見つけ次第、酸の弾丸を撃ち込んでいく。

ホビドーは眉を潜める。

「統率が取れている。ただの無頼漢じゃない。敵側に司令塔がいるのか？」

十

「あははっ、ミソギちゃん。あたしが見る限り、この街も簡単に終わるわよ？」

そう言いながら、筋骨逞しい厚化粧の男が、通信機で会話をしていた。

「他にも、勢力圏を広げていくわけでしょう？ 儲かるわねえ」

彼は、くねくねと全身を動かしていた。

「それで、貴殿は一体、何なのかな？」

ラジュリは、後ろを振り返る。

すると、獅子頭の巨漢が、戦斧を手にしていた。

「あは？ ちょっとねええん、乙女には色々と秘め事があるのっ！」

そう言いながら、骨太い肉体の男は、全身をくねくねとさせる。

「ミソギ、と言ったか。何処かで聞いた事があるのだが……………」

ラジュリは何とか交渉に持ち込むような姿勢をする。

しかし。

スロープは、問答無用だった。

バトル・アクスを、オカマの頭に向けて振り下ろす。

ラジュリは、咄嗟に身を翻す。

「あらあ？ あなたは、タイプじゃないしい。あたしが此処で始末してもいいのよお？」

「そうか、俺は貴殿の命を終わらせなければならないらしいな」

そう言いながら、獅子頭は、戦斧を振り回していく。

「あははっ？ そんなんじゃ、あたしを倒せないし。あたしの『ハイエルフ』の敵じゃないわよ？」

そう言うと、ラジュリは両手をハートの形にする。

すると、彼の周辺が、桃色と琥珀色が入り混じった空間へと変わっていく。

スロープは、少し冷や汗を掻く。

「此処、水脈があるのよねえ。開拓してリゾート地やら何やらに出来るんじゃないかしら？ 此処の国の王様と交渉したいんだって。ミソギちゃん、最終的には、此処にミサイルを幾つも撃ち込んで平らにしたがっているわ。彼はとってもお金がお好きな男。だから、お金の為になら、何でもやるんじゃないかしら？ “故郷を持たない”から、守るべき国も無い。守るべき大切な人もいない、あの人にあるのは、果ての無い野心と物欲だけなのよねえ？」

スロープは、通信機を取り出して、相棒へと連絡していた。

「あたしのハイエルフに畏れを為しているのかしら？ ちょっと、近付いてごらんさあいい？」

スロープは、ホビドーと連絡を取っているのだった。相手の話の内容がよく分からないと、だから、どちらかと言えば策士タイプのホビドーが考えて欲しいのだが。

ホビドーが言うには、ミソギというのは『武器商人』と呼ばれている男だった。所謂、マフィアなどの裏社会では、それなりに有名な名前だし、賞金首達も、この男の息の掛かったブラック・マーケットなどで、武器や奴隷などを調達しているとの事だった。

……どうする？ ラジュリとかいう男の使うハイエルフの能力の全貌が分からない。確か、眠らせる、とか言っていたが。どれだけの効果があって、本当に眠らせるだけなのかも分からない。

通信機の向こうの声は、鼻で笑う。

……そいつは、多分、かなり頭が悪い。ミソギに踊らされているだけだろ。そいつの能力の全貌も大体、予想が付いた。誘惑、混乱タイプの精神攻撃か何かなんだろう。それに加えて、何か物理的にダメージを与えてくる力もあるかもな。とにかく、距離を置いて戦え。まともにやれば、お前の相手じゃないさ。それから、なるべく、口を割らせろ。

「ミソギちゃんは、イゾルダの生体兵器も欲しがっているわあ。もっとも、操作が難しそうだから、頭を捻っていたみたいだけどねえん」

そう言いながら、ラジュリは、くるくる、と全身を回転させていく。

スロープは、距離を置き続ける。

そして。

その辺りにある壁を拳で破壊すると、ラジュリへ向けて投擲していく。

ラジュリは、明らかに困惑したような顔をしていた。

「ほらあ？ あなたは臆病者なのかしら？ もっとこっちに寄ってよお」

スロープは、彼の言葉の一切を耳に貸さない。

「今から、貴殿から出来る限りの言葉を引き出したい。覚悟はいいかな？」

オカマは彼を嘲るような顔で見ている。

スロープは心の底から腹立たしく、彼を見るのだった。

十

ケルベロスは、レウケーの部下のホビドーと通話をしていた。

「武器商人ミソギ……？ ……ああ、知っている。尻尾が掴めないから、ランキングには入れられていない。顔も知らないが。確かに、その男は裏社会を牛耳っている大物だ。能力者では無いらしいが、奴の射撃の腕や、兵器の操作。それから、奴の部隊はかなりやっかいな障害になるだろうな。そう言えば、先代の看守長や、死んでいった多くのハンター達が、ミソギという男を追っていたらしい。奴を捕縛するなり、倒せば、かなりの数のマフィア達が勢力を削がれるだろうとも言われている。いや……………、それ処か……………」

武器商人。

その男が扱っている武器の事を考えるならば。

「マフィアどころじゃない……………。そいつは、色々な各国家に最新型の銃、ミサイル、戦闘機、地雷、戦艦、強化服……………。レーザー銃や超振動ブレードまで売っていると聞いている。詳しくは俺もよく分からない。銃の種類、爆薬の種類も色々だ。銃ならば、拳銃、アサルト・ライフル、スナイパー・ライフル、ガトリング・ガン。文明レベルの高い国と交渉して、意味の分からないビーム兵器や改造人間まで手に入れているらしい。爆弾は、小型の時限爆弾から核兵器まで動かしているらしいがな。……………とにかく、ふざけた奴だ」

ケルベロスは、ホビドーの話聞いて嫌な想像が頭にちらつく。

「銃や爆弾で、能力者を倒せるのか？ ……細菌兵器とかも有しているかもしれない」

彼は首を傾げた。

銃やミサイル、果ては核爆弾くらいなら、この世界の平均的な文明を有している者達の道具だ

。

想像する上で、やっかいなのは、ドーンなどが手を出せない科学が発展した国だ。

もし、そこにある兵器とやらを手に入れているのならば、何が出来るのだろうか？

「昔、『エーテリオン』という人工的に能力者を生む計画が、当時の最先端の科学者達の間で行われていたな。インソムニアも、エーテリオンの計画で生まれた実験体だとは聞いていたが……」

そして、資料によれば、その計画の集積物が、イゾルダという存在だ。

彼の生体兵器は、人類が創り出した“負の遺産”なのだ。

しかし……。

「とにかく、俺はミソギの正体は知らない。まず、顔が出回っていない。チェラブさんやハーデスの師匠が色々言っていて、尻尾を掴みたがっていたが。彼らが死んで、俺が所長になってから追跡が中断されている。それ処じゃなくなったからな。しかし……」

何の為に、ダートに参戦したんだ？

まるで、理由が分からない。

十

ミソギは大都市の夜の中、笑っていた。

此処は、二百三階の高層ビルの頂上だった。

メアリーとセルジュの二人との交渉は終わった。

表向きは、ダートが大国を滅ぼす。

そして、滅ぼした大国の資源の殆どはミソギの所有物になる。

それが交渉の内容だった。

街には、光が広がっている。

この街を、彼は自身の根城にしている。此処は彼の王国だった。

地下には、色々な国家から手に入れた兵器を入れた格納庫が各地に眠っている。

ダートが世界を破壊しているお陰で、みな、武装を強化したがつている。利益は順調に増え続けている。アサイラムの側はその事にはノー・マークだ。グリーン・ドレスやイゾルダとかいう奴らの起こした惨禍のお陰で、アサイラム側の兵隊達はその事に眼が回っていない。

死人が増える事はとても良い事だ。

それは金に繋がるからだ。

死体が金を生み出す。それがミソギにとっての理屈だった。

十

ホビドーは、パワード・スーツと戦い続けていた。

敵は、手に手に、命中すると熱線で焼き尽くすレーザー兵器まで有している。

この街の兵隊達は、敵の装備にまるで勝てずにいるみたいだった。

彼は、自身の能力である『アシッド・フィールド』によって、片っ端から、パワード・スーツの装甲を破壊して、中の人間を攻撃し続ける。

しかし、どうしても持久戦になれば不利だ。

一体、この街は、どのくらいの敵に囲まれているのだろうか？

まるで、予想も付かない。

十

ルブルは、白骨ドラゴンに乗りながら、森を低空飛行していた。

ドーン側に見つかれば、相手次第では終わりだ。

何とかしなければならぬのだが、自分の力ではこれが限界だ。

明らかに、周りの者達に自分の強さが追い付いていない。

ルブルは焦る。

先ほど、……数分前から、此方に向かってくる何者かがいた。

アイーシャでは無い。ケルベロスでも無い。それから、魔女の壺を通じて対話した誰とも違う。もっと、違う何かだ。

「何なのかしら？」

彼女は酷く警戒を始める。

そいつは、光の輪に包まれながら、浮遊していた。

純白に黄金色の刺繍が施された、法衣のようなものを身に付けている。

端正な顔で、白金の髪をしていた。

背中から、白い竜の翼を生やしている。

「お前がルブルか？」

「あら……、貴方は？」

それは、一瞬の出来事だった。

ルブルの白骨ドラゴンの頭部と、右翼が消し飛ばされていく。

男は指先から、幾つもの光の輪を出していた。

ルブルは、地面へと墜落していく。そして、墜落する直前に、ドラゴンの残った部品を組み替えて鳥のようにして、何とか地面との激突を免れる。

鳥の鉤爪が、ルブルの両脚を絡み取って、彼女を吊るすような形を取っていた。

「あら、いきなりの挨拶、酷いじゃない？」

男は顎を押さえながら、首を捻る。

「お前がダートの首領ルブルか？ こんなものなのか？ 今、俺が本気で攻撃すれば、お前、塵も残らなかったぞ」

男は完全に小馬鹿にしたような口調で彼女を見据える。

「ヴェルゼ……、グリーン・ドレス……。彼らも中々だったけれども、貴方も凄そうね？」

「メビウス、デス・ウィング。それから、お前ら側のニーズヘッグってのと直面したんだが。何というか、はっきり言っているのか？」

「ええ、どうぞ？」

ルブルはゆっくりと、地面に着地する。

「おい、お前。俺が相對してきた奴らと比べて、かなり弱いよ。本当に、悪の組織のボスなのかよ？」

「うーん、自覚はあるんだけどねえ。そもそも、別にトップが最強である必要なんて無いじゃない？ トップは組織を動かしていればいいだけだから」

「そうか。まあ、人間、色々あるからなあ。それから、お前、何ていうか怠け者っぽいもんなあ」

そう言いながら、男は何処からか取り出した、ナッツがふんだんにトッピングされた、ミント・アイス・クリームを取り出して、それを食べ始める。

そして、空中で脚を組みながら、再び、何処からか取り出した手鏡で、自分の髪型を真剣に眺めていた。

「なあ、ダートのメンバーは面は良いか？ 俺は美しい方か？」

「ふふふっ、まあ、ヴェルゼとかよりは、美形なんじゃないかしら？ ダート、どちらかというと、女の方が多いし」

「そうか」

そう言いながら、男は、辺り一帯の森へと光の輪を撒き散らしていく。

すると、苔やカビなどに侵食された場所が消え、遠くでは、何かの生き物の悲鳴が響き渡っていく。

「貴方の名前は何？」

「俺か。俺はエア。力の名は『ホーリー・ドラゴン』。汚れたものを浄化し、滅していく。デス・ウィングの誘い……まあ、俺の半ば強引な要請もあって。ダートに入ろうと思っていたんだが。どうしたもんかな」

エアと名乗った男は、迷っているみたいだった。

「貴方は、何ていうか……狂っているの？ 素敵なくらいに」

「さあな、知らんよ。デス・ウィングは俺を狂人だと言うんだから、そうなんじゃないか？ 異常な強迫神経症染みみたいな潔癖症が、そのまま力の形になっているみたいだしな」

エアは指先を振るう。

ルブルの隣を、光の刃が駆け抜けていく。

「お前をこの世界から消し去るのは、簡単みたいだが。確かに、お前は俺からして不快だし、きっとその精神は醜悪なんだろうな。だが、俺には動く理由がある」

「何が目的かしら？」

ルブルは狡猾そうな笑いを浮かべる。

「ダートは、ドーンを倒すつもりでいるんだろう？ ドーンは俺の敵だ。メビウス様は俺を受け入れてはくれねえみたいだ。だから、意趣返ししてやろうと思っているのさ。俺を否定した世界を俺は赦さない。俺は信仰が好きだ。神を信じる精神が好きだ。汚れたものは、駆逐するべきだと思っている。この世界を浄化したいと考えている。全ては醜悪だ。しかし、どいつもこいつも同じなんだ。俺は何もかも気持ちが悪い。ルブル、お前らだけじゃなくてな」

「そうね、ダートの目的は。……メアリーの目的は、人間の隠し持っている闇を引きずり出す、という事。暴力性、異常性欲、怨嗟、そういったものを連鎖させていこうと、彼女は考えている。貴方にとって、メアリーは何？」

「駆逐すべきゲスだな、そいつは。だが、味方してやる。俺は人間それ自体を汚いと思っているからな」

エアは少しだけ、恍惚とした笑みを浮かべていた。

ルブルは、口笛を軽く吹く。

「合格。ダートのメンバーに入って。好きなようにやっていい。何なら、結果として、この私を貴方が殺す事になったとしても、それはそれで楽しいから。ダートは、私が消えても動き続けるでしょうから」

「成る程な。お前は……、人間の暗黒をこの世界に浮上させたいんだな。なら、良い事だ。お前は今は滅さない。俺が人類を嫌う理由を形にしてくれるのだからな」

そう言うと、エアの光の翼は増え続ける。

「じゃあ、俺はどう動けばいい？」

「意のままにすればいいんじゃない？」

「じゃあ、ドーンと戦うぜ。メビウスとまた会いたい。俺が此れまで恨んできた、この世界の不浄を認めやがる。偽善者だもんなあ、連中は」

そう言うと、エアは何処かへと飛び去ってしまった。

ルブルは、とても楽しい気分浸っていた。

狂っている。

そして、その狂気をまともな人間は中々、理解する事が出来ない。

それが、ダートのメンバーの条件だった。

エアという男は、きっと、本当にこの世界が汚らしいと考えているのだろう。何もかもが醜く、人間それ自体が醜悪なのだと考えているのだろう。彼女にとっては、とても素晴らしい歪んだ精神だった。デス・ウィングは、やはり良い相手を選んで派遣してくれる。

……さてと、メアリー達はどうしているのかしら？

このままだと、本当に自分は殺される。

自身のカラプトで出来る事も限られている。

アイシャ如きには、殺されてやるつもりは無い。

戦略の練り直しが必要だろう。それは、どちらかというともメアリーの方が得意だ。

夜の帳が、空には広がっている。

それにしても、騒々しい男だった。

ルブルは一息付く。

十

バイアスはまだずっと、死の幻惑の中を漂っているみたいだった。まるで、深い海原へと飲み

込まれていき、そこにはきっと真実が眠っているかのようだった。

彼はひたすらに、アイーシャに尽くしたいと思うのだが、どうやら彼女の思惑は、バイアスのそれとは違ったものみたいだった。

何の為に殺したのだろうか？

バイアスの友人を、家族を。

彼は彼女達のその行動を肯定してしまった。

だから、自分は狂っていった。

アイーシャは、ダートを倒す事に執心している。

なら、それを従うべきなのだろうとは思った。

自分がかつてイメージした人間とは違う。

アイーシャの瞳は澄んでいる。

自分の瞳は濁っている。

この違いは、何なのだろうか？

彼は、未だ、仲間達を自らの能力で殺した事に対して、罪悪感というものを抱けずにいる。きっと、命なんてものは夢幻でしかないと思っているからか。

そう。

いつの日か、自分は人間らしさ、とかいうものを忘れてしまっていた。

人はストレスを感じると強くなれる。

アイーシャが、そんな事を言っていた。

苦痛から、苦悩から逃れたいが為に、強くあろうとする。それこそが、強さと呼ばれるものの正体なんじゃないのか、と彼女は言うのだ。人間は本質的に弱いからこそ、何かしら強くなろうと抗う。だから、アイーシャは剣技を磨いてきたのだとも。

十

ペイガンは、これからどう生きればいいのか分からなかった。

少なくとも、もう日常なんてものは何処にも存在しない。

目の前に見えている景色が、いつだって豹変してしまっている。

赤い天使の幻影が消えそうにない。

それは、死の魅惑そのものだった。非現実なまでの暴力は、とてつもなく美しかった。彼は毎晩、斃される。愛する者達は、みな死んでしまった。街は廃墟になり、一体、いつになれば、復興するのかまるで分からない。それでもなお、あの天災は美しいと思う。憎しみを持つ事がどうしても出来なかった。多分、自分の感性は間違っている。

それにしても、あの彼は何処に行ったのだろうか？

カシューは良い奴だった。

半人半馬だったが、ペイガンの話をよく聞いてくれた。

このシェルターの中は、色々な国や街から避難してきた者達で溢れ返っている。だから、民

族も、種族もばらばらだ。言語が通じない者達が殆どだった。

どうにか、レウケーという男が配布するマイクなどで、翻訳が成立している。

カシューがいてくれたなら、また心が安らぐんじゃないのだろうか。

シェルターにいる者達と、中々、打ち解けずにいる。

けれども、何処か陽気なカシューなら、そんなペイガンをフォローしてくれると思うのだが……………。

自分はきっと怖いのだろう。

余りにも、多くのものを失ってしまっているという事実と直面する事がだ。

十

レウケーは項垂れていた。

何処も、略奪や強姦、殺人が相次いでいる。

欲望そのものを剥き出しにして、人々は法を犯している。いや、今や何処も無法地帯なのだ。人間というものは、法律だとか道徳とかによって欲望をコントロールしていても、一旦、それらが突き崩されると、こんなにも人の自制心は脆いものかと思わずにはいられない。

怨嗟がずっと、広がり続けている。

ダートの狙いはこれなのだ。

人々の本性を暴き出す事、所詮は、人間の意思というものはモラルなどで、コーティングされているが、所詮は、動物でしかない。

この人類を死滅へと追い込みたいと願っていたダートのメンバー。

彼らの言い分が、正しいとさえ思い込んでしまうのだ。

人間の世界には、秩序が必要なのだ。

友愛だとか、信仰だとか、性善説だとか、そういったものは虚構でしかないのだから。

あくまでも、秩序やそれが行使される環境が与えられているからこそ人間は優しく、愛という観念を生み出す事が出来るのだから。

……ケルベロス、お前は言った。人々の笑顔を見れるから、守る価値はある、と。でも、お前はそれでいいかもしれない。けれども、誰もがお前に為れるわけじゃないんだ。

レウケーは、自分の弱さに苛立ちを覚える。

ダートの構成員に一度も勝利していない自分は、負け犬でしかない。

なら、自分は前線に赴くべきではないのだ。

けれども、レウケーはつねに苛立ち続けていた。

人間も所詮、生き物でしかない。

だから、子孫を残し、種族というものを維持しようとする。

人間は不幸にも、思考というものが生まれた。だから、正義だとか道徳だとかの概念が必要だったのだろう。人間は存続するに値しない。実際、植物や動物のみが存在する世界であったって構わない。更に言うならば、生き物全てが絶滅したとしても、だから、どうだというのだろうか？

レウケーは、夜、魘され、寝汗ばかりをかいていた。

睡眠時間も延びている。

実際、起きている間も、殆どは待機時間と、情報伝達ばかりが多くなっていき、後は部下達や、ドーンの他のメンバーにやらせている。

たまに、シェルター内で揉め事が起きれば、レウケーが向かって諫める。そんな仕事ばかりだ

。

最近では、煙草の本数やコーヒーの量も増えている。

そんな事を彼が考えていると、ふと扉が開く。

レウケーの部下の一人が、パソコンを持ってきた。

何でも、ホーリー・ドラゴンからの話があるらしい。

レウケーはいぶかしんだ。

それは、動画だった。

今や、世界中のネットに配信されているものだ。

レウケーは嫌な予感がしていた。

ネットを閲覧出来る国の者達ならば、みな、見れる筈なのだ。

リアルタイムだ。録画された奴じゃない。

レウケーは、配信されている動画をスクリーンで、まじまじと眺めていた。

謎の仮面の男が少しの間、演説を行う。

映像が流れ続ける。

レウケーは絶句していた。

この男は、何て事をしてくれたのだ、と。

本来ならば、アンダー・グラウンドの映像として流れているような代物だった。それらの映像は、所々にモザイクを入れるものも多かった。

十

エアは素顔を覆う仮面を被る。

そして、いつもの法衣では無い、ゆったりとした白のローブで纏っていた。

声も、ボイス・チェンジャーを使って変えていた。

彼は、一応、体裁上、素顔と声を隠す事にしていた。

面倒で、時間を無駄にするだけの、相手からの攻撃は避けたいからだった。

「よう、人間共。今日も元気かよ？ 俺はこれから、グロテスクな映像をひたすらに流し続けようと思っている。これは、俺が収集して、集めてきたものだ。全世界、全人類に告ぐ。俺はこの世界は浄化する意味があると考えている。今、世界中を席卷している天災共は、人類全てを、あるいは生命全てを滅したいと考えている者達までいる。何故、彼らがそのような思考に至ったか、みなに考えて欲しいと、俺は思っている」

光が方陣となって、スタジオ内に広がっていく。

エアは、ホーリー・ドラゴンの光によって、巨大なスクリーンを背後に創っていく。

そして、自分の記憶情報をスクリーンの中に投影していく。

それには、様々な悲惨なものが映し出されていた。

「さあ、豚共。しっかり、眼に焼き付けろよ、これが貴様らが守ろうとした人間共だ」

火炙りにされる者達、拷問で寸刻みにされていく人々、動物達に食い殺される拷問、細菌と注射されて崩れていく男達、糞尿を擦り付けられ、蛆に集られて処刑されていく人々。

画面が移り変わる。

輪姦される女、輪姦の末に生まれてしまった子供、その子供が虐待されて猟奇殺人犯になるまでの映像。更に、ありとあらゆる性倒錯の末に強姦されていく女達。中には、残虐に殺されていく者達もいる。

画面が、また変わる。

貧困国から略奪を繰り返す軍人、虫に集られながら餓死していく子供達、ドラッグによって感覚を麻痺させて日々の食料代わりにする子供達。そして、幼児達を性的な玩具にする大人達。

そして、豚や牛の映像が流れて。それらが解体されていく。それら家畜を養っている者は貧困に苦しむ者達だ。そして、裕福な国家へと解体された家畜達は、輸送されていく。その課程を延々と見せ付ける。

高尚な大義や、思想信条を掲げて戦争に挑む者達の姿もあった。彼らは敵地で、女を凌辱して、罪の無い民間人を殺傷していた。

映像は何度も、何度も、移り変わっていく。

彼が此れまで見てきたものを、記憶から再現して光のスクリーンに映し出しているのだ。

最終的には、これまで映した映像に、更に悲惨な映像を足して、それを何度も明滅させながら垂れ流していた。

光の能力によって、TVの電波をジャックしている。

全世界のスクリーンによって垂れ流されているのだろう。子供も見ている。平穩に暮らしている多くの者達が眼にしている。

エアは腹を抱えて、笑っていた。

そして、しばらくして、唐突に言う。

「これが人間だ。貴様らの多くは平穩に暮らしているのか？ それとも街を壊されて、復興に勤しんでいるのか？ だが、無駄だ。人間の歴史ってのは、こんなものの繰り返しだ。実際、これらは俺が行ったわけじゃあない。誰か宇宙人みたいに異常な奴らがいて、そいつらが行ったわけなんかじゃない。全部、全部、お前らなんだよ。クソ共が。俺は貴様らを赦さない。貴様ら人間をだ」

いつしか、彼は涙を流し続けていた。

彼は、強い潔癖症と、信仰によって生きてきた。

天国と地獄を信じ続けてきた。現世で正しい事をした者は天の国へ、悪なる事をした者達は地獄へと突き落とされるのだと信じていた。だが、死後の世界なんて存在しないのだと分かった瞬間に、彼の自制心は壊れてしまった。

彼は、中指を全世界に向けて立てて叫ぶ。

「お前ら、俺の声が届くなら、全員、自殺しろ。首吊りでも、飛び降りでも、毒でも自傷でも何でもいい。とにかく、お前ら全員、死にやがれ。上っ面の偽善者のゴキブリにも劣る、反吐のような脳味噌のクソ共がっ！」

彼は、中継を終わらせて。背後の光のスクリーンを消していく。

そして、半ば朦朧としながら、嘔吐感に襲われて、この部屋を出て行った。

襲った国のTV局だった。

機械は能力で、コントロールする事が可能だった。

局員達は、全員の様々な箇所が消し去られて、苦悶に呻いていた。

エアは、仮面を投げ捨てて踏み砕く。

彼は、ひたすらに流れ出る、涙を止められずにいた。

そして彼は、酷い嘔吐感と眩暈を伴いながら、スクリーンのやたらと多い部屋を出て行く。

何もかも、消してしまいたい。

自分の記憶の何もかもをだ。

こんなにも、何で、自分の心は弱いのだろう？

何故、此れ程、受け入れられないものばかりが、この世界に蔓延しているのだろうか？

理解出来ない。何も信じたくない。

この両眼を潰して、脳組織を焼けば、全てを抹消出来るのだろうか？

彼は壁に持たれながら這って、この建物を出ようとする。途中で、デス・ウィングの姿を見つけた。彼女は壁に持たれ、腕を組んで唇を三日月形にしていた。

「よう、よく俺の居場所が分かったな？」

「楽しませて貰いましたよ。いい演劇が期待出来そうだ」

「俺は自己嫌悪に陥っているんだ。腹を下しそうだ。なあ、そこをどけよ」

デス・ウィングは、彼に道を明ける。

十

セルジュは、お腹を抱えて笑っていた。

メアリーは上等なワインを口にしていた。

あの仮面の男は、ルブルが言っていた新たなダートのメンバーであるエアという者なのだろう。

二人は、豪華なホテルのラウンジにいた。

此処からは、絶景が見下ろせる。

セルジュはおもむろに、ミソギへと電話を入れる。

「おいおい、見たかよ？ あいつやるよな？」

《下らんよ。何を今更、という情報だろう？ 小物だ。心が弱い。中継者も、どうやら、あの映像を見て騒いでいる連中もな。俺の部下達は、みな失笑している。センスが無い。》

「はっ。でも、人間共が阿鼻叫喚に怒り出す光景が目に浮かぶみたいだぜ。何せ、見たくないものを見せ付けられたんだからな？ 俺はとっても愉快だった」

《あんな事して、金になるのか？ 低俗なポルノみたいなものだよ。軍隊を動かす立場なら、嫌でも眼にする。別にこの世界が不条理で不平等なのは当たり前だ。何が面白いのか、俺には理解に苦しむ。》

「そうかよ。だが、いい映画だった。なあ、爽快感って奴はこういうもんなんだよ」

《仕事があるんでな、あんまり下らない事で電話してくるな。俺は今、兵隊の指示で忙しい。お前らの為だぞ？》

「ははっ、ありがとうよ」

そう言って、セルジュは電話を切る。

彼は鼻歌を歌っていた。

安っぽいポップスの曲だった。

メアリーは、レアに焼いた肉を切り分けながら淡々と呟く。

「あの仮面の男、ミソギやその兵隊達が何名束になっても叶わないわね。かなり強力な能力者よ」

そう言って、フォークで生肉を口に運んでいく。

セルジュはテラスの柵に腰を下ろしながら、夜景に見とれている。

遠くには、海が見えた。

十

エアの心は清らか過ぎて、清らか過ぎるからこそ、邪悪なのだ。

デス・ウィングは、そんな彼が大好きだった。

信仰心だとか、神だとか。性や理不尽な暴力に対する憎悪だとか、そういった葛藤に対して病んでいっている彼を見るのが大好きだった。

デス・ウィングはエアに語り掛ける。

ルブルからの話を聞く限り、と、彼女は前置きのように言う。

「ヴェルゼは虐待されて生命を憎んだ。イゾルダは生体兵器として実験されて、人類を滅ぼそうと思った。エア、お前は何なんだろうな？ お前は人間を滅ぼしたいのか？ それはそれで面白そうだ。きっと、メビウス・リングは、お前のそういう部分を忌み嫌っているんじゃないか？ 救済は滅亡か。それは人類の永遠で不変なテーマなのかもな？」

魔人はただただひたすらに、冷笑していた。

エアは怒りで声を震わせている。

「夢や愛は正しい。人間は善だ。人々は救う価値がある。人間は生きるに値する。美しいものを固めていく事も可能だった。きっと、多くの者達はそういったものを信じて生きているんだろう。そのような感性ならば、この世界から受け入れられるんだろう。だが、俺はそんなものは何も信じない。嘘を重ねていく事に対して、憎悪しているから。きっと、嘘を塗り固めていけば、そ

れはいつか嘘じゃ無くなっていくんだらう。信じれば、きっとみんな、救われるから。何も見なければ、それが正しい人生なのだから」

エアは、壁に何度も頭をぶつけていた。

どうやら、自らが復元した映像を見て、自分自身が苦しんでいるみたいだった。

記憶を消したがつているのは、きっと彼自身だ。

デス・ウィングはずっと笑い続けていた。

「私はそんな人間の悪意を、深淵を愛して止まないんだがなあ？ だから、私はそういったものの、コレクターで。傍観者なんだ。お前もどうしようもないくらいに、愛しているんだがなあ？」

「デス・ウィング、俺はお前を殺していいか？」

「やってみろ。面白そうだな？」

ぱしっ、ぱしっ、と、指を弾く音が響く。

彼女は、いつの間にか長い刀を腰に差していた。

それを、おもむろに引き抜く。

「『ストーム・ブリンガー』」

「『ホーリー・ドラゴン』」

二人は、自らの力の名を呟く。

「私は死ねない。お前が私を殺せるのなら、それはとても僥倖物なんだよ。この場所なら、破壊されて困るものが何も無いからなあ？ 全力で殺し合おうか？」

風が流星のように吹き荒れていく。

「『ホーリー・ドラゴン・セイント・ホール』」

まるで、真っ白なブラック・ホールのようなものが、彼の周辺に生まれていく。それは、デス・ウィングを飲み込もうと迫っていく。彼女は、刀を振るい続ける。

異常なまでの風圧で、エアの作り出した光の孔が、何処へと、吹き飛ばされそうになる。

エアは、追撃も行おうとしていた。

光が床や壁を走っていく。

「『ホーリー・ドラゴン・ローゼ・ウィンド』」

薔薇のような形状の光が、デス・ウィングの周辺に纏わり付く。

彼女は、刀を持っていない方の手の指を、拳銃のようなポーズへと変える。

TV局の通路を、彼女は指先から出る風圧だけで、孔を空けて、破壊していく。

おそらくは、音速を遥かに超える速度で、彼女は風の弾丸を撃ち出し続けている。

エアの全身も撃ち抜こうと思ったのだが、彼の肉体に触れる前に光の壁によって消し飛ばされていく。

光の薔薇がデス・ウィングを包み込んでいく。どうやら、この薔薇が増殖し続けているみたいだった。

デス・ウィングは、薔薇をすり抜けて、刀を振るう。

エアの肉体が袈裟切りに切り裂かれた……かのように見えた。

デス・ウィングは、自らの右腕を見る。

完全なまでに、刀ごと、消し飛ばされてしまっていた。

「ははっ、お前は私の終焉になるのか？ お前は私を終わらせられるのか？ ずっと、楽しみにしていた。お前は私の命を終わらせられる可能性があるんじゃないかってな？」

彼女は狂喜していた。

エアは、おもむろに、床に腰を下ろす。

「俺は今、気分が悪い、って言っているんだろ。ふざけた挑発なんかしやがって。お前が良くても、俺は今、戦う気分じゃない。なあ、いい加減、俺はホーリー・ドラゴンを止めていいか？」

デス・ウィングは腕を再生させ、再び、長い刀を手にしていた。

「いや、もう少し付き合ってくれないか？ 私を殺せるかどうか、もう少し試して欲しい」

そして、まるで突進するかのよう、エアの胸元に刀を突き付ける。

……………どうせ、消されるだろう。

彼女はそう思っていた。

しかし……………

デス・ウィングは、そのまま、刀が彼の肉体を貫通してしまった事に気付く。

「ちょっと待て。……………おいっ……………」

エアは、口から血を吐き出し続けていた。

いつの間にか、光の孔や、光の薔薇が、何処へと雲散霧消してしまっていた。

エアは地面に仰向けに倒れて、蒼褪めた顔をしていた。

位置は心臓じゃない。急所は外れているとは思う。しかし……………

「おい、待てよ。お前、やる気出せよ。ああ、クソ」

デス・ウィングは、口から血を吐き続けるエアを背負う。

エアの全身の所々から、光の刃が漏れ出して、デス・ウィングの肉体の部分部分を滅していく。

「お前、相手が私じゃなければ、傷の治療も出来ないぞ？」

「……………いや、いいさ。このまま死ぬのなら、それでも構わない……………」

「まあ、それでも良いけれどもな？ だが、ずっと死にたがっている私よりも先に死なれるのは、何かと腹立たしいからな」

そう言いながら、二人は、TV局を後にする。

「エア。お前は全生命は、実は魂レベルで理解し合えているとか、そういう奇妙な空想とかが、無いのか？」

彼女は、軽口を叩く。

エアはすやすやと眠っていた。

きっと、彼はどうしようもないくらいに、純朴なのだろう。きっと、それは彼にとって、彼からの災厄を受ける者達にとっても、不幸な事なのかもしれない。彼はただ、とても傷付きやすいだけでしかないのだから。

それ故の敵意。

そして、どうしようもないくらいの皮肉。

何が、正しくて。何が悪なのかは分からない。

デス・ウィングは、ただ傍観者でしかないのだから。

しかし、きっと自分が追い求めて観賞しているものは、やはり、人々が忌み嫌うものでしかないのだろう。

.....。

エアの流した映像によって、一部の、全世界の平穏な日常を送っていた者達の生活がパニックになった。だが、ダートの破壊行為に比べれば、とてつもなく極めて微々たるものでしか無かった。

十

ルブルとの連絡は取れた。

彼女は、魔女の森の外へと抜け出したらしい。

途中、アイーシャに塹壕の家を覗かれて、エアに襲撃されたりしたらしい。

ルブルは、口調ではとぼけているみたいだが、かなり焦っているみたいだった。少なくとも、かなり身の危険を感じてはいるだろう。

セルジュは、ふいに呟く。

「アイーシャは俺が倒してやろうか？」

メアリーは、少し眼を丸くする。

「ふふっ、中々、自信過剰ね」

「ケルベロスだって、倒そうってんだから。アイーシャくらい倒せないとな。とにかく、俺はもっとずっと強くなりたい。俺は.....」

お前を守りたいから。

セルジュは、そう、口の中で呟いた。

彼は両肘から、刃を生やす。

「ふふっ、それとても気に入ったでしょう？」

「ああ、俺が自分の力で奪い取った、力の象徴だからな」

彼の瞳は真剣だった。そして、どうしようもないくらいに、真摯だった。

「あんまり、嫌かもしれないけれども。凄く男らしいわ。ふふっ、私は楽しみにしている」

メアリーはまるで、女神のように微笑んでいた。

もうすぐ、夜が明ける。

ミソギを何処まで信用出来るのか分からない。また、ミソギの武器とやらが、どれだけ有効に機能するかも未知数だ。

更に、アイーシャは大きな障害になる事には変わりはない。

そして、メビウス、ケルベロスはもうどうしようもないくらいの強敵だ。

漠然とどうしようもない感情も込み上げてくる。

イズルダの顔がちらついて離れない。

彼は、最期には人を赦せたのか？ ふざけるな、と言いたい。

ずっと人間という種を憎悪して朽ち果てたのだろうか。もし、最期に赦せたのだとすれば、一体、何が根拠だったのだろうか？

電話で、セルジュは思い付いたアイディアをミソギに話す。

すると、ミソギは、馬鹿が、と口にした後、何の意味があってそんな無意味で無為な事をするのか理解に苦しむ、と告げた。セルジュは舌を出して笑う。

「無意味で無為だからこそ、面白いんだ。俺はやるぜ、アイーシャとの舞台を用意しろよ。奴に布告しろよ、エアって奴がやったように、ネットで中継するのがいい。ステージに近寄る侵入者共は皆殺しだ」

ミソギは電話の向こうで呆れていた。

彼からすると、ダートの行動は非建設的で、非生産的で、まるで後先なんてものを考えていやしないのだろう。ただ、面白いから、衝動のままに行動する。ダートのメンバーがやっている事はそればかりだ。

十

ホビドーは、どっと疲れた顔をしながら、街路の陰に横たわっていた。

スロープからの通信によると、オカマの大男を取り逃してしまったという。

パワード・スーツ達は、ホビドーの能力によって、あらかた片付いてしまった。最初、どうしようもない状況だと思っていたのだが、戦ってみると、相手が戦意喪失を引き起こしてすぐに退散していった。

ゾンビと違って、やはり部隊が人間だと、勝てなさそうな相手には脅威を感じてしまうのだろう。

ホビドーは、缶ビールを口にしていた。

「……連中の何名かは、金で雇われている、って言っていたな。彼らなりの強い使命感とか意志とか持っていたら、もっと別なんだろうけどな」

街を取り囲んでいた者達の奇妙な装甲を、能力で破壊してやったら簡単に白旗を上げられてしまった。ホビドーの能力の全貌が、相手側はまるで把握し切れなかったというものもあるのだろう。

「訓練された軍人程度の精神力くらいはあるんだろうが、まあ、覚悟が足りない連中なんてあんなものか」

結局、彼が倒したのは、街中を取り囲んでいた敵兵の二割弱程度だった。

彼が、能力を全力で行使すると、相手は簡単に怯んでしまった。

捕虜になるくらいなら自害する、と、戦意を失った者達は言い放っていたので、仕方無く逃してやった。

どうにも、此方を怖がっている

上司のレウケーは速やかに殺せ、とは言っているのだが。

「俺は甘いな、駄目だな」

朝日が昇っていく。

たまには、守れる街の一つくらいあってもいいものだ。

ホビドーは、二本目の缶ビールを開けた。

第十四章 マシーナリーのハイウェイ

アイーシャは、バイアスを連れて、魔女の森を出ようとした。

そして、機械兵をネットに接続させて、全世界から現在の情報を受け取ろうと考えていた。その為には電力が必要だったし、端末も欲しかった。

とにかく、今、ダートとドーンがどうなっているのか、知りたかった。

この魔女の森は、時空間が歪んでいるのか、時間間隔がよく分からない。一体、どれくらいの間、森の中にいたのか分からない。そもそも、この森はどのくらいの広さがあるのだろうか？

此処は、迷いの森なのだ。

ルブルの城の位置こそ覚えていたが、そのルートから少し外れると、すぐに場所がよく分からなくなる。

昼頃には太陽が昇っているのだが、森の中は果てしなく暗い。

乾燥した物ばかりを食べてしばらくの間、過ごしていた。

野営にはなれている。かつての経験が生きた。

しばらくして、ようやく森の外が見え始めてきた。街道の辺りを眼にする。

バイアスは、ごくりごくりと、水筒の水を飲んでいて。

アイーシャはふうっ、と息を漏らす。

結局、敵らしい敵は、メリサという女だけだった。そして、ルブルはもぬけの殻だ。もう少し、あの家の中を調べれば良かったかもしれないが、トラップの可能性を考慮すると、とてもずっといられる場所じゃなかった。

本能的に、危険察知の力が働く。何かが変わったと感じた。

アイーシャは、街道に出る前に立ち止まる。

今は昼なのに、やたらと気温が肌寒い。

何かが、近付いている。

あの独特の、得体の知れない嫌悪感が漂ってきている。

「お前は何だ？」

アイーシャは森の中に向けて訊ねる。

彼女の声は残響して返ってくる。

すすり泣く声も、同時に広がってくる。

暗闇の中に、一人の女の顔が浮かび上がる。それは、花に包まれていた。

「何だ？ お前は？」

若い女だ。平凡な顔立ちをしている。

「私、殺されたの、……私、私……」

女は涙を流し続ける。

アイーシャは、迷わず、バイアスに指示を出す。

バイアスは、自身の能力で、頭部だけの女へと釘の放ち続ける。

「酷い、酷い、酷い、痛い、痛い、痛い、痛い、……………っ！」

「何か知らないけれども、バイアス。気を付けてっ！」

ぼうっ、と。

別の場所から、老人の首が浮かび上がる。

また、別の場所からは、犬の首が浮かんでいた。

更に、別の場所から、男女二つの顔が融合して浮かんでいた。

「何だ？ お前らは？ お前らはルブルの刺客か？」

バイアスの攻撃を食らった女が、崩れて目玉や脳髓が飛び出した顔のまま嘔き掛ける。

「ルブル……？ なあに、それ？ 分からない。分からないけれども、私達は殺されたの。此処で、剣や斧を手にした、身体の崩れた化け物に殺されたの……」

アイーシャは、腰から剣を引き抜く。

「そうか、お前らはこの魔女の森から独立的に自然発生した化け物なんだな。怨念って奴の集合体か何かか？ 人間はそんな姿になっても、死後も生きられるの？ 人間の精神エネルギーってのは、凄いな」

明らかに、この顔達からは敵意を感じた。

生きている者、全てに対する敵意をだ。

アイーシャは、自らの指を弾く。

すると、袋の中に仕舞っていた、自身の機械兵が動き出していく。

梟の姿の機械だ。

「ほら、これマツタケ。そして、こっちは山菜。あげる、あげるから。……」

若い女は口から、キノコや山菜などを吐き出していく。その後、何かの生き物の内臓なども含まれていた。寄生虫らしき虫がうねうねと、内臓の中を這い回っていた。

「丁度、お腹が減っていたし、キノコ嬉しいけれど。気持ちだけ貰っておく。何、貴方達、私達も、貴方達の仲間に入って欲しいんでしょう？」

頭達は楽しそうに笑っていた。

そして、空中をくるくると飛び回っていた。

数えると、全部で、十二頭程、浮遊していた。……融合した二つの顔があるから、計十三頭か。それらは、時計のように、くるくる回り続けている。

「あの道に行ってはいけないよ」

老人の頭が囁く。

「あそこ、崖だから」

完全に骸骨となった、頭が告げた。

「あたしは、落ちて死んだから」

顔半分が腐って、溶けた脳味噌を垂らし続ける妙齢の女が言う。

「焼け、『ネクロ・クルセイダー』」

アイーシャは、もう一度、指を弾いた。

すると、梟型の機械の頭部が開いて、辺り一面に熱線を照射していく。

頭達は、炎のレーザーによって、焼かれていく。

「さっさと、死ねよ。死に損ない共。やかましいのよ、生きている人間の邪魔をするな」

バイアスは、腹を鳴らしながら、貰ったキノコや山菜が食べられるかどうか、真剣に悩んでいるみたいだった。

「バイアス、さっさと撃ち殺せ」

アイーシャは、冷徹に言う。

彼女は焦っていた。

先ほどから、体温を奪われている。

全身から、悪寒が込み上げてくる。おそらく、こいつらの攻撃なのだろう。心臓が激しく鳴っている。そのうち、今にも、鼓動を止めそうだ。

頭達は、悲鳴を上げながら、宙を這いずり回っていた。

アイーシャは蠅でも叩くように、剣で叩き落としていく。

「おれはおれ、此処で迷って死んでえっ！」

「アタシの子供、とっても可愛かったのよ。九歳になって」

「誕生日プレゼントは何にしよう？ 今年の冬頃にはちゃんとしたモミの木を買って」

「助けて、助けて、助けて、苦しい、苦しい、痛い、痛い、痛い」

「人間に戻りたいよ、戻りたい、戻りたいんだよお」

生首達は、くるくる、ぐるぐると、回っていた。

犬の生首が、動かなくなった人の頭を噛み潰して脳を啜っていた。

赤ん坊が一人いた。泣いている。

耳障りな不協和音が、森全体を支配していた。

「やかましい、さっさと死ね」

アイーシャは自身の機械兵に命令し、バイアスに指示し、自身も剣を振るっていく。

死者達が、何かを叫び続けていたが、二人は一切を聞き流していた。

「お魚もあげるってさ」

最初の女が囁いていた。

今や、その女は、顔面全体が焼け爛れていて、半ば炭化していた。

ぽんぽんっ、と、生きた鯉が、何処からとも無く転がり落ちてきた。

もぞもぞと、それは動き出していた。どうやら、アンデッドではなく、生身の魚みたいだった

。生首達を全滅させた後、アイーシャ達は疲弊しきった顔をしながら、森を抜けていく。すると、街道だと思っていた場所は、大きな崖になっていた。

地上まで、数百メートル程はあるだろうか。

「ああ、そっか。一応、本当に心配してくれていたんだ。余計なお世話だったけれども」

バイアスは、女の生首から貰った、キノコや魚などを手にしていた。

「これ、食べられると思います？」

「そうだな……。食中毒とか、最悪、未知のウイルスとかゾンビ化エキスとか入っていたら嫌だけだな。どうしたものかな、お腹空いているしなあ……………」

そう言いながら、アイーシャはゆっくりと、崖を降りていく事を考えていた。

お腹が酷く鳴っていた。

バイアスは、我慢出来なかったのか、魚を生のまま口に入れて噛り付いていた。

アイーシャはそれを見て、思わず、尻餅を付く。

崖の上から見える景観は美しかった。此処から先には、近くに村らしき場所が見えた。煙突らしき場所から、煙が上がっている。アイーシャは、後、一、二時間くらいは食事を我慢しようと考えていた。

十

シェルターに避難してから思った事を、ペイガンは日記に綴り続けていた。

徐々に、翻訳機無しでも、簡単な言葉は覚えていっている。

少なくとも、身振りでぶりでも、意思表示くらいは出来るようになった。

自分も戦いに参加したいのだが、足手まといになるだけだろうなあとは思う。

まだ、あの赤い天使の姿が焼き付いて離れない。あの天使は、家族や友人を皆殺しにした、それでも放心状態のまま、その姿を美しいと思ってしまった自分は人の理に背徳しているのだ。

赦せないだとか、悲しいだとか、そんな感情が何処かへと行ってしまった。

ただ、心に孔が開いていて、それが日に日に広がっていくかのようなようだった。

シェルターの中では、人々がダートの連中を皆殺しにしたいといった内容を話し続けていた。

怨嗟ばかりが、とてつもない程に広がっていつている。

レウケーという男から、ペイガンは色々な事を聞かされた。

半ば愚痴ばかりだったが、ペイガンは思わず腑に落ちてしまうのだ。

ルブルは.....ダートは、憎まれれば憎まれる程に、ルブル側の思うツボなのだ。

レウケーは確かにそう言っていた。

世界各地には、動乱が巻き起こっている。

今、クーデターが各地で引き起こされている。

大国が集って、戦争の準備を始めている。

冷戦状態の国々に孔を開けたという行為も、ダートは引き起こしてしまっているのだ。そして、各地で起きる内乱は、きっと人々の恐怖心からだ。

二次的に、三次的に生まれてしまっている人災の方が、むしろシェルター内の恐怖を煽っていた。

ニュースの情報によれば、ダートのメンバーを騙る者達、そしてダートのメンバーと決め付けられて魔女狩りじみたものまで起こり続けているらしい。

もはや、人間とは一体、何なのかと考えざるを得なくなっていた。

何名もの宗教家達も現れて、戦地に祈りの巡礼を行っている者達もいた。

豊かな国では、復興の為の募金も行われていた。

人間は善なのか、悪なのか、少なくとも、ペイガンには分からない。考える余裕さえ無いのか

もしれない。

レウケーは苛立ちながら、ペイガンに愚痴る。能力者全員を処刑して欲しいというプロパガンダまで増えてきているのだと。

ダムはいつか決壊するだろう。

ペイガンは、能力者という存在を、漠然と知っていた。

人類に抗う術は無いんじゃないのか？

それくらいまでに、今、追い詰められてしまっている。どうにもならない現実が立ち塞がっているんじゃないのかと。

ドーン側は、戦力になる者達を募っている。

しかし、生半可な戦力は必要としてはいなかった。

憎しみという名前の呪いは、確実に蔓延していた。

結局の処、ルブルの目論見はそういうものなのだろう。

人間が人間を殺し続ける世界は正しく美しい。

それこそが、魔女ルブルのしている世界なのだろうから。

ペイガンは漠然と、自分も討伐隊に入りたいなあ、とは思っていた。けれども、自分なんか戦えるのだろうか。

ペイガンはシェルター内の、討伐隊志願の者達と話し合っていた。その中には、ケンタウロスのカシューもいた。討伐隊の者達は強い指揮の下、戦う意志があった。中には、元軍人などいるみたいだった。

討伐隊は、レウケーというアサイラムの要の一人が意気消沈している為に、彼の部下である、スロープという男が率いるとの事だった。

十

村人達は親切だった。

この村の長老らしき人物の家に、二人は泊まっていた。

言葉こそ分からないが、どうやら、二人は神々の巡礼者みたいな存在なのだとして理解されたみたいだった。

のどかな村だった。

アイーシャは、自身の機械兵を使って農作業を手伝う。

最初、村人達は驚いていたが、おそらくは神々の奇跡か何かだと思い込んで、理解したみたいだった。

そういう受け取り方をしてくれて、彼女としてはとても嬉しかった。

裕福な村には、とても思えなかったが。牛肉とジャガイモのスープは、塩と胡椒がふんだんに使われていて、とても良い味だった。近くの川で魚もよく取れるらしく、摩り下ろされたワサビがとても美味しかった。

川は澄んでおり、口に入れて飲める程だった。

何よりも、此処は気候がいい。大気も澄んでいる。

毛布にくるまりながら、アイーシャは、どうやってルブル達を倒すべきかを考えていた。両手両脚が未だ疼く。

切断された時の恐怖や痛覚が、再び、蘇ってくる。

今、緑の悪魔の存在を支柱にして生きている。彼女が死に際に見せた、不可思議な善意のようなものによって、アイーシャはきっと支えられている。

ネクロ・クルセイダーの機械兵は、ルブルのゾンビを倒せるのか……？

多分、それは可能だ。負ける気がしない。

しかし、ルブルは死霊術師として、強いというよりも、むしろ“怖い”のだ。

単純な能力の強さならば、負けるつもりは無い。

しかし、ルブルの恐ろしさは、やはり強さではなく、どうしようもない程の狂気の量にあるのではないのかとってしまう。

……私、少し、疲れているな……。

そう言えば、グリーン・ドレスが死んで以来、ずっと頭が休まる事は無い。身体をしっかりと休めたのは、いつの事だったか。

アイーシャは、魘され続けていた。

もっと、彼女と話したかったような気がする。たとえ彼女がどうしようもない悪人だったとしても、自分を暗闇の中から救ってくれたのは事実なのだから。

未だ、後遺症が拭えそうにない。

きっと、こういった感情が出てくるのは、自分が“まとも”だからなんじゃないのか？

人を殺戮する時に、確かに感じた事がある。

アイーシャは、果てしなく深い、闇の甘さを知っている。

きっと、それは蜂蜜のような味がするのだ。

狂気という甘ったるい果実、破壊衝動を心の赴くままに撒き散らしていく感情、それはもうどうしようもないくらいに優しく心を満たしてくれる。

罪の意識を捨てるという事。

永遠の暗闇の中に、引きずられそうだ。

いつか、自分の妄想が現実のものになってしまうのではないかと考えて、とても怖い。

誰彼構わず、殺していた自分に戻ってしまうという事……。

戻りたくなんて、ない……。

村長から借りた寝床の中で、彼女は考えているのだ。

こんな村くらいならば、彼女の能力で簡単に潰せる。住民を半刻に満たない時間で皆殺しにする事が出来る。

理不尽で無差別な虐殺の感覚は、まるでドラッグの依存症のようで、とてつもなく怖い。

あの感覚を覚えている。

……殺して、壊している時は、少しだけ憎しみや苦しみが和らいだ。きっと、そういうものなのだろうか。最初の殺人は何歳だったのだろうか？ 家畜の解体で生き物を殺す事に慣れていった

ように覚えている。血のベタ付く鉄の臭い。何故だか、段々と安らかな香りへと変わっていく。肉で皮膚を切り開いていく感覚。筋肉を抉り、骨にぶつかった時の感触。命に対する無感覚。

アイーシャは、寝返りを打っていた。

怖い、……自分がとても怖い。

どうしようもないくらいに、自分が未だ化け物でしかないという事実が恐ろしく、もはや人には戻れないのだろうと思ってしまうからだ。

隣では、バイアスが寝ていた。

彼は友人達を沢山、殺している。理由なんて、きっとまともに無かったのだろう。

アイーシャは誓っている。彼を正気に戻さなければならないと、正常な人間にしなければならないと。

力を手にした瞬間に、人なんて虫みたいなもんじゃないのか？　せめて、家畜みたいなものだ。

そうとしか人間を見れなくなってしまう事が、何よりも自分を人間から遠ざけるのだ。

拭い去りたい、全てをだ。

このまま未来が殺されていくのか？

それはあってはならない出来事だ。

十

シェルターの中では、しばしば喧嘩騒動が起こっていた。

避難してきた者達は、みな、荒んでいるのだ。此処には、家族を亡くした者や、家族を失った者達ばかりがいる。

ペイガンは、何処か、紙芝居でも見ているかのような眼で、みなを見ていた。自分は、今、何処にいるのか分からない。

カシューは、ずっと彼に囁いている。ペイガンの話相手になってくれる。

そう、彼は挫けそうな心をずっと励ましてくれるのだ。

「何で、避難してきた者達同士で争ってるんだよ？」

「連中は、自分達が一番、苦しいと思い込みたいんだよ。最初は共感し合えると思った。でも、違ったんだろ。それから、怒りの矛先だとか、憎しみの向け場が無いんだ。だから、いがみ合っている、それだけなんだろう」

カシューの口調は、何処までも穏やかだった。

それが、ペイガンの不安を和らげてくれた。

十

ダートのメンバーの一人から、また新たに映像の配信があるとの事だった。

今度は、世界中というわけではなくて、ごく一部の限られた場所に向けて放送するみたいだ

った。

大きなTV局の襲撃ではなく、インター・ネットの中継を見て、限られた者達に知らればいい。そういう目的らしかった。

以前の奴とは、別人なのだろう。

レウケーは、相変わらずの仕事部屋の中で、ネットの動画から生中継されるのを待っていた。白い画面に、暗いシルエットが映し出される。

その後で、砂嵐の映像へと切り替わる。

そこには、砂嵐の残像のみの人物が何かを語り出していた。

そいつは、前置きのように、言った。

俺は、映し鏡だ、と。

十

「よう、ホーリー・ドラゴンの真似事でちょっと電波ジャックをさせて貰ったぜ」

それは、砂嵐の残像に覆われていた。

顔は見えないが、確かに残像の奥には、誰かがいた。

アイーシャは、その動画を、文明レベルの高い街の中で、機械兵をコンピューターに接続して、ネット中継を通して遅れて見ていた。

生中継だったらしいが、録画されている。

ネット内で、色々な情報が囁かれていた。

アイーシャは舌を打つ。

「俺は先日、アサイラムに侵入した賊だ。ケルベロスを襲った奴だ。なあ、これを見ている奴らの中で、俺達を憎んでいる奴らいるだろ？ そいつらに伝えたいんだけどな」

声はボイス・チェンジャーを使っているが、明らかに知っている奴だ。

「俺達、探しているんだろ？ 俺らのとこのボスが、ある壊滅した街の一つでお前らを待ってやるって言っているぜ？ 人数を集めて襲って来いってよ。まとめて相手してやるってな？」

ざざっ、と、何度も、映像が揺れる。

時には、真っ黒な影が画面いっぱい広がる。

「処で、みなが知っての通り、街中を壊滅においやった俺達のメンバーの一人である、グリーン・ドレスって女が、俺達ダートを裏切った後、他のダートのメンバーに殺された。そのメンバーの名前はヴェルゼ、って言うんだが。そのヴェルゼって男も、元ダートのメンバーに殺された。そいつは、アイーシャって言う」

アイーシャは、自分の顔写真が、大きくスクリーンの中に映し出されている事を知る。

「で、アイーシャ、何処に隠れているか知らねえが。討伐隊に紛れて、今から教える場所まで来いよ。そこで、俺と果し合いをしねえか？ で、他のこれを見ている連中に告ぐけど、もう一度言うが、俺達のボスが直接、お前らと戦ってやるってよ。戦力を募ってきやがれよ、とっても楽しみにしているからさ」

砂嵐は揺れる。

「場所は『マシーナリー』っていう街だ。以前、グリズリーと冷戦状態にあった場所だが、もう壊滅しちゃったから。そんな政治状況の事はどうだっていいな？　そこで待っている。そうだな、夜中だ。日付は.....」

そう言って、画面の砂嵐の向こうにいる声は、日時と指定した国の、大体の待ち合わせ場所を述べていく。

「じゃあ、これを見ている俺達を憎んでいる奴ら、健闘を祈っているぜ」

そして、スクリーンが途切れた。

一体、どのようなルートを使って、再び、TVがジャックされたのだろうか。

アイーシャは勘繰る。

もしかして、新たに増えたメンバーの中で、そのような権力を操作出来る事に長けた者がいるのか.....？

十

レウケーとリレイズの二人が、討伐隊のメンバーの選定を行っていた。

彼らの眼に止まらなかった者達は討伐隊から外される。逆に言うならば、それ程に、敵との戦いはシビアで、並の実力者ならば話にならないとの事だった。

ダートのメンバーの一人が流した映像を解析して、居場所を突き止めていた。

トラップの可能性もあるが、そのリスクを負ってでも、ダートを戦う可能性に賭けるべきだった。

最初、百名以上の者達が、それぞれ怨嗟の言葉を吐き散らしながら、復讐心や正義感を掲げて、討伐隊に加わろうとしていたが、選考の結果、残ったのは十数名程度だった。

レウケーいわく、この人数でも、多く拾ったとの事だった。

ペイガンも何故か、選抜されていた。

それは、彼が見せた、剣術がレウケーの眼に止まったからだだろう。レウケーは、ペイガンに対して、良い使い手になるだろう、と述べてくれた。

『マシーナリー』。

そういう名前の地区だった。

グリーン・ドレスの襲撃にあった場所の一つだ。

アサイラムを襲撃した、セルジュという者が、アイーシャという女に布告する為に選んだ場所だ。

レウケーと、リレイズ、そしてホビドーの考えによれば、おそらくは、間違いなく、セルジュ以外にもダート側のメンバーが現れるだろう。それくらいは予測出来る。

可能ならば、魔女ルブルを倒したい。もし、司令塔が倒れば、ダートという組織はどうなっていくのだろうか。少なくとも、かなりの心理的な打撃は与えられるんじゃないかと、レウケーは踏んでいた。

十

赤い天使が、夢にまで出てくる。

その輪郭が、焼き付いて離れない。

真っ黒な焼死体が瓦礫に押し潰されながら、横たわっている。生々しい肉の断片図が見えた。何故だか、とてつもない程に彼はそれに、美を感じてしまう。

皮膚が焼け爛れて、ガラスや木材の破片が身体に刺さっている人々が苦しみながらのた打ち回っていた。彼は、それさえも天の国の光景にさえ思えてきてしまった。

気付くと、ペイガンは泣きながら、毛布の中から顔を出していた。

不思議な夢だった。

多幸福感に包まれていた。

自分が人間である事を、忘れてしまいそうだった。

とてつもなく、空を浮遊したり下降したりする夢に襲われる。

怖過ぎる何かに喰われてしまいそうだ。

十

どうしようもないくらいの怒りが、討伐隊のメンバーの中に渦巻いていた。

身内や友人を殺された怒りで溢れている。

マッシュという男が、特に怒声を上げていた。獅子頭のスロープが、彼を諫めていた。

悲しみと怒りが、抑え切れないまでに充満している。

余りにも数え切れない人間が、ダートのメンバーによって無慈悲に殺されたのだ。

ひたすらに、残虐に殺し返す事ばかりを、みな口々に叫び続けている。もはや、その怒りは、周囲の者達にまで向いていた。みな、強いストレスに晒されている。このままだと、いつ避難民同士で殺し合ってもおかしくなかった。

一触即発だ。

レウケーの言葉を思い出す。レウケー自身が、アサイラムの所長であるケルベロスと話していた言葉だ。

これは、伝染病なのだ、と。

憎悪や怒り、悲しみが病気のように広がっていつているのだと。

もはや、その時点で、人類は、ダートに敗北しているのだ、と。

みな、正気を保ってられないのだ。

マッシュは、ボルダという男と意気投合していたみたいだった。ダートの連中を、散々、ぶちのめして、殴り、蹴り殺してやる、と意気込んでいた。

十

ステルスを搭載させたヘリを使って、みな、この地にやってきた。

気合付けの怒声が飛び交っている。

マシーナリーの道路跡地。

そこに、ダート討伐隊のメンバーが何名か揃っていた。

スロープが先頭を率いていた。

シェルター内から集めた強力な能力者として、ファタラとガンギャの二人が指名されていた。

二人は、スロープに付いていた。

アサイラム所長秘書兼ボディー・ガードでもあるリレイズの側近の一人に、ゲルググという男がいた。彼は、ライフルを手にしていた。どうやら、彼はスナイパーらしい、全身を黒い服と防弾チョッキで覆い、顔に覆面を被っていた。

メンバーは、分断されていた。

シェルター内で募った討伐隊以外にも、各地の軍人達も集まって急遽部隊編成を行っていた。

部隊は、四つの隊列に分けていた。

突撃班、狙撃班、爆撃班、そして救護班の四つだ。

全部で、六十名くらいになっただろうか。

ペイガンは、救護班に入れられていた。スロープは、一番、必要な部隊だと繰り返し、みなに伝えていた。

スロープは討伐隊の司令塔として、救護班に回っていた。どうやら、彼は突撃班などの、攻撃部隊には入らないみたいだった。

突撃班の部隊長は、かつて軍人だったラザー・ホーンという男だった。

彼は筋骨逞しく、こめかみに幾つも傷があった。かつては、少佐にまで上り詰めた男らしい。見事にまでに禿げ上がっていて、頭には異形の傷を抱えているこの男を、スロープは買っているみたいだった。

道路跡地の場所は、ハイウェイだった。

軽自動車やダンプカーの残骸が、幾つも転がっている。

グリーン・ドレスの手によって、安々と破壊された場所だ。

「どうなのかな？ この戦争は」

「さあな、何が出てこようが俺の拳でぶちのめすだけだ」

突撃班に入った、ボルダとマッシュは、そんな風に話をしていた。

ペイガンは、救急箱や小型銃などを手にして、彼らの話に聞き入っていた。

十

ラザー・ホーンを中心とした突撃班は、通信機で、スロープの支持を仰ぎながら、ハイウェイを、ジープで慎重に進んでいた。

ハイウェイの外の山道では、狙撃班が移動していた。

突撃班は、偵察も兼ねている。

相手からの宣告によれば、夜の時間を指定してきた。

本当に現れるのか分からない、といった疑心暗鬼を募らせる者もいた。しかし、あれだけ派手に行動を起こしてきた者達だ。レウケーは、おそらくまず待っているだろう、と言っていた。

突撃班は六名だ。あくまで、囮として戦い、狙撃班が仕留める、という戦略だった。

しばらくして、ジープのライトで道を照らし続ける。

一時間弱、夜のハイウェイを進んでいた頃だろうか。

メンバーの一人が、軽く口笛を鳴らす。

宣戦布告の通りだった。

きっと、待ち伏せでもしていたのだろう。そいつは、まるで当たり前のように現れた。

突撃班の者達は、息を飲んでいて。

まるで、友達と約束の場所で待ち合わせでもしていたかのような、現れ方だった。

要するに、.....隙だらけなのだ。

そいつは、漆黒のドレスを身に付けた、腰まである黒髪の女だった。

彼女は、道路の中心で、ブーツの靴紐を直しているみたいだった。

そして、おもむろに、女は通信機を取り出して、誰かと話し始める。

「ねえ、ミソギは色々、やってくれるんでしょう？ いいわねえ、それはとっても素晴らしいわね」

「ん、ああ。そうだ、貴方達、待っていたわよ？ セルジュとメアリーの代わりに、私が出向いちゃった」

突撃隊は、ジープを停めて、息を飲んでいて。

マッシュは、拳を強く握り締めていた。

「お前は何だ？」

ラザー・ホーンがジープを降りて、訊ねる。

「あら？ 知らないの？ 私はダートのボス、ルブルよ。私がダートという組織を率いているの。よかったじゃない。貴方達、ダートを倒しに来た人達なのよね？ 私の首は此処にあるわよ？」

そう言って、ルブルと名乗った女は、自分の首を手首で、刎ねる仕草をする。

「そうか、俺はラザー・ホーン。元軍人だ。ホーンと呼んでくれ.....。女、お前が本当に、あれだけの破壊を齎した者達の首謀者なのか.....？」

「そう言う事になるわね？ あら、悔しい？ 腹立たしい？」

ルブルは、自らの唇に人差し指を押し付けて、はにかむ。

ホーンは、傷だらけの禿頭の頭を搔く。

「憎いが。.....俺や、俺の仲間達は、お前らを八つ裂きにしてやりたいって思っているが.....。なあ、まだ分からない。お前らは.....」

「能力者は、余り見た事の無いって感じの顔で。でも、多分、戦争慣れしてそう。ねえ、死体は見慣れている？ 犠牲者の悲鳴は？ 知り合いが目の前で肉片になるシーンは？」

マッシュと、ボルダの二人が、ジープから降りる。

そして、他の者達も次々にジープから降りていく。

ルブルと名乗った女は、風に靡く黒髪を指先で撫でていた。

そして、彼女は、何かを思い出したのか掌を叩く。

「どうせ、暴れ続けた、イゾルダと、グリーン・ドレスの顔くらいしか貴方達知らないんじゃないの？ 私はまあ、丸腰なんだけれども。まさか、いつでも、銃で殺せそうって思っている？」

彼女は、自分自身を抱き締めるかのように、両腕を組んだ。

「処で、貴方達って、多分、切り込み隊長でしょう？ この暗闇の中に、遠くから私を攻撃している人達、ちゃんと配置してあげた？ 他にも、貴方達、手術で、体内に爆弾でも入れてみる？ 他には、そうだ。そのジープに、この辺り一帯を破壊する爆弾でも、実は積んでいたりする？」

ルブルは、ぺらぺらと、意表を付いてくるような事を言った。

ホーンは、呆けたような顔をしていた。

彼は、此処に来る直前に、医者に相談して、自らの心臓が停止したら発動する小型爆弾を埋め込んでいたのだ。

戦術が、ある程度、バレてしまっている。

狙撃班達は、このルブルという女を、今、ライフルなどで狙っているだろう。他にも、遠距離攻撃が出来る能力者達が何名かいる。

ルブルは、ある程度、見抜いてしまっている。

此方側の戦略をだ。

「どうしたのかしら？ ほら、私は丸腰よ？」

そう言って、ルブルは両手を広げる。

マッシュは怒りを隠せないみたいだった。

彼は、既に怒りの限界が達していたみたいだった。

マッシュは、ホーンの指示を待たずに、ルブルに向けて拳を振るっていた。彼の拳から、炎を纏った爪のようなものが生えていた。彼の両眼は、肉食動物を彷彿させるものへと変わっていた。

ルブルに届く事は無かった。

ホーンと、それから、他の者達は絶句していた。

突如、地面から現れた、何かの生物によって、マッシュの腹と胸は貫かれていたからだ。

「うーん、ねえ、こんな簡単な挑発に乗っちゃ駄目でしょう？」

魔女の口元は笑みを称えていた。

地面から這い出してきたのは、十本脚はあろうかというサソリの化け物だった。その化け物が、二つの槍のように、異様に長く伸びたハサミによってマッシュを貫いていたのだ。尻尾は、四つもあった。

全長は、五メートルを有に超えている。

「ああ、ちなみに、これ私のゾンビだから。これくらいは、倒そうよ？ 私を討伐しようとして

いる、裏切り者のアイーシャのゾンビは、これくらい簡単に殺せると言うから」

魔女は笑い続けていた。

次に動いたのは、ボルダだった。

彼は、異常な速度の蹴りを、ルブルへ向けて放っていた。

すぱん、という音がして。

ボルダの両脚は、吹き飛んでいた。

サソリの尾の一つは、刀剣へとなっていた。

そして、蒼褪めた顔のボルダの頭を、追撃として毒針になっている尾で叩き潰していく。

「あら、他には来ないのかしら？ 私が、私達が憎いんでしょう？ 殺したいんでしょう？ ずっと、恨んでいたんでしょう？ 大切な人達の想いが強いんでしょう？ 怒りを力にして、戦おうと立ち上がったんじゃないの？」

ルブルは、ただただ楽しそうに笑っていた。

突撃隊は、ホーンを含めて、残り、四名だった。

更に、巨大サソリの他に、地面から大ムカデのようなものが這い出してくる。

「まだまだいるけれども、此れ位は倒せるわよね？」

ホーンは他の者達に叫んでいた、逃げろ、と。

気付けば、大ムカデが動いて、討伐隊メンバーの一人の頭を食い千切っていた。残りの二人は急いで、ジープへと戻っていた。

大サソリが動いて、ジープに乗ろうとしていた男のうち、一人の背中を四つある尾の一つで刺し貫く。

ジープは、すぐにアクセルが踏まれ、その場から去ろうと動いていた。

ルブルは完全に遊んでいた。

サソリとムカデの二体は、その場から走って逃げるジープを無視して微動だにせずにした。

ホーンは、血が滲むまで唇を噛んでいた。

「お前、命を何だと思っている？」

「さあ？ 私は死体が美しいと思っているから。生きている人間に興味なんて無いの」

ホーンの両腕から、角のようなものが生えてくる。

彼は、大ムカデに掴み掛かり、そのまま頭を握り締める。

「ルブルと言ったな、人間を舐めるなっ！」

「あらあらっ、頑張ってるねえ？」

魔女は地面に腰を下ろして笑い続けていた。

ホーンは、大ムカデの首をもいでいた。

そして、全身から熱気を発していた。

「あらあら、凄いじゃない。やれば出来るじゃない？」

そう言いながら、魔女は両手を叩いて喝采を送る。

サソリの方は何故か、微動だにしない。

ホーンは、ルブルの顔へと腕から生えた角を突き刺そうとする。

すると、サソリが動き、四つある尾の一つを動かして、ホーンを弾き飛ばす。

「こっちは、倒せるかしら？」

完全に遊んでいた。

もはや、話にならないくらいに実力差が開いてしまっていた。

「狙撃班っ！」

ホーンは必死で叫ぶ。

作戦通りならば、ホーン達が囷になっている間に、追尾していた狙撃部隊が、敵を狙い撃ちにして殺している筈だった。その中には、風の刃や炎の弾丸を撃ち込める能力者もいる。

「あっ、そうだ」

ルブルはくるくるっ、とダンスでも踊るかのよう回る。

ホーンが、必死で、サソリの頭も叩き潰した頃だった。

「えっと、周りにいる人達なんだけれども。何か、邪魔だったから、先に手を打っておいたのっ！」

ルブルは、親指で空を指す。

ホーンは、迂闊にも尻餅を付いていた。

それは、空飛ぶ怪物だった。

巨大なコウモリの身体に、蛇の頭を幾つも生やしていた。

それは、蛇の頭の数だけ生首を啜っていた。顔に見覚えがある、みな、狙撃班の者達だった。

「うああっ、うあああああああっ！」

「ねえ、もうちょっと、強い人材、探して来ようよ。私達が憎いのは、分かるんだけどね？」

ルブルは詰まらそうな顔で、ホーンを見ていた。

「全然、お話にならないじゃない。イゾルダとグリーン・ドレスで学ばなかったの？ 貴方達は、何で、こんなに愚かなのかしら？」

ルブルは、人差し指を地面へと向ける。

「どうせ死ぬから、私の能力、ちゃんと教えて上げるけど。冥土へのお土産としてね。私の能力『カラプト』は、生き物の死体を好きなように再構築するの。この可愛い怪物達、全部、幾つもの死体を寄せ集めて構築したんだけど、ちなみに」

ルブルは、地面を指す。

「そもそも、この辺り一帯の足場が、死体で出来ているのよ？」

ホーンは、宙に浮いていた。

自分が立っていた地面が、崩れていったからだ。

下を見ると、大きな口だけの怪物が、彼を飲み込もうとしていた。

ルブルは、残った足場に一人立ち、手を振りながらホーンを見下ろしていた。

ホーンの体内にある爆弾は、怪物の口内の中で爆裂する。

ルブルは黒煙が立ち込める地面から眼を離すと、両腕を上げて屈伸運動を始めた。

「さてと、もう少し、楽しめないものなのかしら？」

どんなに憎しみをぶつけてきたとしても。

どれ程までに、大切な人達の死を購おうとしても。

圧倒的なまでの実力差を埋める事なんて、出来はしないのだ。

ふいに、ルブルは真剣な顔になる。

「アイーシャは多分、こんなものじゃないだろうなあ。メビウスも……」

考え過ぎかもしれないが、もし、こいつら全員が捨石で、此方の能力のデータを採集する戦略だとするならば？

第十五章 死と絶望が行進していくのだから

スロープは、突撃班と狙撃班の二つへと連絡を取ろうと通信機を弄り続けていた。

どちらからも、通信が途絶えてしまっている。

スロープは獅子頭の額を押さえながら、項垂れていた。

ペイガンは、そんな彼を見て、不謹慎にも滑稽さを感じてしまう。

「みなに伝えるが、突撃班と狙撃班の二班からの連絡が無い。40名近い者達が帰ってきていない、という事になる。……残るは、狙撃班から敢えて分けて作った爆撃班だが、俺達は彼らに期待するしかない。強力な能力者は、その班に入って貰った。爆撃班には、そう、ファタラとガンギャという二人の強力な使い手がいる。もし、彼らが敗北したならば、俺達は迷わず、撤退するぞ」

スロープは苦渋に満ちた顔をしていた。

救護班は、十名近くを割いている。

そもそも、勝てる可能性が薄い事を前提に戦いを挑んでいるのだ。

それでも、避難シェルター内の怒りを静める為に、そして、大切な人々を失った者達の情緒を組むというレウケーの意思から結成されたのが、ダート討伐隊だ。

所詮は、寄せ集めなのだ。

スロープは、勝てないと思っていた。

あの、ニーズヘッグを見た時に、確信してしまっている。彼の上司のレウケーもそうなのだ。グリーン・ドレスという女と対峙して、絶対的な実力差というものを痛感してしまっている。

各地では、イゾルダの生体兵器が未だ暴れ回っている。その駆除を何とかしなければならない。

それでも、……それでも、微かな希望を持って、人々はダートとの決戦に挑もうとしているのだ。

「貴公は、レウケーさんから、気に入られているだろう？」

ふいに、ペイガンは獅子頭から言葉を振られて、息を飲む。

気に入られている？ 自分みたいな奴がだろうか？

「みな、倒したいだろうからなあ。悔しいし、勝利したいだろうなあ。しかし、我々は本当に、脆いな……………」

スロープは、通信機を弄っていた。

そして、通信機に向けて喋り始める。

「ファタラ、ガンギャ。目に物を見せてやりたいのだろう？ もし、貴公達が死ねば、我々はみな、即座に撤退するが、いいか？」

通信機の向こう側にいる者は、覚悟を決めたような声を上げていた。

スロープの表情は重々しかった。

ペイガンは、確信する。

取り外した翻訳機を使わずとも、表情を見れば理解が出来る。

ああ、これは負けて帰るんだろうなあ、と。……………。

十

マッシュは、腹と胸を抉られながらも、なおも生きていた。

次々と仲間が殺されていった。

彼は、地面に倒れながら、血反吐を吐き続けていた。

隊長のホーンが、変形した地面に食べられてしまった後、マッシュは涙を流していた。

次第に、肉体の血は止まっていく。

マッシュは、立ち上がる。

再生がようやく、完了したのだった。

「ルブルと言ったか」

魔女は、彼が生きていた事に気付いたみたいだった。

「お前は、本当に人間か？」

「あら？」

ルブルは、へらへらとした顔をしていた。

「さあ？ もしかして、大昔に人だったかも。でも、どうでもいいじゃない。私は化け物、悪魔の類、その理解の仕方でもいいんじゃないかしら？」

マッシュは、どんな罵倒も、この女の耳には届かない事を理解する。

この女は、自分を人だとも思っていない。

だから、人なんて紙屑みたいにしか思っていないのだ。

「俺は死に掛ける度に、強化していく肉体を持っている。そして、俺は怒りの力によって、拳の速度が上昇する。俺は怒りや闘志によって、強くなる能力者だ」

「あら、そう。凄いじゃない？」

「俺はお前ら化け物共を殺す、人類の怒りそのものになりたい……」

マッシュの全身から、灼熱のオーラが噴出し始めていた。

「あら？ 人間なんて愚かで脆いだけのものよ？ だから、私は死体にしてあげるの。死体なら、とっても綺麗で素敵な素材になるから」

ルブルは、今にも、踊り出しそうだった。

実際、軽く両脚でステップを行っていた。

「人間なんて、さっさと止めてしまえばいいじゃない？」

ルブルは哄笑する。

人間は、そんなに美しくない。

生命は、そんなに美しくない。

人々の望む幸福なんてものは、そんなに面白いものなんかじゃない。

その眼は、そう言っている。

どうしようもないくらいに、その声は、冷徹さを孕んだものだった。

地面から突き出した、昆虫の脚が、マッシュの腹を突き刺す。彼は、腹を貫かれたまま、脚を両手で受け止める。

マッシュは、あらん限りの彷徨を発していた。

自らの腹に突き刺さった脚を、引き千切る。

地面から、頭が二つあるカミキリムシが飛び出してくる。

マッシュは、拳で、その怪物の頭を即座に砕いていた。

そして、そのまま勢いを殺さずに、ルブルの顔面を掛けて、拳を振るっていた。

マッシュの拳が、空へと飛んでいく。

彼は、上半身と下半身も、切り分けられていた。

地面から新たに姿を現した、カマキリが彼の腕を飛ばし、更に現れたカミキリムシが、彼を二つに分けていたのだった。

マッシュは、崩れ落ちる。

「あのね、力押しで私に勝とうとするの止めた方がいいわよ？ 怒りは状況を見失わせる。ねえ、貴方は、まだ再生出来るのかしら？ 何なら、私のペットの餌になる？ 楽に殺して上げてもいいのよ？」

マッシュは、笑っていた。

ルブルは、カマキリに命じて、彼の首を落とすように指示する。

彼は、血反吐を吐きながら、内臓を撒き散らしながら、強い意志の灯る眼でルブルを見ていた。

。

「地獄へ、お、落ち、れ……………」

二秒だろうか。

ルブルが気付くのが遅れていたら、だ。

ルブルは、振り返る。

後ろから、炎を纏った拳が、彼女の腹へと目掛けて飛んできたのは。

ルブルは、咄嗟に、それを避けていた。

宙を飛び跳ねていた、マッシュの肉体から切り離された拳は、大カマキリを弾け飛ばして、そのまま、しばらく低空飛行を続けて、そのまま燃えて炭へと変わる。

ルブルは鼻で笑った。

「ふふっ、貴方、私を殺せていた、かもね？」

マッシュは、どうやら、もう眼が見えないみたいだった。

しかし…………。

彼の残った左腕が、ルブルの右足を掴んでいた。

「のこ…………、力、爆発、させ…………。殺して、や…………る」

ルブルは、…………命の危険を感じていた。冷や汗が、流れ続ける。

「嘘…………？」

「死ぬ、よ…………、クソ野郎……………」

彼の肉体が、弾け飛ばそうとしていた。ルブルは、彼の能力は、おそらく自身に致命傷を与える

だけのエネルギーを有しているのだろう。

ルブルは。

.....追い詰められて、切り札を使わざるを得なかった。

彼女は、地面から何かを取り出す。

「クルーエルッ！」

彼女が取り出したのは、小さな男の子の人形だった。

それが、破裂しようとしているマッシュへと近付けられる。

「やれっ！」

人形から、灰色の煙が吐き出されていく。

マッシュは、.....止まってしまっていた。

心臓の鼓動も、爆発の力も、.....何もかもがだ。

怒りを強さに変えて戦おうとした男は、物言わぬ石像と化して、地面に転がっていたのだった

。

ルブルは一息付いて、地面に横たわる。

そして、彼女は、彼に賛辞を送る。

「凄いじゃない？ 人間の底力、見せたんじゃないの？ 私に弟のクルーエルを使わせるなんて。ほんの少し、貴方が、もうちょっと、ほんの少しだけ、強かったなら。私を倒せていたかも？

でも、悲しいものねえ？ 何一つとして、何も出来ずに、死んでいくのって？ 貴方の怒りも憎しみも、全て無為だったわね？」

そう言うと、ルブルは通信機を取り出して弄り始める。

「そろそろ、ミソギ。助けてくれないかしら？ 私の作り出すゾンビ、.....どうにも、見かけは強そうだけれども。実際は、脆いのよねえ.....」

気だるそうに、彼女は言う。

「このままじゃ、アイーシャを倒す事が出来ない。あの子じゃ、クルーエルで嵌める事も出来ないし。余裕いっぱい、雑魚を返り討ちにしても、ねえ.....」

ルブルは、ふうっ、と、溜め息を吐く。

一步間違えれば、そのまま敗北してしまっていた可能性はある。しかし、それでもなお、ルブルは平然と超然とした態度をまるで崩さなかった。

しばらくして、敵の討伐隊が来た場所とは反対方向から、大型トラックが現れた。

そして、そのトラックを運転していたのは、普通の生きた人間だった。

「あら、貴方は.....」

トラック運転手の男は、積荷を開けてやる、と言う。

十

救護班の下に、突撃班のジープが戻ってきた。

男が一人だけ乗っていた。彼の顔は蒼褪めていた。

スロープはそれを見て、息を飲む。

救護班のみなは、少し困惑した顔をしていた。どうするべきか、判断に迷っているのだろう。他の者達はどうしたのだろうか？

スロープは、斧を手にしていた。

「お主、これ以上、近寄るなよ。何があったか知らぬが。済まないが、死んで貰うぞ？」

「おいっ……」

男は、ジープから降りる。

「何だよ、何で、冷たいんだよ。おい、俺は一人逃げ帰ったけどさあ。ホーンさん達を置いて逃げてきたけどさあ。それはあんまりじゃねえか、怖かったんだよ……」

男の両腕は無かった。

代わりに、彼の腕にはヒルのようなものが張り付いており、それがハンドルを運転して、ここまで来たのだ。

彼の背中が裂けていく。

「逃げるぞっ！」

スロープが叫んだ。

男の身長が伸びていく。彼の全身は、数メートルの大きさへと変わっていく。脊髄が伸びているのだ。彼の肉体は、背骨が露出して、蛇のような姿へと変わっていた。彼は口から、長い舌を伸ばしていく。

いつの間にか、この男の両腕は、ある道具へと変わっていた。身体の中に仕込まれていたのだろうか。それとも、ヒルが姿を変えたのだろうか。ペイガンは、走っていた。

男はひゅうひゅうと、妙な金切り声を上げ続けていた。

逃げ帰ってきた、突撃班の男の両腕が、チェーン・ソーへと変わっていた。刃が回転している。救護班のメンバーの一人の頭が、回転する刃によって割られていく。更に、別の物の首を落とす。そして、その死体の腹へと刃が潜り込んでいく。異形へと姿を変えられた男は口から涎を垂らし続けて笑っていた。

スロープは通信機を弄りながら、逃げ続けていた。彼は逃げながら、大斧を、化け物と化した男へと向かって、放り投げる。

男の身体は、斧で縦に割られる。

スロープは立ち止まって、叫んだ。

「我々の中で、今、殺された者は何名だ？」

救護班のメンバーの一人が、二人です、と告げる。

スロープは再び、叫んだ。

「爆撃班に今、連絡を取っている。我々は逃げる、と。元々、爆撃班は自殺志願者ばかりだった。だが、俺は彼らを説得しようと思う。俺はレウケーさんの命令で此処にいるが。これ以上は付き合い切れない。何故なら、“無駄死”にばかりだ。貴公達に言いたい。命は大切にしたい。まだ、ドーンは負けたわけじゃないからなっ！」

スロープの心は、完全に折れてしまっている。

巨体に似合わず、臆病なのかもしれないなあ、とペイガンは思った。

「俺は臆病者に見えるか？」

まるで、考えている事を見透かされたように、ペイガンは獅子頭からそう聞かれる。

「さあ、俺には分からない」

「今、戻ってきた男……。シェルター内で親しくなった者だった。元々、この作戦は成功率が低過ぎた。繰り返し言うが、元々、討伐隊を募る事自体が無謀だった。しかし、親しい者達を殺された者達の怒りが堰を切ってしまうていた……。ドーンは負け続けている。どうにもならない」

スロープは、通信機を弄り、通話相手に怒鳴っていた。

ファタラ、ガンギャ、の固有名が呼ばれる。ペイガンにも、その者達をスロープはかなり買っているのが分かる。

それは、突然だった。

化け物化した男の死体が蠢き始める。二つに分けられたその男の内臓が蠢きながら、怪物を形成し始めていた。そいつは、スロープを狙っていた。

スロープは通話相手と口論を続けて、それに気付いていない。

ペイガンは、どうするべきか、焦る。

銃声が鳴り響いた。

スロープは、新たに現れた者に賞賛の眼差しを送っていた。

死体の中から出てきた怪物は、爆裂し、灰へと変わっていく。

銃弾を撃ち込んだのは、全身を黒い戦闘服に身を包み、顔をマスクで隠した男だった。

「ゲルググ……」

スロープが、男の名を呼ぶ。

「通話、変わっていいかい？ スロープの旦那」

ゲルググと呼ばれた男は、奪うように獅子頭の男の手から、通信機を借りる。

「おい、俺っちもそこに向かうぜ。全員で化け物の親玉を仕留めよう。俺達は復讐者だ。なあ、失う者なんて、もう何も無いんだろ？」

そう言いながら、彼は通話を切ると、煙草に火を付ける。

「じゃあ、俺っちは行くぜ。スロープの旦那、そこのガキや他の奴らも連れて逃げな。頑張ってる、犬死にしてくるからよ？」

「ああ、……………」

スロープは、もう何も言えないみたいだった。

十

トラックは去っていった。

他にも、“手配”はしているらしい。

それは、幾つもの収納ケースだった。

ルブルは、ケースの中をまじまじと見た後、ううん、と唸っていた。

「ミソギ、私、さっき化け物って言われたけど」

彼女は鼻を鳴らす。

「いいの？ 貴方、普通の人間じゃないの？ 私達に加担して、いいの？ それとも、これは貴方の利益の為？ メアリーから聞いているんだけど。一度、会って話したいわね。……………」

ルブルが指を鳴らす。

すると、辺り一帯の死体達が動き出す。

人型に変えるつもりだった。その方が、使いやすいだろうから。

「おい」

何者かが、彼女を呼び止めていた。

「あら？ また、遊んでくれるの？」

ルブルは唇を歪める。

今度は、男が一人だった。

彼は、金色の髪を風に靡かせている。全身に、まるで鳥の羽のような飾りを纏っていた。

「俺はファタラ。お前のせいで、俺の弟は死んだ。両親もだ」

「あら、そう。それはお可哀相ね？」

ルブルは不敵に笑う。

ルブルは、気付くと、全身を宙へと浮かせていた。

どうやら、腹の辺りに拳か何かを当てられて、吹っ飛ばされているのだという事に気付く。

彼女は、地面を転がる。

ばちりい、ばちりい、といった激しい音が鳴り響く。

「死んで貰うぞ？ 俺の『クラッシュ・シュート』で心の臓を止めてやる」

彼の全身は発光していた。

ルブルは、すぐに理解する。

こいつは、おそらくは、電撃を扱う能力者なのだ。そして、それなりの手練だ。

ファタラの前に立ちはだかる者がいた。

そいつは、両手に拳銃を構えた大男だった。

大男は、ファタラへ向けて、銃を撃ち続ける。

「それ。ある男からのプレゼントなんだけど、色々と兵器一式くれるんだって。そうすれば、その男の利益になるらしいから」

ルブルは立ち上がって、服の埃を落とす。

彼女は、少し冷や汗をかいていた。

そして、おもむろに、収納ケースの下へと向かっていく。

「ねえ、これサンプルらしいんだけど。貴方に聞きたいけれども、貴方は言うのかしら……………？」

ファタラは、電撃で、ルブルの作り出したゾンビを焼き払う。

大男のゾンビは地面に倒れる。

ルブルは、収納ケースから取り出した物を、ファタラに突き付けるように、見せていた。

「あのね。最初、兵器をくれる、って言うから、鼻で笑ったの。銃や爆弾でもくれるのか、って。そんなもの、今更、役に立つのかな、って。グリーン・ドレスが裏切って、死んだ穴を埋める為に、仕方無いか、って。『武器商人』に私達のメンバーに入って貰ったんだけど……」

ルブルは、少しだけ、おぞましそうな顔をしていた。

それは、瓶詰にされている、何か、だった。

ファタラは、首を傾げている。

「この瓶の中に入っているものは、『天然痘ウイルス』みたい。……銃や爆弾よりも、よっぽど、悪質……。発症すると、死亡率40パーセントくらい。それから、これだけじゃない。所謂、ペスト菌、炭疽菌なども、そのケースの中に入っている……」

彼女は、懐から手紙を取り出した。

「“好きなように使え”って書かれているわ。“何に使って、どうなろうが俺の知った事じゃない。俺の金が増えればそれでいい”だって。貴方達の世界で金の亡者、っているじゃない。この男、本当に、狂っているんじゃないのかしら？」

ファタラは、しばしの間、呆然としながら、彼女の話聞いていた。

「私は魔女で、何百年も生きているけれども。この武器商人、っていう異名の男。能力者で無い普通の人間だけれども、本当に、自分の金儲けの為になら、幾ら他人が不幸になろうとどうだっていいみたいよ？ 貴方達の世界で、お金ってそんなに大切な物なのかしら？ 彼、まだ直接は会った事無いけれども、“戦争は金になる。良い事だ”が口癖らしいわね……」

ルブルは、少し困惑したような顔をしていた。

ファタラも、彼女が一体、何を言っているか判断に困っていた。

「私を倒しに来たんでしょう？ 仇討ちがしたいんでしょう？ でも、全て、私達の目的に加担している、って事を理解していないのかしら？ メアリーが望んでいるの、人間は憎悪によって生きるべきだ、って。憎しみの感情をぶつけ合う瞬間においてこそ、人間は美しいんだって。貴方が私を殺したいという感情を、私達は肯定する」

彼女は飄々とした顔をしていた。

「処で聞きたいけれども、貴方達は、私やダートを殺す事って意味あるのかしら？ ねえ、イゾルダは自分を実験体として生んだ人類を憎んだ。ヴェルゼは、生まれた時から奴隷だった。武器商人は、貧困国で凌辱されながら育った。ねえ？ 貴方達が、私達を生んだんじゃないのかしら？ 私は見届けただけなのよ。行動を起こしているのは、彼らだけれども、私は、集めているだけだから。全ての人類は、平等じゃないんでしょう？ ねえ、貴方……お名前、何て言ったかしら？」

「ファタラ、だ……」

彼はルブルの異様なまでの話に気圧されて、攻撃出来ずにいた。

「戦争は復讐によって広がっていく。人類ってのは、平等じゃないのよね？ 私を殺す事が、私達を殺す事が、貴方達の人生の目的になっているのかしら？ 完全に、掌の上で動かされているって、どうして、気付かないのかしら？」

ルブルは腹を抱えて、笑い続けていた。

「もう、侵略を止めてもいいのよ？ 全ては完成してしまっている気がするから。貴方達の存在が、きっと、メアリーを喜ばせる」

そう言うと、ルブルは次々と、地面を動かしていく。

「もう、私は貴方を殺すつもりは無いわ。拾った命、大切に使えばいい。ねえ、私達をずっと憎悪しながら、ひっそりと生きるのも、案外、楽かもしれないわよ？」

そう言うと、彼女は、彼に興味を無くしてしまったみたいだった。

ファタラは、全力の電撃を両手から、生み出していた。

それを、ルブル目掛けて、撃ち込もうとしていた。

ルブルは笑っていた。

もはや、自分の命さえ顧みない程の高揚感に包まれていた。

彼は小さな、稲妻を作る中で、思考がめまぐるしく回転していた。

それは、赤い炎の翼を生やした女に焼き払われた街の事だった。彼は、確かに彼女の両の瞳を見ている。あれは支配欲に取り付かれた者の瞳だった。

ファタラは、思春期の頃を思い出した。彼は傲慢な人間だった、他人を傷付けても、良心が痛まず、むしろ自らが傷付けて苦しむ相手を余計に追い詰めるような人間だった。スクール内において、彼はある弱い少年を、仲間達と共に追い詰めていた。その少年が陰気で、ひ弱そうだと認識して、その少年から金に金をせびり、殴り蹴り、毎日、嘲笑の言葉を放ち続けた。その少年の物を破壊し、性的に侮辱し、恋路を潰し、人格否定を繰り返し続けた。ついにその少年はスクールに来なくなった。彼は仲間達と、その事に関して、ずっと笑っていた。数年後に、その少年が家から外に出られなくなり、自宅で首を括っていたという事実を知った時も、ぼんやりと聞いていただけだった。

スクール時代、彼は小さな世界の中における権力の頂点にいた。そして、社会の中で、少しずつ丸くなっていった。自分の暴力性や破壊衝動、支配欲、それらはまるで爪や牙を少しずつ削がれていくように、彼は穏やかな人間になっていった。

ある日、彼の街が、赤い炎の翼を生やした女に焼かれるまで、彼は暴力というものを忘れていた。支配して追い詰める、という感情を忘れていた。

あの女の顔を見て、あの女の表情を見て、あの年齢の頃、鏡に映る自分の姿を思い出してしまっていた。

街が焼かれ、大切な友人が死に、家族が炎に包まれて、彼は力に目覚めていた。電気を操作する、という力をいつの間にか手にしていた。彼には、もうじき二歳になる娘がいた。彼女は、火の海の中に、彼の妻と一緒に包まれて、黒焦げになりながら、この世界から、命を消し去ってしまった。炎の中で、彼が自殺に追い込んだ少年の残像が浮かんで、彼を嘲笑しているかのように思えた。お前の幸福は欺瞞だ、と、その少年から言われたような気がした。彼は此れまで、何一つとして不自由の無い家庭や、環境、友人関係、職場に恵まれて生きてきたのだった。

時空が歪んでいくかのように、錯覚する。

二つの出来事が、いや、三つの出来事が、映像となって、彼の網膜に入り込んできていたのだ

った。

瞬時、ファタラは、目の前の敵であるルブルと眼が合う。

彼女の両眼は果てしない程に、彼の愚かさを嘆き、そして嘲っているかのように思えた。

何に、怒りを向けているのだろうか？

.....お前は、お前の罪を知れ。

耳元で、何者かが、自分の声で言っている。空耳だと分かっている、消えてくれそうにない

。

ごろり、と。

ファタラの首が、地面へと落下していく。

雷撃は、あらぬ方向へと飛んでいく。

そして、途中で雲散霧消していく。

「おい、ルブル。何、やっているんだよ？」

ルブルは現れた者の顔を見て、とても嬉しそうな顔をする。

「あら、セルジュ。遅かったじゃない」

「まあ、色々な。しかし、俺はアイーシャを名指しで呼んだが、来るのかな？ 奴は」

「さあ、あの子の事、私はよく分からないから」

十

ガンギャは、林の中に隠れていた。

ファタラが殺された。

かなり、拙い事態へと変わっていつている。

漆黒のドレスを身に付けた女の他に、もう一人、黒衣を纏った黒髪の女が現れた。そいつが、ファタラの首を落とした。その女は、右腕の肘の辺りから、刃を生やしていた。

ガンギャは、風の刃を操る力を持っていた。

それで、遠距離から、敵を殺すつもりでいた。

しかし、どうしても、あの“収納ケースの中身”が気になって、狙撃出来ずにいたのと、もう一つは、あの敵の首領らしき女は、確かに.....ガンギャのいる方向を見て、笑っていたのだ。

それは、とてつもなく不気味だった。

得体がまるで知れなかった。

しかし、臆病風に吹かれて、攻撃出来ずにいたのも確かだ。位置が何故か、“ファタラを巻き込みかねない距離にいる”事を気にせず、何が何でも攻撃するべきだった。

.....何だ？ この威圧感は何？

分からない。

だが、もう一人、敵が出てきたという事は、考え方を換えれば僥倖物なのだ。敵を纏めて、二人、始末出来る、という事も意味しているのだ。

彼は近くで見守っていた、アムルという討伐隊メンバーの女に指で指示を出す。

このまま、突撃してしまおう、と。

しかし……………。

絶望が、目の前に広がった。

そいつと、眼が合ってしまった。

大体、数十メートルは離れていた筈なのだ。

しかし、距離なんて意味を為していなかった。

数秒の間だったのだろうか。

「おい、お前、何だ？」

新たに現れた、黒髪の女が、ガンギヤの前に立っていた。

アムルの方は、動けずにいるみたいだった。

次の瞬間。

ガンギヤの肩が掴まれて、勢いよく、道路の中へと投げ飛ばされてしまう。

次の瞬間。

ガンギヤは、気付くと、敵の首領の女と対峙してしまっていた。

「何か、視線を感じたような気がして、この辺り一帯の樹木や岩盤の姿に擬態させた、ゾンビ達に監視を行わせていたんだけれども、気付かなかったのかしら？ 一応、ゾンビ達、私にモールス信号のようなものを送って、貴方達の存在を教えてくれていたのよ？」

そう言いながら、ルブルはガンギヤを見下げていた。

「ああ、ちなみに俺の名はセルジュだ。宜しくな」

完全なまでに、そいつは彼を見下していた。

「貴方の名前は何？ 私はルブルと言うのだけれども、私の名前はちゃんと伝わっている？」

「俺は、ガンギヤだ。ファタラとは、旧知の友人だった」

ガンギヤは、もう覚悟するしか無かった。

彼は、自身の能力を全力で、発動させる。

辺り一帯に、風が渦巻いていく。

十

「成る程、風使いなのね？」

ルブルはくすり、と笑った。

ガンギヤは両手で、風をコントロールしているみたいだった。

余りにも、あっさり勝負は決まっていた。

セルジュが収納ケースを縦に置く。

収納ケースの鉄製の表面は、つるつるに磨き上げられていて、それは綺麗にガンギヤの姿を映し出していた。

風の刃によって一帯を消し飛ばそうとするガンギヤを映し出すケースに。

セルジュは右肘の刃で深く傷を入れる。

すると、ガンギャの胸元が勢いよく切り裂かれる。

何度も何度も、セルジュはケースを刻んでいく。

収束された風の砲弾が投げられるが、ルブルとセルジュへ向かわずに、在らぬ方向へと飛んでいく。二人の髪が風に靡いた。

「三回……、いや、四回かなあ、って思うの。もっと多いかもしれない」

ルブルは少しだけ、笑い顔に呆れたような表情も混ぜていた。

「これ、貴方達が私を倒せたであろう、チャンスなんだけれども。特に、あの電撃使いは私を殺せていたんじゃない？ 貴方も狙い撃ちにしていたでしょう？ 何で、出来なかったの？ まさか、単に私が怖かっただけ？ 何で、そんなに心が弱いのかしら？」

ガンギャは、倒れながらも、まだ全身に風の刃を纏っていた。

このまま触れようとすればおそらくは、バラバラになるのだろう。

彼の作り出す風の刃は、地面を深く抉り続けていた。

回転するノコギリにでも触れるようなものだ。

しかし……………。

「まさか、人間の限界？ いざとなつて、震えが止まらなくなったの？ こんなに、私は隙だらけだったのよ？ もし、まともな手練だったら、何度も私を殺している。でも、貴方達は駄目だった」

ルブルは、大地に転がるガンギャを見下ろしていた。

「そう言えば、グリーン・ドレスもアイーシャも、私を殺し損ねた。ねえ、種明かしをすると、私のやっている事って、つまり“ブラフ”なのよ？ まさか、この程度で勝てるわけが無い、って思い込んでいない？ もうちょっと頑張れば、私を殺せていたのに、みんな駄目になっている。それは疑心暗鬼から。思わないでしょう？ まさか、敵の首領が、本当に隙だらけだって。少し、全力を出せば、もっと意志が強ければ、私を殺せていたんじゃないかしら？」

ガンギャは再び、怒りで風の刃を作り出そうとしていた。

それは、大きな鳥のような姿へと変えていく。

セルジュは。

無慈悲に、収納ケースを深く抉って、ケースに映し出されたガンギャの喉に傷を入れる。

すると、ガンギャの首が半ば切断されて、彼はそのまま絶命したみたいだった。

そして。

「ルブル、……お前、本当に油断し過ぎだ」

セルジュはそれだけ言うと。

眼にも止まらない速さで、収納ケースの中を漁ると、中から、ショット・ガンを取り出す。

そして、道路の外にある暗い林の中へと銃弾を撃ち込んでいく。

小さな、悲鳴が上がった。

アムルは、悲鳴を押し殺す。

……ガンギャ、やられちゃうか？ 俺が何とかしてやるよ。

男は、そう言って、今、颯爽と現れたのだった。

彼の名前はゲルググと言うらしかった。

しかし……、余りにも無残だった。

丁度、ガンギャが捕まった後に、すぐ先ほど現れた、黒尽くめに、黒いマスクの男、ゲルググの頭が吹っ飛んでいたからだ。

彼は、ファタラとガンギャの応援を行おうと、先ほど駆け付けてくれて、ライフル・スコープで狙い撃ちにしようとしていたのだが、今、まさに照準が巧い具合に合って、敵の首領の女の頭を吹っ飛ばせるだろう、という状態まで持ち込めた処だった。

アムルは、冷や汗を流し続ける。

爆撃部隊は、後、何名残っている？

何か、連携がどうも取れていない。

何で、連携が取れていないんだ？ 即席で作った部隊だということも大きい。

アムルは、通信機を手にして、スロープに電話を入れていた。

スロープは、残念だが、諦めて逃げろ、とばかり言う。

彼女は、通話を切る。

自分の能力では、ガンギャを助けられない。

そう、悟っていた。

彼女は、林の中を駆けていく。

身体が少しだけ浮かんで、足の裏から蒸気のようなものを発射させて、走る速度を上げていた。しかし……。

彼女の全身に、矢のようなものが、撃ち込まれていた。

彼女は、地面に倒れて蹲る。

見ると、樹木の一つから手が生えていて、弓と矢を手にしていた。

「ああ、うううううっ……………」

その樹木の傍には、幾つかの、生首が転がっていた。

爆撃部隊の仲間達の変わり果てた姿だった。

苦痛に満ちた表情を浮かべている。

更に、後ろの辺りから、ごとり、ごとり、と物音が聞こえた。

アムルは振り返る。

すると、知った顔が暗闇の中に浮かんでいた。

「ホセ……………？」

ホセと呼ばれた男は、蒼白な顔をしていた。

彼はサーベル使いの男だ、手に自身の長サーベルを手をしている。

彼の下半身から下は、幾つもの犬や人の脚、人間の上半身が生えていた。

「アムルかい？ なあ、お前も俺の俺達の仲間になろうぜ？」

そう言うと、ホセは転がっている生首を手にして、自分の身体に張り付けていく。すると、生首達は、けたけたと、水を浴びた魚のように動き、笑い出していた。

「仲間になろうぜ。気持ちいいぜ。ルブル様の仲間になろうぜ。気持ちいいぜ」

アムルは、ひたすらに震え続けていた。

「永遠の命だ。永遠に生きられるんだ、俺は、俺は嬉しいんだ」

ぐるり、ぐるり、と、ホセの顔が……首では無く、顔が、目鼻口ごと一回転し続けていく。

アムルは、右手に彫られていたタトゥーを見せる。そこには、人食い植物のような怪物が彫られていた。それが、ベリベリっ、と剥がれていく。そして、その怪物が、ホセに食らい付く。

「ああ、ああ、痛くないなあ。何でかなあ？　なあ、むしろ気持ちいいんだ。仲間に、仲間になろうぜえ？」

アムルは、どうやって自害すればいいかばかりを考え続けていた。

十

ペイガンは、逃げ続ける、救護班の中から抜け出して、道路を歩き続けていた。

まるで、赤い天使に呼ばれているかのようだった。

「カシュー？」

彼は、友人のケンタウロスの顔を見た。

彼は右腕で、彼の右腕を握り締めている。

「お前、何処に行くんだ？　戻ってくるんだよ」

カシューの眼は強かった。

「戻れなくなるぞ？」

彼はペイガンに強く言う。

「カシュー、お前、どうして此処に……？」

「お前が、心配になったからさ。だから、わざわざ此処まで来たんだ」

ペイガンは、息を飲む。

ケンタウロスの身体が、バラバラになっていく。そして、さらさらと砂のように崩れていく。

そこには、二人の黒髪の女がいた。

一人は、漆黒のドレスを纏い、超然としていた。もう一人は、コサージュの付いた帽子を被り、肘や膝や腰から刃を生やしていた。

「貴方は逃げないのかしら？」

「お前、今、誰と話していたんだ？」

二人から、同時に、訊ねられる。

ペイガンは、放心した顔で、二人を見つめていた。

「貴方……」

真っ黒なドレスを纏った黒髪の女は、ペイガンに言う。

「ねえ、ダートに入らない？　面白そう。貴方、何ていうか、“此方側の人間”のような気がしてな

らないから」

ペイガンは、まるで心臓を鷲掴みにされたような気分になった。

……戻れなくなるぞ、ペイガン。

ペイガンは、地面を見つめていた。

すると、顔だけのカシューが地面に張り付いている。彼は柔和な表情を浮かべていた。

そして、やっと彼は理解する。

このカシューというケンタウロスは、彼の“もう一つの人格の声”だったのだと。

……ペイガン、逃げろ。そいつらは、お前に悪魔の囁きを行っているだけだ。

「ふん、私達の側に入らないのなら。貴方はその……危険過ぎるから、今、始末しようと思っ
ているんだけど」

ペイガンは、選ぶ事は出来なかった。

ケンタウロスの男の顔が、砂へと変わっていく。

ペイガンは、自分の精神が、本当はとっくの昔に壊れてしまっていて、このカシューという男
の存在を作り出す事によって、自分は正気の世界を保っていた事に気付いたのだった。

十

討伐隊は、やはり、敗北して帰ったのだった。

スロープは、項垂れながら、憔悴した顔でアサイラムにある、レウケーの部屋を訪れる。

六十名近くにいた中で、生き残って帰ってきたのは、救護班の数名。他は、死んだか、行方不
明になった者達ばかりだ。

やはり、駄目だったのだ。

これをちゃんと知らせるべきかどうか、スロープは悩んでいた。

レウケーは、知らせるべきだろうと告げる。

怒りや憎しみをどれ程、ぶつけても、決して、ダートには届かない。相手側の思うツボなのだ

。

十

世界を壊そう。

不条理な現実が赦せないから。

ペイガンは、淀みの淵の中へと沈んでいくかのような感覚を覚えた。

「こんにちは、貴方の名前はペイガン、って言うのね」

黒い魔女は唇を歪めている。

「今、私の思念を送り続ける。私の精神世界を感じ取れる筈。ヴェルゼにも、ニーズヘッグにも
、他の者達にも見せて上げた。私の心の中を、渦巻いているものを。ねえ、貴方は、どんな言葉
で答えるのかしら？ 知りたいなあ」

さあ、この世界を壊そう。みんな殺してしまおう。彼に語り掛けてくる無数の声があった。腕達、彼に掴み掛かってきているかのようだった。

まるで、それは合唱のようだった。

一つのオペラのようだった。

「私はルブル、宜しくね？ 処で、貴方は、何を“視ている”のかしら？」

彼女は、せせら笑っていた。

痛みを感じない。他人に対する共感を持つ事が出来ない。それは、あの瞬間以来、起こってしまった出来事だ。自分は何処に行ってしまうのか分からない。もしかすると、もうとっくに、自分は死んでいるのかもしれない。死者の世界の中にいるのかもしれない。

「ルブルって言うんだよな？」

ペイガンは確認するように、聞き返す。

「ええ、そうよ。ペイガン、貴方は、どんな力があるのかしら？」

そう言えば、自分達は言葉が通じ合っている。

自分の住んでいた地域の言語は、少数民族の物で、広い地域で使われている共通言語を使う者達と、まともに会話出来ないにも関わらずにもだ。

もしかすると、魂だとか、精神世界の中で語り合っているのかもしれない。

「ルブル、何となく、俺はあんたの感情が見えるかのようだった。あんたは……お前は、他人の……人間の罪を追及するような事を宣言しておきながら、自分自身を完全に柵に上げているよな。

「ふふっ、そうね。貴方はそれを糾弾したい？」

「いや、俺は事実を聞いているんだ？ そうなんだろう、って」

今、自分を支配している感情が何なのか、ペイガンは慄く。

何となく、懐かしささえもあった。

経験などした事無い筈なのに。

「ルブル、お前は卑怯な立場に居続けるんだろ？」

ペイガンは、皮肉っぽく笑い、何か韜晦があるような口調で訊ねた。

「ええ、そうね。だって、私は人間の感情なんてよく分からないから。何で、戦争って起こる？

何で、人間は分かり合えない？ みな、生まれた瞬間から居場所を取り合っているのかしら？

ダートの侵略と破壊が始まる前から、人々はみな不幸だった。戦争や格差が広がっていった。ねえ、人間ってのは何なのかしら？ 私はメスを入れようとしただけ。大きな破壊によって、全てが露になるんじゃないかって思って」

「お前は自分が悪だ、って何処までも何処までも、自覚しているんだろ？ 他人を踏み潰す正当化がしたいだけ。違うか？」

「ふふっ、何も変わらないわね？」

ルブルは、ペイガンの顔を覗き込む。

「私の事、憎く無いんでしょう？」

「そうだな。……憎く無い。お前の仲間に、俺は大切な人をみんな殺されたけれどな……」

底無しの空虚さが、心の中へと広がっていく。

きっと、あの日に、自分は人間を止めてしまったのだ。痛みに対しての共感だとか、愛する者達を失う悲しみだとか、そういった人間らしい感情を喪失してしまったのだろう。

そう。

この先は、暗闇ばかりだ。闇のクレバスが大口を開いているのだ。

人間を解体していった先に、何があるのか。まるで、誰もが分からない。

幼い頃に夢見ていた、漠然と、この世界には唯一の絶対的な悪人がいて、そいつを倒せば、この世界は救われるのだと思った。自分は“正義になれる”のだと思った。

ペイガンは、まるで共振のように、似たような感情に触れている。もしかすると、此れが自分の力なのか？ 澄んだものは、消え去っていく。

ルブルの両眼が、確かにペイガンを見つめている。

「私を殺す？ 貴方はメンバーに加入したけれど、それもいいかもしれない」

よく分からない事を彼女は言っている。

自分自身の命さえも、何かの担保にしているかのような口調だった。

「最初は、アサイラムを襲撃した。そこは、沢山の犯罪者達が守られて平穩に暮らしているから。アサイラムは、能力者の犯罪者という存在を守ろうとした。收容されている能力者達を憎悪している市民達も多い、って聞いているわ。何故、死刑にせずに放置しているのかって。散々、そんな事が言われているらしいわね」

その声音は、強く皮肉めいていた。

「アサイラムは、正しい事をしようと思って。犯罪者達を死刑にせず、その異能を人類の役に立てようとした……………」

彼女は軽く両腕を広げた後、戻す。

「ふふふっ、ペイガン。悪って何だと思う？」

「ああ……？ さあ、俺にはまだ答えを出せずにいる。正義も悪なのかもしれないから、俺がずっと信じていた正義も……………」

「メアリーは、誰もが悪の感情を抱えている、って言うわ。そして、イゾルダは、全ては人類は個人個人の利益で物事を動かしているだけだろう、って言っていた。だから、みんな、悪っていうものの幻影を追っているだけ。ドーンは、人類は、私を殺して終わらせるのもいいかもしれない。でも、それで解決して満足して、本当に当たり前の平和な日常を唯々諾々と続けていくのかしら？」

「俺のあんまり良くない頭で考えるけどさ。……、善と悪の二項対立は在り得ないんだろ。それくらい分かっているよ、俺はずっと、どうすればいいか分からない。未だ、夢の世界を彷徨っているようで。正義が何なのか分からない。お前に納得されるつもりも無い」

強く、剣呑な口調で彼は言う。

「でも、多分、何となく、お前は俺の大切な人達を殺した。だから、いつか復讐しなければならんっては思っているぜ」

それが、今じゃないだけ。

「いつでも、向かってくるといいわ。グリーン・ドレスとアイーシャがそうしたように。私に対しての、復讐心を抱える貴方を、私は肯定する」

そう。

どんなに激昂していても、力の差異なんて埋められない。

か弱い人間一人が出来る事なんて限られている。

自分もそんな人間の一人でしかない。この広大な世界に大きな影響なんて与える事なんて出来はしない。

ルブルはきっと、試しているのだ。

人間は善なのか悪なのか。

何の為に、この世界は存続しているのか。

全てがおぞましく、全てが素晴らしい。

そんな世界も、素晴らしいのかもしれない。

卑賤にして、崇高。

全てを裏返しにした世界。

その中で、時間が永遠に止まってしまえばいいと思った。自分は卑小な人間でしかない。だから、立ち上がって、敵に剣を向ける事が出来ないのだから。

十

レウケーは、ケルベロスの見舞いへと向かっていた。

彼は、イゾルダから受けた傷の回復が遅いのだと言っている。

ケルベロスは、シーツの中へと包まっていた。

「やあ、レウケー」

彼は、少しだけ元気そうな顔をしていた。

「ケルベロス……………」

レウケーは溜め息を吐く。

「お前は何で、そんなに自分が正しいと思えるんだ？ 何がお前を支えているんだ？」

そう言いながら、レウケーは、ケルベロスのシーツを開く。

傷口が化膿したまま、化膿が、胸や腹に広まっていつている。

普通の人間なら、とっくに死んでいるのだろう。

「病原菌かな？」

ケルベロスは、ははっ、と笑う。

「治療を行える、色々な能力者達を集めてやらせてみたんだけど、駄目だった。エートルの実験の一環で生まれたイゾルダの毒を治す事が出来ない……」

「お前……」

レウケーは、彼の両脚を見て、何とも言えない感情に襲われる。

彼が以前、イゾルダとの戦いにおいて、バキバキにへし折れた両脚は、見事に、奇怪な再生を

遂げており。彼の両脚は、まるで樹木のような形状をしていた。そして、その樹木には、無数の顔が生まれていた。

人面疽だ……………。

これは、呪いだっただ。

「俺が、切り落としてやる。大丈夫だ。義足の用意ならしてやる。それから、俺達、能力者の力ならば、両脚くらい復元させてやる」

この程度の事しか、自分には出来ない。

もし、これが汚れ役だとするのならば、望んで引き受けようと思う。

アサイラムの所長の、人類の希望の手足を斬り落とすのだ。

何らかの呪いによって発動しているものならば、二度と復元出来ないかもしれない。それでも、ケルベロスには覚悟を決めて貰わなければならなかった。

「やるぞ。俺が切り落とす。代えの脚は、すぐに用意させる。お前を死なせるわけにはいかない。みんなお前を必要としているからなっ！」

ケルベロスは奥歯を硬く噛み締めていた。

レウケーは、帯刀していた刀を引き抜いた。

刀が滑る、嫌な音が鳴り響く。

「左腕は、回復を始めているんだろ？ なら、それ一本でしばらくは生活出来るな？ 次は、右腕も落とすぞ。このまま、麻酔無しだが、いいか？」

「ああ…………。脚の感触が無いんだ。……………」

彼は一応ながら、達人並の剣豪でもあった。

しかし、役に立たない。

執刀医紛いの事しか出来ない。

レウケーは、再び、一閃を振るう。

ケルベロスは、今度は苦悶の表情を浮かべ、思わず小さな悲鳴を上げていた。

十

メビウスは、此処しばらくの間、アサイラム内に待機しているみたいだった。

敵の動向を探りたいのだが、中々、動けずにいるみたいだった。

ホーリー・ドラゴン。

そして、ニーズヘッグ。

そいつらの動きを警戒しているみたいだった。

ルブルは、更に、新たな脅威を増やそうとしているかもしれない。結局の処、動かしているのは、ルブルと、そしてメアリーの二人だろう。

明るく、前向きな状況も存在する。

イゾルダの生体兵器の駆除は、少しずつ終わりが見え始め、グリーン・ドレスに焼かれた街の復興も、何十年も掛けて行いうんじゃないかという目処も立っている。移民達が、住める場所を求

めて、逃げ続けている。

レウケーは、メビウスと会う。

「デス・ウィングとかいう奴の居場所を教えろ。ケルベロスの両脚と右腕の代えも用意させる。俺がその女と取引に向かう。メビウス、この俺を暗黒の地とやらへ連れていけっ！」

守りたい。

そんな事を、切実なまでに思った。

自分には、責任があるのだと思った。

その責任を背負って、ケルベロスに答えようと思った。

自分はダートとの戦いで負けたが、自分自身の信念が敗北したわけなんかじゃない。

彼は、ケルベロスとずっと対話してきたような気がする。何が浅はかなのか、何が善なのか、誰にも分からない。

何を倒せばいいのか、何を守ればいいのか。悪とは、つまり誰なのか、何なのか。もはや、自分は正義という信念を持ち続けられるのだろうか？

討伐隊を行かせるべきでは無かった。スロープが、そう思い悩んでいた。レウケーは知っている。彼が決して、心が弱い男では無いという事を。

ただ、実力が足りなかった。

そして、その差異は激情や、努力や精神論では埋めようが無かった。

ただ、それだけの事なのだ。

そこは、砂漠地帯にあった廃屋だった。

メビウスは、此処から向かえるのだと言う。

そこには、壁に幾つもの魔方陣が描かれていた。

廃屋の奥にまで来ると、頑なに閉ざされた扉があった。

メビウスはそれをこじ開けるように、開いていく。

レウケーは息を飲む。

地獄の風が吹き荒れているかのようだった。

そこは、闇の大地が広がっていた。

「どうした、行かないのか？」

レウケーは、帯刀している剣の柄を強く握り締める。

「ああ、行くぜ……」

十

ルブル。

メアリー。

クルーエル。

セルジュ。

イゾルダ。

グリーン・ドレス。

アイーシャ。

ヴェルゼ。

ミソギ。

エア。

ニーズヘッグ。

ペイガン。

.....

十三名まで、後、一人だ。

ルブルは、数の縁起のようなものを重視している。忌み数だからだ。

後一人は、どのような形でやってくるのだろうか？

メアリーは、それが楽しくて仕方が無い。

十三名揃えば、終わらせよう、とルブルは言い始めている。メアリーも、それに従うつもりでいた。元々、ダートの侵略にそれ程、明確なプランなんてものは無かった。おそらくは、人間とは何なのか？ という事を知りたいが為に、ルブルは行動したのだと思う。たとえば、聖書においては、神が七日で世界を創造した事で、七という数字に意味が与えられたように。ルブルは十三という数字に意味があると思っているのだ。

十

高層ビルの頂上で、一等のスイート・ルームで夜景を見ながら、ミソギは高級なバーボンを毎夜飲むのが日課だった。そして、純度の高い“フォクシー”という幻覚作用のあるドラッグも煙草状にして好んで愛用している。

ミソギは、愛というものを知らない。

だから、他人が傷付くという事を理解する事が出来ない。人間というものは、搾取し、搾取され合う存在でしかないのだ。

柔らかなベッドで、彼は、女達を呼び集めて、楽しむ。女達は、表の顔は女優やアイドルや社長秘書などの顔を持っている。彼女達は、ミソギに取り入りたがる。だから、彼は女達をベッドに連れ込む。

愛なんてものは無い、ひたすらに、ミソギは彼女達を嘲っている。

表の顔は、有名なアイドルをしている女は、ミソギやミソギの部下とアブ・ノーマルな性行為を平気で行う。表の顔は、清楚なイメージを保っている女がだ。彼女達は、自ら望んで、彼に取り入るのだ。彼がどれだけの悪人なのかを知っておきながら、彼に取り入ろうとする。

ミソギは女に.....、人間というものに、失望し切っている。

みな、金さえ積めば、どんな非道な事にでも手を染める。

金こそが、神なのだとか、ミソギは思っていた。

そう、金こそが、全ての神秘の原点であり、教典そのものだった。どんな宗教団体も、愛も

夢も、金のみで動いている。だからこそ、金は信じるに値する。

一部の例外は、能力者達だ。

彼らは狂っている。人間という領域の力を超え、更に、その思考回路も狂気の領域にいる。ミソギは彼らを理解する事が出来ない。

国家の汚点、汚職行為などを隠蔽する為にも、政治家などが彼の下へと訊ねてくる。ミソギは必要となれば、暗殺も請け負うし、軍事兵器を国家へと売り続けている。それに対して、モラルというものは必要が無いのだと考えている。

ミソギは、時たま、どうしようもない程に孤独だ。

デス・ウィングという女が、彼の心を悩ませている。

彼女はいつも、ミソギの理解の出来ない品物ばかりを欲しがらるからだ。人間の死体だとか、人を撃ち殺した武器だとか、自殺者が出た建築物だとか。

デス・ウィングは、所謂、ミソギにとって価値の無いものばかりを欲しているように思えてしまう。何が、そんなに面白いのか理解に苦しむのだ。

.....お前の精神の支柱にしているものは、面白くないが。お前の心の歪み自体は面白い。それに、お前は私が愛しいと思ったものを提供してくれる、とても嬉しいものだ。

デス・ウィングは、普通の人間が欲しがらないものばかりを欲しがらる。むしろ、金を払ってでも、処分したがるものを欲しがらる。

ミソギにとって、人間は動く肉のオブジェにしか過ぎない。

彼は、自分はマシンであれば良いと思っている。少年時代はずっとそうだった。いつしか人間らしい感情というものを、何処かに失ってしまったような気がする。だから、彼には芸術に触れての感動とかいうものがよく分からない。美しい風景を見て、心を揺さぶるという事なども無い。女を肉欲以外で好きになるという事も無い。

彼が売り捌く兵器の被害によって苦しむ人々の映像を見た事がある。そこに、かつて飢餓に苦しんだ自分のような子供を多々見る事もある。けれども、ミソギにはそんな映像を見ても、もはや何も感じない。この世界においては、搾取されるものは、ゴミ以下でしかない。それだけなのだから。

ミソギは、もはや他人を憎む感情さえも分からない。命よりも大切なのは、金だ。

愛よりも、大切なのは金だ。文化や伝統よりも、道徳よりも、芸術よりも、自然よりも、充実した人生などよりも、何よりも大切なのは金なのだ。

資本主義と、その中で流動する金だけが、彼にとっての神だった。そして、何よりも、金を動かしているのは戦争なのだろうと彼は考えた。だからこの世界において、権力と暴力こそが全てであり、銃や爆弾などが意味のあるものなのだろうと考えた。後は、肉欲や食欲や物欲などの欲望を満たすものが、適当にあればそれでいい。それだけが、彼に人生の全てで、他人の人生も実際はそんなものでしかないのだろうと思った。

デス・ウィングは言う。お前は、死にたいという衝動さえも奪われたのだろう、何かに復讐したいという憎悪さえも、もはや失われてしまったのだろう。お前の心は死体でしかないのだ、と

ミソギは腹の底から笑った。誰に何を思われようが、それで構わない、と。
そんなお前が面白い、と、デス・ウィングは言うのだった。



To be continued